
新潟県における自由大学運動

はじめに

長野県上田市で始まった自由大学運動は、1922年には新潟県に広がっていく。新潟県の自由大学運動については、森山茂樹が渡辺泰亮の保存していた書簡類や北越新報などをもとに紹介した（森山 1971）のち、山野晴雄が魚沼・八海両自由大学の全体像を明らかにし（山野 1974；山野 1975）、その後、佐藤泰治が広範な資料収集を行い、資料集（佐藤編 1977；佐藤編 1981）にまとめるとともに一連の論文（佐藤 1978；佐藤 1979；佐藤 1980a；佐藤 1980b）を発表したが、土田杏村のめざす自由大学の理念から逸脱していることを強調して、渡辺泰亮や自由大学に対する評価は低い。安達朋子は、聴講者に対するアンケート調査の結果をもとに聴講者の側からみた自由大学像を明らかにしようとした（安達 1983；安達 1986）。最近では、芳井研一が、教員の間での大正新教育や童話教育論と創作活動、地域住民の俳句ネットワークなど、八海自由大学の地域には自由教育と創作の風土が広く存在していたことを明らかにしている（芳井 2019）。

新潟県の自由大学運動については、上田自由大学や伊那自由大学と比べると研究の蓄積は少ないものの、さまざまな視点からの研究が進められてきた⁽¹⁾。ここでは、先行研究をふまえつつ新潟県における自由大学運動を再構成し、その歴史的意義を検討してみたい。

1. 魚沼夏季大学の開講

新潟県の自由大学運動の舞台となった北魚沼郡・南魚沼郡は、信濃川とその支流の魚野川流域の魚沼三山に囲まれた地域である。周囲を山に囲まれたいわゆる盆地となっているため、夏は気温も比較的高く、蒸し暑い日が多く、冬は雪が降り積もる豪雪地帯である。

産業は、南・北魚沼郡では、農業と蚕糸業が盛んであった。1922年現在の統計では、新潟県全体の生産総額約2億7767万円のうち、農業は2位の約9728万円（35%）、蚕糸業は4位の約1934万円（7%）であるのに対し、北魚沼郡では郡全体の生産総額約965万円のうち、蚕糸業は1位の約355万円（37%）を占め、南魚沼郡では郡全体の生産総額約844万円のうち、蚕糸業は1位の農業約317万円（38%）に次ぐ2位で約258万円（30%）を占めていた（新潟県知事官房 1924：128-129）。また、1922年現在の人口は、北魚沼郡は12927戸、76240人（県全体の4%）、南魚沼郡は10453戸、63368人（県全体の3%）であった（新潟県知事官房 1924：45）。

魚沼地域では、早くから上越鉄道敷設運動が進められていたが実現せず、1922年8月になって信越線の長岡駅側から接続する堀之内駅までが開通した。南魚沼郡の浦佐駅まで開通するのはその1年後の23年9月であり、六日町駅は同年11月であった。

この堀之内駅の開通を記念して夏季大学を計画したのは、北魚沼郡堀之内村の商工業に従事している青年たちの親睦団体「響俱樂部」であった。響俱樂部は、同村の青年たちが1919年2月に十日町鉄道青年期成会を結成し、上越鉄道から飯山線十日町への分岐駅を堀之内に誘致する運動を展開したが、越後川口が分岐駅となり、失敗に終わったことから、同年4月に「堀之内の発展策を真剣に研究し実行する目的」で結成されたものである。メンバーは中林昌平、森山亀吉、長尾喜三郎、小川賢太郎、中条登志雄、下村正作、林栄作ら20数名であった。中林によれば、会長もなく、会則もない、ただ当番が2人で会を運営するというものであった（中林 1971：74）⁽²⁾。

かつては三国街道の拠点として栄えていたこの地域の人々は、信越線の中継地である長岡市などの発展とは対照的に僻地化して取り残されたという不満を募らせていた。やっと鉄道がつながり駅ができることで経済的な発展が見込めるとする高揚感が響俱樂部の青年たちをとらえ、記念事業を計画させたといえる。

夏季大学は、丸末書店の番頭である中条登志雄が響俱樂部のなかで委員長となり、以前から懇意にしていた伊米ヶ崎小学校の校長渡辺泰亮にはかつて、具体化したものである。長尾喜三郎によれば、6月頃に「中条の提唱に依り、夏季大学講習会を開いてはとの問題は之は為すことに決し」たからであるという（長尾 1969：11；佐藤 1980a：58）。丸末書店は、堀之内の中心部にある書店で、1890年頃に開店したといわれ、主人は宮保治である。その息子肇は後に歌人となった宮柊二⁽³⁾であり、保治の弟宮芳平は後に教員・画家となっている。中条登志雄は、岩船郡村上町出身で、小さいときに父を亡くし、1918年にはスペイン風邪の流行で母と兄を亡くして天涯の孤児となり、丸末書店の店員となった。書店ではよく働き、かなり遠方の小・中学校やその他の得意先に注文の書物を配達に行ったという（戸田 2016：177-178）。中条が渡辺泰亮と懇意にしていたのも、学校をよく出入りしていた関係があったからである。夏季大学の事務所は丸末書店内におかれた。

渡辺泰亮は、中条から夏季大学の計画の相談を受けると、新潟師範学校時代の2年先輩である在野の哲学者土田杏村を講師として招くことにした。2人は新潟師範時代、「一緒に写生に出かけるなど」親交があった（上木 1982：113；渡辺 1943：278）。新潟師範を卒業後、土田は、1911年4月東京高等師範学校予科に進学、15年9月には京都帝国大学文科大学に進学、18年9月には引き続いて大学院に籍を置き、6年間在学している。一方、渡辺は、13年4月に新潟市内の鏡淵小学校訓導となり、翌14年には母校の伊米ヶ崎小学校訓導に移り、19年に新潟師範付属小学校訓導に異動したが、20年には30歳の若さで伊米ヶ崎小学校長となっている⁽⁴⁾。佐藤泰治は、新潟師範卒業後も渡辺と土田との間に親交が続いていたとする従来の見解に対して、疑問を挟んでいる⁽⁵⁾。おそらく2人は、新潟師範卒業後はそれぞれの道を進んだため疎遠になりつつも、渡辺は土田への関心はもっていたと思われる、渡辺も「参画した可能性がある」思想問題研究会が21年8月に土田を招いて講演会を開いており、この講演会に出席した可能性が高い（佐藤 1978：26；佐藤 1980a：58-59）。渡辺がのちに「我等の自由大学」（『新潟毎日新聞』1925年8月1日）の中で「大正十年八月組織の準備を了す」と記していることに対して佐藤泰治は、「杏村と泰亮の間で、この機会に具体的展望を見出す語らいなり合意できた位の意であろうか」と述べているが（佐藤 1978：26）、おそらく土田から上田で話が進んでいる自由大学のことを聞き、地元で夏季大学なり講習会なりを開く構想をいただくようになったことを指しているように思われる。

土田が夏季大学の講師を承諾すると渡辺は、開講に先立ち、講師土田杏村を紹介する文章をみずから執筆し、『越後タイムス』（1922年7月23日）、『新潟毎日新聞』（1922年7月27日）に載せるなど、この夏季大学の企てに積極的に協力した⁽⁶⁾。

渡辺が執筆した紹介文は、両紙とも同文であるが、「魚沼の夏季大学講師土田杏村氏を紹介す」と題するもので、「北魚沼郡堀之内響俱樂部主催のもとに魚沼夏季大学は組織されました。ゆくゆくは

範囲を拡めて中越夏季大学を組織しようとして諸般の準備中です。魚沼夏季大学の企ては余が多年の宿望でありました。ここに熱心なる同人諸君の奔走によつて容易にしかも上越鉄道堀之内駅開通機会に於て現代哲学者として最も畏敬する文学士土田杏村氏を聘して第一回講習が開かれるといふことは魚沼文化のため直接間接大なる貢献あることを衷心祝さなければなりません。私は響俱樂部同人諸君の懇請によつて講師招聘に関して多少の労をとつた関係上ここに同氏を紹介するのは光榮を有することをよろこびます」という一文ではじまり、土田杏村の業績を紹介したあと、最後に「講演は教育の基礎たる哲学となつてゐる筈。参考書には同氏の最近著自由教育論上巻を使用することに打合せしてあります。自由教育論も随分といろんな誤解や反感を買つてをります。けれども其の自由の意義が殆んど究められてないやうです。（中略）教育改造論のかまびすしい今日社会改造の根本整理として自由と奉仕とを真向にかざして突進してゐられる氏にまつて、教育と自由との関係が解明されることはいかに痛快なことでありませうか」と、この講義の意義を述べている（渡辺 1922、佐藤編 1981：173-174）。

魚沼夏季大学は、8月25日から27日までの3日間、堀之内小学校を会場に開催された⁽⁷⁾。聴講料は1円であった。土田杏村は、このとき、「教育の基礎としての哲学」と題し、『自由教育論』上巻（内外出版、1922年）をテキストを使用して講義を行った。土田は、渡辺に送った講義要項で、「今回ノ講義ニ於テハ右要項ノ中ノ第一論ヲ主トシテ講義シ他ヲ簡略トシ第二回以後ニソノ第二論以下ヲ順次詳論ス」と書き送っており（渡辺泰亮宛土田杏村の手紙、1922年8月3日、佐藤編 1981：77-78）、第一論を中心に講義をしたことが知られる。講義要項の第一論を示すと、次のようであった。

「第一論 教育ノ意義 問題ノ提出 教育者ト被教育者 教育可能ノ問題 被教育者ヘノ影響
影響ノ継続的意識的 環境ノ問題 窮極理想ノ予想 批判的教育学ノ立脚点 教育概念ノ中心
的構成 教育ノ客体 人格自律ト自由教育 教育者ト教育客体 影響者特質」

土田は、この講義を翌年度、翌々年度と継続して行く予定にしていたが、22年10月の上田自由大学での講義を最後に咽喉結核のため、翌年以降自由大学には出講していない。

受講申込者は約300名に達したといわれるが（『十日町新聞』1922年8月25日、佐藤編 1981：174）、佐藤泰治の集計（第1表）によれば、有料参加者の申し込みは155名で、決算書では聴講料収入は163名（うち名簿落ち20名）となっており、これに事務局等の人数を加えると、聴講者は約180名程度であったと考えられる。職業別では、155名のうち、85名（55%）が教員で最も多く、次いで農業の12名、家事11名、商業9名、官吏7名の順であった。男女別では、家事11名は全員女性で、教員のうち女性教員は5名で、計16名（10%）が女性であった⁽⁸⁾。地域別では、北・南・中魚沼郡からが131名（85%）と大半を占めているが、遠くは佐渡、岩船郡からの参加者もあった。特に地元の北魚沼郡からは101名（65%）と最も多く、堀之内村からは51名（33%）で、堀之内村に限ると、農業、商業従事者が教員と劣らず多かったことが知られる。年齢層は、堀之内村の29名のうち27名が10代から30代であった（佐藤 1980a：66）。

なお、教員の中には大正新教育の花形とみられていたパーカーストが提唱したダルトンプランを同僚たちに紹介した南魚沼郡城内村の城内小学校の山本重松や同僚の内田文治・井口正義が参加し（南魚沼市郷土史編さん委員会編 2018：219）、童謡教育や俳句に関心をもっていた浦佐小学校の桑原亮太郎や下中弥三郎が結成した啓明会の機関誌『啓明』を講読していた千溝小学校の八海正次も参加している。また、運営側の一人であった林広策も童謡を『北越新報』に載せたり、自由画教育を実践していた（林 1979：35）。

こうして始まった魚沼夏季大学は、この1回限りではなく、次年度以降も継続的に開催する計画であった。『魚沼新報』は「今回の試みは第一回として爾後毎年継続的に開催することにすでに講師の承諾を得たる由」と伝えている（『魚沼新報』1922年7月14日、佐藤編 1981：169）。

(第1表) 魚沼夏季大学聴講者地域・職業調査(1922年)

		教 員	官 吏	農 業	商 業	会 社 員	職 工	学 生	家 事	無 職	不 明	小 計
北 魚 沼	a 川 口	7 (1)									1	8 (1)
	b 堀之内	10 (1)	4	10	8	2	2	1	9 (9)	2	3	51 (10)
	a・b以外	31 (2)	1		1				2 (2)		8	42 (4)
	小計	47 (4)	5	10	9	2	2	1	11 (11)	2	11	101 (15)
南 魚 沼	c 伊米ヶ崎	6 (1)	2	2							1	11 (1)
	c 以外	11									5	16
	小計	17 (1)	2	2							6	27 (1)
中魚沼		3										3
I 魚沼小計		67 (5)	7	12	9	2	2	1	11 (1)	2	17	131 (16)
長岡・三島・古志		4									3 (1)	7 (1)
刈羽		2										2
蒲原		6									1	7
新潟		3										3
岩船		1										1
佐渡		2										2
不明											2	2
II 魚沼以外小計		18									6 (1)	24 (1)
I + II の合計		85 (5)	7	12	9	2	2	1	11 (11)	2	17 (1)	155 (17)
I + II の%		54.8	4.5	7.7	5.8	1.3	1.3	0.6	7.1	1.3	11.0	

注；() の中は女性。

出典；佐藤泰治「本県自由大学運動の研究」(『新潟県史研究』第7号、1980年)。

2. 魚沼自由大学への名称変更と第2回講座

土田杏村は、翌1923年の3月に入ると、「そろそろ講師をたのまないとおそい」と渡辺泰亮に葉書を書き送り、その中で、次のように記している（渡辺泰亮宛土田杏村の葉書、1923年3月1日、佐藤編 1981：79-80）。

「八月の会のこと、あれは二度にやるのは運動として不利益だ。八海と魚沼と合併するなり、八月だけ魚沼主催八海後援とするなりで、一度に一箇所でするほうがよいと思ふ。これは高倉君も君の方から帰って頻りにいって居た。もっと具体的君の案をきかせてくれたまへ。そろそろ講師をたのまないとおそい。」

この葉書の中に書かれている「八月の会」、すなわち夏季大学について、それが事実であれば、魚沼夏季大学だけでなく、八海夏季大学も開かれていてタカクラ・テル（高倉輝）も出講していたことになる。しかし、八海夏季大学については、その存在は疑わしい⁽⁹⁾。土田が八海の「八月の会」にふれた理由は不明である。

次いで4月13日に渡辺に手紙を書き送り、夏季大学の日程について、8月7日から3日間を提案して、次のように書き記している（渡辺泰亮宛土田杏村の手紙、1923年4月13日、佐藤編 1981：81）。

「それじゃあ甲州の済んだあと、直ぐ君の方へ向かってよい。汽車の都合がわからないが、六日を汽車で費やしたら、七日からは講義は出来よう。僕の正講義は三日間とし、特に宣伝のため、一日を（三日の外に）婦人デーにして、婦人問題の話をすることにしてもよい。場処は、やはり長岡辺から通学の便のあるところでないといけな。」

そして、もう一人の講師としてタカクラ・テルを紹介している。

「もう一人合棒は「文学概論」とし、文学士、高倉輝君にしたらどうかと思ふ。高倉君は英文出だが、ロシア語が達者でロシア文学通だ。劇も書き、「改造」に二、三回出した。これは信州の沓掛に居るから君の方へ直ぐ行ける。自由大学運動の一闘士だし、僕と運動を共にして居る快男子だ。

法律、経済よりも、此の方が落付き、二年目の計画としては「哲学概論」「文学概論」で調和する様に思ふ。

君の意向をきかせてくれたまへ。出来るだけ落付いた、魂ひのしっくり合ったものにしたい。」

渡辺の方は、この土田の提案通りに夏季大学の講座を組むことで準備を進め、『越後タイムス』（1923年5月27日）は魚沼夏季大学の第2回講演会は土田が認識論を、タカクラが文学概論を講義することを報じ（佐藤 1981：178）、『十日町新聞』（1923年5月30日）も同様の記事を掲載している。ところが、5月になると土田は、以前から痛めていた咽喉が悪化し、出講できなくなった。そこで土田は、恒藤恭、山口正太郎、山本宣治の3人に講師を依頼する手紙を出す旨の葉書を渡辺に書き送り、その中で「三人寄ったら面白い講義がくみ立てられるに相違ない」と記していた（渡辺泰亮宛土田杏村の葉書、1923年5月20日、佐藤編 1981：85）。

土田は、6月20日、山本宣治に宛てて、次のような出講依頼状を書き送っている（山本宣治宛土田杏村の手紙、1923年6月20日、佐々木・小田切編 1979：162）。

「夏休み中に講習を一つお願いしたいのですが、是非御承諾を願ひます。越後の長岡からもう少し山手へはいったところで、官僚に反抗する青年の団が主催の講習会に反対して自由な気分の講習をやらうといふのです。私は昨年参りましたが、本当に気持ちのよい連中です。高倉君にいつて貰ふ筈で、これは承諾を得ました。三日間だけです（全体では六日ですが）。併しもっと長ければなほ結構ですが。」

高倉君は承諾として、もう一人恒藤君、山口正太郎君のうち一人にいて貰ひます。結局三人で極く気楽に六日間をやっていただきたいのです。自然も非常に美しいところです。連中のいいことは（聴講生でなく、発起者の）、これは保証します。

日も八月中いつでもよいのですから、三人で妥協していただきたいのです。」

山宣に対する夏季大学への出講のすすめはタカクラ・テルからも行われたことが知られ、渡辺泰亮に宛てた手紙の中で、夏季大学への日取りを8月の「五、六、七日頃」と伝えたあと、「なほ山本宣治は拙妻の兄なので一緒だと好いと思ひましたから当方からもすすめてやりました」と書いている（渡辺泰亮宛高倉輝の手紙、[1923年6月]22日、佐藤編 1981：87）⁽¹⁰⁾。

6月も終わりに近くになって山本宣治が承諾の返事を土田に寄こしたことから、タカクラと山宣の2人が出講することに決まった。そのことを知らせる手紙の中で土田は、「山本宣治君（京大理学部講師）は別紙の様に承諾してくれた。これで二人出来たからまあ開会は現実になった。（中略）日取りは山本、高倉二人に打合せさせるとよい。二人は親戚の間柄だから。山本君の性教育論は随分立入った話をやることゝ思ふ。／わきの方の影響が悪いと思ったら手加減して貰ひたまへ。併し京大主催の講習でもやるのだから、差支へは無論ないと思ふが。田舎のわからずやはひよっとするとびっくりしようから。／二人とも婦人にもよい。いつか午后にでも婦人デーをやりたまへ。僕は開会の日に二人の紹介をかねて長文の祝辞をおくる。君からよんで貰はう」と書いている。そして土田は、夏季大学の名称変更を提案している。「会の名称も夏期大学では平凡だが「魚沼自由大学」としてはどうか。／啓明会でも今年は自由大学と銘を打ったし、東京のは前から市民自由大学だ。この方がこれから新しい気分を象徴する。夏期大学とか夏期講習とかは何だか生ぬるい空気の気がする」と（渡辺泰亮宛土田杏村の手紙、1923年6月26日、佐藤編 1981：89）。

この名称変更の提案を渡辺や響倶楽部の会員たちはどのように受けとめたのであろうか。渡辺は、山宣宛の講義の日取りを問い合わせる7月3日付の手紙の中では、「杏村兄から当方の夏季大学へ御願ひ申し上げていただきましたところ早速御承諾下さいました趣き同氏から電報をうけましてまことに忝けなく存じて居ります」と、「夏季大学」を使っていたが（山本宣治宛渡辺泰亮の手紙、1923年7月3日、佐々木・小田切編 1979：166）、7月11日付の長岡駅での待ち合わせに関する手紙では、「魚沼自由大学」の文言が使われている（佐々木・小田切編 1979：168）。渡辺も響倶楽部も土田の提案をそのまま受け入れたことが知られる。『越後タイムス』（1923年7月22日）は「自由大学」と改称したことを、次のように伝えている（佐藤編 1981：178）。

「魚沼夏季大学は今夏左記の如く第二回も開講する筈なるが同大学に於ては近き将来に於て夏期丈に止らず真に自由大学としての組織を完成してアダルトエデュケーションの實際的效果を見るべく自由大学と改称せりと。」

土田杏村は、自由大学の準備が整いつつあった7月26日、渡辺泰亮に宛てて、「着々と準備の出来つゝあることゝ信ずる。何にせよ愉快だね。魚沼自由大学だけはいゝものにしたい。これから色々の計画を立てようではないか」と書き（渡辺泰亮宛土田杏村の葉書、1923年7月26日、佐藤編 1981：96）、この地域での自由大学運動の発展に期待を込めていた。

魚沼自由大学の第2回講座⁽¹¹⁾は、8月6日から10日まで、堀之内小学校を会場に、次のような日割りで講義が組まれた。聴講料は前回の1円から2円50銭に値上げになっている（『北越新報』1923年8月3日）。

- ・ 8月6日 午前9時 タカクラ・テル「近代思潮論」
午後1時半 （婦人のための講演）タカクラ・テル「恋愛と家庭」
- ・ 8月7日 午前8時 タカクラ・テル「近代思潮論」
午後1時 （科外講演）沖野岩三郎「宿命されたる個人は如何にして自由を得べき

か」

- ・ 8月8日 午前8時 タカクラ・テル「近代思潮論」
午後1時 山本宣治「性教育論」
- ・ 8月9日 午前8時 山本宣治「性教育論」
午後1時 (科外講演) 中山晋平「音楽実地指導」
- ・ 8月10日 午前8時 山本宣治「性教育論」
午後1時半 (婦人のための講演) 山本宣治「性の問題」

開講に先立ち、講師のタカクラ・テルと山本宣治を紹介する土田杏村の文章が渡辺泰亮から読み上げられた。紹介文は、次のようなものであった(佐藤編 1981: 97-98)。

「魚沼自由大学の盛会を祝します。自由大学へ高倉、山本両君を講師として御紹介することの出来たのは、私の非常に光栄とするところであります。

高倉君は、非常に長い間外国文学特に露西亜文学を研究して居られた学究であります。高倉君の様に苦んで、厳格に、露西亜文学を研究した人は少ないことと信じます。其事は同君の『蒼空』や『我等いかに生くべきか』をお読みにになった人の痛切にお感じになる点であらうと思ひます。怒るに同君は此の数年来は其の下準備を基礎として、全然創作の中へ没頭して了はれました。ここにも亦驚嘆す可き高倉君を私は眺めて居ります。

山本君は京大理学部講師でありますから、本当の意味の学究であります。単に学究たるには少し熱血が動き過ぎます。性教育や産児制限問題などに就ては我国の第一人者であり、本年夏の京大の講習会では、此処と同じ題目の性教育を講義し、老大家の河上博士の講義に次ぐ多数の聴講者を得ました。今後同君がどういふ途を進まれるかは、満目の等しく注意しつつあるところであります。

高倉君山本君は、共に古い階級を代表せず、まさに生れんとする新時代の先駆者として、文壇、論壇、学界の少壮花形となって居られる人達でありますから、必ずや諸君と共鳴し合ふものがあることと思ひます。

我々の自由大学は何等かの主義主張を宣伝する為の機関では無い。我々はただ教育の上に於てのデモクラシイを叫ぶだけである。我々すべてが、春夏秋冬、高い教育を受けることの出来る機関を作りたいと希ふだけであります。

両君は民衆運動に深い同情を持って居られ、悦んで魚沼自由大学へ出講せられました。私は両君と親しい友誼を持ち、且つ両君への出講を御依頼するお使ひをした関係上、ここにいささか両君を御紹介申しました。

最後に私自身のことを申します。先きに確実に出講を承諾して置きながら、病気の為め全然其の約を破毀しなければならぬ事になった罪を、ひとへに幹部諸君並びに聴講者諸君におわび申します。幸にお許しあらんことを希ひます。」

タカクラ・テルの「近代思潮論」は、出版されたばかりの『我等いかにくき可きか』(アルス、1923年)をテキストに8月6日から8日までの午前中に講義が行われた。

伊米ヶ崎村の桑原福治は、タカクラの講義について、「高倉テルからは、ロシヤ文学の中でイワンの馬鹿という講義をきいた。またロシヤの国民性を説明してアボシ・ネボシ・カクネボシである。これを和訳すると『どうにかなるだろう・こうにかなるだろう・どうにかこうにかなるだろう』』という至って物事をのんびりと考えているのが特徴であると説明した。それでいて一度事に当ればイワンの馬鹿のようなこともやっけてのけるのがロシヤの国民性だと話した。しかしこの国民性については、革命後可成り性格が変わったように思われる」と回想している(桑原 1973: 272-273) (12)。

このタカクラの講義に対する聴講者の印象は薄く、堀之内ではもう1つの講義、山本宣治(13)の講

義を記憶している人の方が多い。

山宣の「性教育論」の講義は8月8日の午後と9日・10日の午前に行われた。このときの講義風景の写真が残されているが、中央の演壇につりズボンにワイシャツ姿の山宣が立ち、各机上には写真付きのリーフレットが置かれ、正面には大洋紙大の女性生殖器の図が掲示されている。雪塊の入った大きなたらいが壇上に置かれていた。聴講生は男性は洋装と和装が半々であるが、女性は大半が和装であった⁽¹⁴⁾。

中林昌平は、山宣の講義について、「図を用いたりして随分具体的な話で、私も若かったから面白く聞いていたが、たいへんな熱気があった」と語っている（安達 1983：24）。また、校長の説明により聴講した須原小学校教員の山内キセは、「未婚者である自分としては説明によってよい講演を聞け、性に対する知識を学んだ事は大きい収穫だったと思う」とアンケートに回答している（安達 1983：24）。

響俱樂部では開講1ヵ月前に、山宣に宛てて『山峨女史家族制限法批判』（1922年）の入手を問い合わせ（山本宣治宛響俱樂部の手紙、1923年7月4日、佐々木・小田切編 1979：167）、また、渡辺泰亮も『戦争進化の生物学的批判』（内外出版、1922年）や『性教育』（内外出版、1923年）を丸末書店にかなりの部数を取り寄せることを山宣に伝えている（山本宣治宛渡辺泰亮の手紙、1923年7月3日、7月27日、佐々木・小田切編 1979：167、169）。主催者の側も、事前に山宣の著書を読んで学習していたと思われ、安達朋子が指摘するように、長尾喜三郎が「山本の産児制限は先見の明がある」との感想をいだいたのも（安達 1983：24）、そのためと考えられる。

山宣は、この講義の終了後、性生活に関するアンケートを聴講者に依頼し、調査用紙を90通配布したが、郵送で回収できたのは22通であった⁽¹⁵⁾。

警察では山宣の行動を監視していた。越佐新報の中川杏果が長岡駅に山宣を出迎えに行ったとき、巡査が中川の側を離れなかったという⁽¹⁶⁾。また、講義当日も、未成年だからと聴講を断られ、安達朋子によれば、追い返された者もいたという（安達 1983：24）。

科外講演には沖野岩三郎⁽¹⁷⁾と中山晋平⁽¹⁸⁾が招かれたが、これは新穂小学校以来の土田杏村の友人である中川杏果⁽¹⁹⁾が、土田の推薦するタカラ・テルと山本宣治という「堅い先生ばかりでは面白くない」との経営判断から、友人である沖野と中山を呼んだという（中川 1986：73）。沖野岩三郎の「宿命されたる個人は如何にして自由を得べきか」の講演について中川は、「朝鮮に旅行に行った話をした」が、「急に朝鮮のアカの運動をやっている連中のことを詳しく話した」ため、「こっそり傍聴に来ている警官が県に報告した」と証言している（中川 1983：75）。それが事実であるとすれば、このあと県が「注意書」を発した理由の1つになったと思われる。中山晋平の音楽実地指導は、聴講した教員には好評だったといわれる。安達朋子によれば、中山の講演を聴講した西川口小学校の岡村健次は、図画、綴り方、唱歌に関心があり、とくに唱歌では童謡を取り入れたが、子どもたちは「そのときは生き生きとして楽しそうだった」と語っていたという（安達 1983：25）。

中山晋平は、「外国の旋律をそのまま用いたり、文語調の歌詞を用いるなど、民衆の感性にたいする配慮が十分でなかった」唱歌に対して、『民衆の言葉を生かし、民衆の心もちに同感され得る』歌を書くことに心血をそそいだ作曲家であった（岡田 1978：284、293）。また、矢沢保は、『カチューシャの唄』以降、ヨナヌキ長音階にもとづいた素朴だけれど、明るい新鮮な感じをもった音楽の流れは、晋平の童謡の中にうけつがれていき、「砂山」「背くらべ」「雨降りお月さん」などのすぐれた作品の中に「その伝統を見出すことができ」とし、「ヨナヌキ長音階」の中に「晋平の音楽の真の大衆的性格」を求めることができ、「日本の大衆音楽の基礎をきづいた作曲家だ」ということができると評価している（矢沢 1967：24-25）。佐藤泰治は、新潟の自由大学について、「講義内容も越後の手直しをへて娯楽的要素を加味した」ことを指摘し、中山の「音楽指導」もその1つとして

とらえているが（佐藤 1977：132）、「音楽」ゆえに「娯乐的」ととらえるのではなく、「民衆の側の芸術家」として自由大学でも指導したことの意義をとらえるべきであろう（和田 2010：118-119）。

山本宣治は、講義最終日の8月10日の朝、自由大学の様子を土田杏村に宛てて、次のように書いている（土田杏村宛山本宣治の手紙、1923年8月10日、上木 1968：38-39）。

「六日に京大のを終り翌七日、炎暑の京都を後に、其夜の敦賀湾の漁火も印象に残って居る。朝はおだやかな海と防雪林と石油製造所の廃墟、長岡では中川君の出迎へ。十一時すぎにつきました。

教壇のわきに立てた雪塊は、大都会の花氷のやうな人工味もなく、豪壮な涼味を覚へます。京大のはより集まりの教育者で皆中々威厳を保つのに苦心して居たらしく中々笑ひませんので私も何かギコチなさを感じたのですが、ここでは自然な笑声も湧いて来る。之が何よりも私を涼く思はせる。八日午後、九日午前と既に約五時間話しました。今日は朝ひる共にぶち通し埒をあける考えです。京都のよりもコンデンスされて内容もより豊かになったと自信して居りますが、殊に目下病（一種の神経痛）に悩まされつゝも其を排して忍んで三面六臂の大活動して居られる渡辺君にも感謝しつつ、私も出来るだけの事をやって居りますから、魚沼自由大学の第二期の結果は悦ばしいものでせう。妙高に雑兵かりあつめの夏期大学は毎日毎日聴講者の姿減じ、堀之内では有志者を集めて毎日毎日聴衆の数がふえる由。（中略）

堀之内の諸君は私を歓待してくれます。殊に若い人々の真剣な態度と婦人聴講者の忍耐熱心とに感激せざるを得ません。人生觀に動揺を感じたといふ人もありますが、高倉氏と私によつて与へられた刺戟がどういふ反響をもたらすでせうか。「文学青年」の無い事、教育者の内特に若い人々に熱烈な確信と深い蘊蓄体験を具へた人の多い事は関西農村の「知識階級」と異なる愉快な点で、雪の冬の影響もあろうかと興味深く観察して居ます。」

この手紙の中で山宣が「妙高に雑兵かりあつめの夏期大学」と書いているのは、1922年8月に新潟県当局の手によって開設された「越佐夏季大学」を指している⁽²⁰⁾。この官製の夏季大学は、魚沼自由大学が開講する直前の8月1日から7日まで、第2回目の夏季大学を中頸城郡名香山村妙高小学校を会場に開催している。『北越新報』は、この夏季大学について、「赤倉温泉に開会の第二回越佐夏季大学は一日より妙高小学校に開会、聴講者六三二名内女子五三名、午前八時開講式を挙げ知事代理千葉内務部長開講の辞を述べ講演に入る」（『北越新報』1923年8月2日）と報じ、その傍聴記は、「開講の劈頭、千葉内務部長夏季大学開催の趣意を述べて曰く文明国としては我日本今尚欧米列強に劣ること遠し是我國民の素質劣るに非ず修養足らざるなり、人生は大学なり、各員生涯を通じ研鑽修養を怠るなかれと、満堂ために襟を正した」（『北越新報』8月3日）と伝えている。官製の夏季大学と自由大学とのあり方の違いがよく現れている。

この山宣からの手紙に対して土田杏村は、次のように返信している（山本宣治宛土田杏村の手紙、1923年8月24日、佐々木・小田切編 1979：175；佐藤編 1981：104）。

「堀の内からのお手紙面白く拝見致しました。（中略）

魚沼へは御足労を煩したお陰で大変悦んで居ります。文と理と、しかもどつちもレヴリュウショナルな配合で、薬としては何処へ持ち出しても恥づかしくないものとなつたのは有難いことでした。今年は少し狼狽したため科外講師などがあつて旨く行きませんでした、これからあとはよくなるかと思ひます。何かと質問したりして来るかと思ひますが、指導してやつて下さい。」

この魚沼自由大学の第2回目の講座は、聴講者が第1回るときよりも少なく、主催者の予想を裏切るものであった。予算書では聴講料500円、村補助金100円、村教育会補助金15円、計615円の収入を見込み、支出は講師謝礼・旅費・宿泊料、会場費その他雑費で計564円70銭、差し引き50円30銭の黒字となる見込みであった（「大正十二年魚沼自由大学予算書」、佐藤編 1981：272）。渡辺泰亮は山本宣治宛の書簡に「聴講者は二百名を降さぬといふ決心でやつて居ます」と書いていたが（山本宣治宛

渡辺泰亮の手紙、1923年7月27日、佐々木・小田切編 1979：169）、佐藤泰治の集計では5日間の聴講申込者が60名、「婦人のための講演」申込者が30名で、聴講料の収入は合わせても165円にすぎず、大幅な赤字であった。この赤字は、響倶楽部の会員が「何とか工作をしてお金を捻出し」それで赤字を埋めたという（林 1979：38）。

聴講者が大幅に減少した理由としては、安達朋子も指摘しているように、次のようなことが挙げられる（安達 1983：25-27）。

第1に、聴講料が前年の1円から2円50銭に値上げされたことである。渡辺泰亮からすれば、前年の聴講者が多かったので強気の読みをしたのだろうが、午前・午後と聴講できる教員にとっても、若手教員では負担が大きかったと思われ、また、昼間働いている一般の人々にとっては高額であり、かつ日中聴講できる人は限られていたといえる。

第2に、講師の人選の問題である。中山晋平はよく知られていたが、魚沼地域の人たちにとってタクラ・テルや山本宣治、沖野岩三郎の名前を知っている人はそれほど多くなかったことである。響倶楽部のなかでも山宣を知っていたのは林広策だけで、それも『中央公論』で知った程度であった。林は、「第一、高倉輝なんていう名前は誰も知りませんし、それから山本宣治を知っている人はほとんどなかったんです。山本宣治をいうてきたのは杏村からであったというんですが、われわれ響倶楽部で山本宣治の名前を知っていたのは、実際私一人でした」と語っている（林 1979：37）。

第3に、新聞社の後援が「北越新報」から「越佐新報」に変わったことである。北越新報の主筆関魚川は堀之内の出身で、響倶楽部との関係もよく、第1回ということもあり力を入れて後援した。越佐新報を経営する中川杏果は、土田杏村とは新穂小学校時代からの友人であることから後援を申し入れ、科外講演の講師として中山晋平と沖野岩三郎を斡旋したのである。両紙とも長岡を中心とした新聞であったが、両者では宣伝力に雲泥の差があり、北越新報の方が勝っていた⁽²¹⁾。そこで渡辺泰亮は、7月19日に長岡に出向き関と面談し、北越新報にも後援を依頼したが、社内には越佐新報に乗り替えたことへの反発もあり、重役との相談の末、関は断りの手紙を渡辺ではなく長尾喜三郎に送っている。手紙には、「魚沼自由大学之件行違ひ之結果とハ乍申十分御後援出来かね申訳無之候（中略）小生ハ郷里之ことニても有之公人之立場よりしても出来得るだけ之御援助申上げす候てハ相叶はさる次第ニ候処社内青年記者及固定せる思想家等之意見ニハ頑強之もの有之（中略）小池重役とも協議仕候処昨年ハ本社之後援ニて御開会被遊候事故本年ハ越佐単独之後援ニて御開催御願申度と主張小生より如何ニ申候ても聞き容さる次第ニて小生としてハ何共申訳次第も無之候」と、自らの力が及ばなかったことを詫言っている（長尾喜三郎宛関魚川の手紙、1923年7月20日、佐藤編 1981：95）。

第4に、渡辺泰亮と響倶楽部との対立が表面化したことである。新聞社の後援問題も、響倶楽部－関魚川－北越新報と、渡辺泰亮－土田杏村－中川杏果－越佐新報というつながりから生じたものであった。また、渡辺は長尾や中林と相談なく事を進めたり、相談するとしても中条登志雄と相談するという状況があり（林 1979：38）、渡辺と長尾や中林との間には溝が生じていたのである。そうすると聴講者を集める姿勢も自ずと弱まることになる。

第2回目の魚沼自由大学が大幅な赤字が明らかになり、すべての日程が終了した8月10日の夜、渡辺は、響倶楽部のメンバー宛に、魚沼自由大学から手を引く旨の手紙をしたためている。

渡辺は、「不躰ですから諸君はお驚きになるかも知れません」としつつ「私は此の自由大学から一切の手を引かせていただきます。」「第二回の凡ての失敗が私の全責任なのです」と述べ、「私がどうしても解決をせにやならぬことは経費問題です。」「今年分の残物はどこまでも責任を持つて解決いたしますから御話きかし下さい。／それから私の至つて剛慢であつた不行届であつたすべてを御詫いたします」と、聴講者が激減し大幅な赤字となった責任を取ること、支払い残金があれば責任を持って解決することを述べている。ただ最後に、「私自身の文化運動に対する自由だけは将来共おたすけ下

さい。此の事も誤解され易い気持がします。私は決して諸君と不自然の競争などはいたしません」「私は私自身たった一人でこれから私の思ふ事を素直に成し上げたいと存じます」と述べて、今後、新たな文化運動を起こすことを伝えている（響倶楽部宛渡辺泰亮の手紙、1923年8月10日、佐藤編 1981：98-100）。

この手紙には、切手、消印もなく、投函されないまま林広策が所蔵していたもので、林以外に響倶楽部のメンバーで誰が読んでいたのかは不明である。渡辺は、魚沼自由大学からは手を引くことを宣言したものの、自由大学運動そのものから手を引くことは考えておらず、その後の経過を見れば地元の伊米ヶ崎村に新たに八海自由大学を設立することを予定したうえでの行動であったと思われる（長島 2022：147）。

第5に、県当局、警察による取り締まりに自由大学を警戒した人たちがいたことが考えられる。山本宣治が警察からマークされ、講義のときも警官が配置されていた。自由大学を避けた人もいたに違いない⁽²²⁾。

土田杏村は、渡辺泰亮に宛てて、「講習の損失には弱つた。常なら僕も多少何とか出来るのだが。それに山本君のたいりとは馬鹿らしい。ぐずぐずいつたら、あれと同じことを京大の主催する学校でやつたのだが（聞くものの程度も同じこと）何処がわるいかと聞きかへしたまへ。県から何か出したらそのうつしを見せてくれたまへ。僕が長岡の新聞で意見をのべる」と書き送っている（渡辺泰亮宛土田杏村の手紙、1923年9月29日、佐藤編 1981：108）。土田は、聴講者の減少による損失を心配していたが、関東大震災で東京の出版社は打撃を受け、原稿料で生活する土田にとって、援助できる状況にはなかった。「県から何か出したら」と土田が書いていたことが現実となり、新潟県当局は、23年10月に次のような「注意書」を県内の郡市長、町村長、青年会長、学校長宛に通達したのである。

「近時一般民衆の知識欲旺盛に趣き結果各地に於て講習会講演会夏期大学等を開催するもの逐年増加するは一般文化の進展上慶賀に堪へざる所なりと雖も往々にして講師の人選に周到なる注意を欠き講師其人の思想の傾向発表方法等頗る寒心に堪へざるものありて其筋に於ては予而特別の注意を要する人物として取扱はれつゝある者たるに拘らずこれを講師として招聘し講演を聴かんとするものあるが如きは大いに考慮を要する次第に有之候条爾今講師の人選に関しては主催者に於て一層周到厳密なる調査を遂げかかる人物を講師として招聘する事無之様十分御注意相成様致度此段及移牒候也。」

この「注意書」が渡辺から送られてくると土田は、早速、東京の『報知新聞』に「震災に際しての思想戦」と題する一文を4回にわたって連載し、これに反論を加えた。かれは、その中で、「県自身が毎年大規模の夏期大学を開催して居たけれども、其講師は御用学者許りであつて青年の要求を充たすに足りないから、我々は昨年以來自由大学を創設して新らしい空気 of 思想運動を起した」と主張したあと、「この牒書を読んで見れば、或は社会主義者を講師にしたものの様に聞えもしよう。然るに我々が事実を調査したところでは、この中の「其筋に於ては予而特別の注意を要する人物」に該当するものは、沖野岩三郎氏及び京大理学部講師山本宣治氏であつた。沖野氏は文学論を為したが、氏の思想に特別の注意が必要だとも思はれない。思想的にはもつと幼稚な朝鮮や満州でさへ氏の講演を歓迎して居た様に記憶する。山本氏は性教育を論じたのであるが、これは京大主催の通俗講習と内容の同じいものであつた。しかるにそれ等すべての講師を一括し、指すに「かかる人物」とは何たる無礼ぞ」と、県の「注意書」の不当性を指摘し、このような「各県に於て現に行はれつゝある思想干渉」は、「一見しては法律のどの文句にも抵触して居る様に見えないものだから、平然として為さ」れているが、「それは思想の自由を拘束した、許す可らざる憲法違反でさへある」と反駁している（『報知新聞』1923年11月7日）。

渡辺泰亮は、山本宣治に宛てて、「県の馬鹿共がくだらない心配をし出して一寸一花さかせました。

土田さんが『報知』に四日ばかり書いて呉れました」と手紙で報告している（山本宣治宛渡辺泰亮の手紙、佐々木・小田切編 1979：95）。渡辺には県から何らかの注意があったと思われる。

林広策は、県の内務部長が、沖野岩三郎が来たことに対して「大分文句を言った」ことから「県広報にでた注意書は、そのへんから出たんじゃないでしょうか」と語っているが（林 1979：46）、その真偽は不明である⁽²³⁾。

『報知新聞』紙上で反論した直後の11月9日、土田杏村は、渡辺泰亮に宛てて、「決して妥協してくれたまふな。あの訓示はあまりひどいから、東京の報知新聞にかいておいた。痛烈に罵倒した論文を四日間かいた。君には全然関係なくかいた。（中略）何にせよ、教育界にはやる仕事沢山ある。県の馬鹿どもを合手にしないで、我々は我々の魂の声にきいて動かうではないか」と書き送っている（渡辺泰亮宛土田杏村の手紙、1923年9日、佐藤編 1981：110）。

このように県からの圧迫があったが、渡辺は地元の伊米ヶ崎村に新たな自由大学を創設する。

3. 八海自由大学の創設

八海自由大学の舞台となる新潟県南魚沼郡は、1922年現在、10453戸、人口63368人で、北魚沼郡と同様に蚕糸業が盛んであった。その中で、伊米ヶ崎村は、507戸、人口3247人の養蚕業を中心とした農村であった。人々は「僅かな土地を耕し蚕を飼って暮しを保っているが、秋は十一月中旬下旬の頃から雪が降り始め、一月二月ともなれば毎日毎晩降りつづけ、一週間も休みなく積もれば二メートル位にもなる」という「半年は雪の中で現金収入のない土地」での人々の生活は楽ではなく、「平常の食事は僅かな米に大根菜、よもぎ、うつぎの葉、みつまたの葉等を多量に混ぜて腹を膨らませる」というような地域であった（渡辺 1979：22）。

伊米ヶ崎小学校長の渡辺泰亮は、当時の新教育の実践者であった。デモクラシーの風潮が広がる中で、子どもの個性や自発性を尊重する自由主義的な教育を実践していた。1924年に伊米ヶ崎小学校を訪れた佐渡の真野小学校の教員は、校舎の「入口の廊下の左右の壁には粘土細工人形や竹細工玩具や自由画等の農産小美術品が雑然と飾りたてといふよりもむしろ幼稚な小共らしい並べ方がしてあつた。直ちに学校一巡したが全く児童の製作になつた絵画手工品等の秀でた小美術品や児童自治会決議ポスター等が廊下と云はず教室と云はず教員室にまで所狭いまでに並べて恰も小展覧会のやうな気がした」と記し、新教育学習法は「最高限度と思はれる所までに自然的に取り込まれ、實際化され、織り交ぜて」あり、「伊米ヶ崎式」だったとし、また、児童の創造活動、自学自治活動を積極的に進めたことが記されている。さらに、自治会が徹底したもので、児童によって敬老会を行っていること、高等科2年で卒業した者に対して自学自習の研究科を設置して勉学の機会を与えていること、青年同好の者と油絵・木彫・美術加工品等を製作し、9月から『農村美術』という雑誌を出していること、「土田杏村氏を始め当代の一流の若手学者が」講師としてきている「農民自由大学」が開かれていること、などが紹介されている（田辺生 1924、佐藤編 1981：188-193）。

渡辺が山本鼎や金井正らが始めた自由画教育や農民美術に関心を持ち、子どもや青年たちを指導していたことが知られるが、タカクラ・テルを介して山本鼎の講演を計画したことが、タカクラの手紙から知ることができる⁽²⁴⁾。また、「農民自由大学」のことが紹介されているが、これはその内容からみて、魚沼と八海の自由大学のことと思われる⁽²⁵⁾。

このような教育実践をもとにして渡辺は、地域の講演会や教員の研究会で講演を行っている。たとえば、1921年2月16日に伊米ヶ崎村千溝で開かれた婦人講演会で「デモクラシー」を語り、翌17日

の浦佐村五箇での婦人講演会では「婦人と教育」をテーマに講演をしている。また、5月22日には南部教育会で「実補に機業を」、6月15日には伊米ヶ崎小学校で開かれた伊米ヶ崎児童研究会で「児童生活の芸術的方面の試査」、11月13日に浦佐小学校で開かれた北部教育研究会では「自由画自由製作の問題」をそれぞれ講演している（佐藤 1979：5-8）。

渡辺は、地域で児童の芸術的素養を育てることを課題とし、経済的発展から取り残された南魚沼地域の振興のために農民芸術をおこし農土工芸品の製作に力を入れようとした。鉄道が南魚沼に延伸されることによって若者が都会に出て行ってしまうような事態を防ぎ、また冬に出稼ぎに行かなくてもすむように、農閑期を利用して農土工芸を研究・活用することを提言し、渡辺は『魚沼新報』に掲載された「鉄道開通と我が南魚沼」の中で、次のように述べている（『魚沼新報』1922年1月7日～17日、佐藤編 1981：164-169）。

渡辺は、「小学校に於ける児童の芸術的素質、之に至つては決して他に恥づるもののない事を確信する。寧ろ純真な素朴な本然的なものを多分に領有して居る。彼等の作る泥人形、一挺を与へて彫む浮き彫り、全く小芸術家である」とし、「彼等の描く絵画を至細に視入る時、都会地の児童の其れに比して嬉しき創造性の表現が段違へに露はれてゐる」と、地元の児童が描く絵画を見ると、都会の児童に比べてはるかに創造的で表現力があると指摘している。また、絵画だけでなく、童謡、作曲、遊戯など「児童の芸術的素質は先人の郷土的出色を稟け継いで、山紫水明の魚沼に手工業発展の兆候を明かに予言してゐるものの様に思はれる」と述べ、「冬稼ぎに口暮しに飛び出さうより、農閑期を利用して農土工芸を研究し、受身の世界から発動の世界に転換する大勇猛心を振へ起さうぢやないか」と呼びかけている(26)。

このような学校での新教育の実践や地域での農民美術の指導とともに八海自由大学にも取り組んだが、渡辺が自由大学に取り組んだ動機は、厳しい自然と貧しい生活のもとに置かれた地域の人々に、働きながら学ぶ大切さを求め、「生き甲斐ある生活に導きたい」（渡辺 1979：23）と考えていたからである。渡辺は、「我等の自由大学」（『新潟毎日新聞』1925年8月1日）の中で、次のように述べている。

まず「我等は人間として生きたいといふ意識の尖端に立つて、久しい間三つの悩みに悩まされ」てきたとして、3つの悩みをあげている。「一、我等は家庭の事情によつて高等学校大学の教育を受けることが出来なかつた。二、今日までの成人教育の施設が系統的にして我等の自学的習慣を根本的に培つてくれない。三、我々の生活は我々を酷使して自分の時間と機会とを奪つて人間としての成長を錬磨せんとする」ことができなかった。この3つの悩みを解決し、「人間として生長すること」を「培ふための教育は、終生的にしてしかも当然万人が教育せらるべきもの」であるが、そのためには「第一、労働しつつ学ぶこと。第二、僅少な経費なるべきこと。第三、これが為めには講師の直接同情に訴へねばならぬこと。」の3つの要件を解決しなければならなかつたとし、それに応えるのが自由大学であり、それは「終生的自己教育の道場」だと述べている。

渡辺泰亮は、1923年12月にはいと、伊米ヶ崎小学校において八海自由大学創立委員会を開き、諸規約を決めるとともに、顧問に土田杏村、佐野勝也、タカクラ・テル（高倉輝）、恒藤恭、山口正太郎の5名を推薦して決めている（『新潟毎日新聞』1923年12月17日）(27)。

12月16日に伊米ヶ崎小学校で行われた発会式の様子について『北越新報』は、「南魚沼郡伊米ヶ崎小学校に於て去る十六日午前十時より高倉文学士を聘し八海自由大学の発会式を兼第一回講演会を開催せるが聴講者多数ありたり」と報じている（『北越新報』1923年12月18日、佐藤編 1981：181）。発会式には林広策、中条登志雄も出席している（林広策より聴取、1978年8月10日）。このときタカクラは、「発会式に臨みて」と題する次のような挨拶を行い（渡辺泰亮宛高倉輝の手紙、1923年12月4日、佐藤編 1981：111-112）、そのあと「文学概論」の講義を行った。「発会式に臨みて」の原稿の

日付は12月20日になっており、当初の計画では発会式は12月20日の予定であったのが、16日に変更になったものと思われる。

「私は「八海自由大学」の発会式に臨んで劈頭諸君と見ゆるの光栄を有するを得たことを心から喜びとする者である。

先づ第一に私はこの自由大学の創立に対する諸君の異常なる「熱」に対して心からの愉快なる愕きを抑へることが出来ない。この熱こそは言ふまでも無く諸君が諸君自身を教育し成長させんとする所の已むを得ざる熱望であり、またこの熱望こそは現在あるところの公立大学の制度の徒らに唯だ学生に職業を与ふのみの機関に堕しつつあるに対して正に確然と自由大学存立の意義を植ゑつける所のものであり、而してまた同時にこれこそは諸君がやがて来らんとする光栄ある時代の健全なる一単位としていま確実にその参与の資格を把持しつつある何よりの証左である。即ち諸君は已に諸君の健全なる職業を持ってゐる。この自由大学によって諸君の職業の上に何者かの私益を得ようと言ふ毫厘の野望をも持ってはゐない。即ち諸君のこの学問芸術に対する熱望は宛も渴ける者の水を求める如き純粹なる已むことを得ざる熱望である。而して本来学問芸術とはかゝる純粹に飢ゑたる者の場合に於てのみこれに豊かにして健全なる滋養を齎す可き性質のものである。

即ち諸君の精神がかくの如くに飢ゑてゐる限り恐らくはこの自由大学は永久に続くであらう。而して恐らくは永久に諸君を養ひ諸君の成長を助ける最も大いなる糧となるであらう。ここに私もこの「八海自由大学」の一員として永久に諸君と同じ道を歩き、永久に自己の成長を計らうとするの喜びを分たうとする者である。」

タカクラは、自分「自身を教育し成長させんとする所の已むを得ざる熱望」こそ、既存の公立大学が「徒らに唯だ学生に職業を与ふのみの機関に堕しつつある」に対して、「正に確然と自由大学存立の意義を植ゑつける所」のものであり、自由大学は学問・芸術を求める熱望を持った人々が自ら教育し成長をはかろうとする教育機関であることを説いたのである。

タカクラは、新潟から帰ると、渡辺に宛てて、「いろいろ御疲れの事と存じます。併し大体に成功で何より愉快です。どうか諸君によりしく御伝下さい」と記したあと、「文学概論」で語った内容に関連することからと思われるが、『我等いかに生く可きか』がアルスから出るので、「皆に読んで貰って下さい」と、その読書をすすめている（渡辺泰亮宛高倉輝の手紙、1923年12月18日、佐藤編 1981：114）。一方、渡辺は、山本宣治に宛てて、「高倉さんに御出でを願つて八海自由大学は気持ちよく出来ました。今パンフレットの趣意書を編纂中です。（中略）此のパンフレットへあなたから一口御書きを願はれないでせうか」と、八海自由大学が出来たこととパンフレットへの原稿執筆を依頼している（山本宣治宛渡辺泰亮の手紙、1924年1月6日、佐々木・小田切編 1979：201）⁽²⁸⁾。

こうして魚沼地域には魚沼自由大学に続いて八海自由大学が創設されたのである。

4. 1924年夏の八海自由大学と魚沼自由大学の内紛

(1) 八海自由大学第2回・第3回講座

八海自由大学は、1923年12月に発会式を兼ねてタカクラ・テルの「文学概論」を開講したのち、翌24年2月には出隆の「哲学史」を開講した（渡辺 1925b、佐藤編 1976：73）。

しかし、この2月の講座は講師がなかなか決まらなかった。タカクラは、渡辺泰亮からの手紙に対して、「出君はどうも駄目だらうと存じます。上田の方も多分だめで、来るにしても三月無理に頼んだ上です。で出君は諦めてそれから私も今のところ逆も駄目ですから、私の方でも佐野君その他一二

当って見ますから（しかしこの方も丁度急がしい最中へですから）急に土田の方へ頼んで一つあちらでも誰か頼んで貰ふことにしてはいかがです あっちはきっと誰か有ると思ひますから」と、出隆の出講は難しいので、こちらでも当たってはみるが、土田杏村にも依頼するように返信している（渡辺泰亮宛高倉輝の手紙、1924年2月6日、佐藤編 1981：118）。タカクラは、土田に宛てて手紙を出し、「そちらに誰か無いか。なる可く赤くない手頃の人は無いかね。全く弱った。殊に僕は渡辺君がああして努力してゐるのだから何とか都合をつけてやりたい。どうかそちらでも一つ骨を折ってくれ」と、講師の斡旋を依頼している（土田杏村宛高倉輝の手紙、1924年2月9日）。タカクラが「なる可く赤くない手頃の人」がいい、と書いているのは、前年の魚沼自由大学での山本宣治の講義と沖野岩三郎の講演が県当局を刺激し、渡辺泰亮が「大分きつく県から叱られた」（山本宣治宛土田杏村の手紙、1923年11月21日、佐々木・小田切編 1979：190）ことから、小学校長という公職に就いている渡辺の立場を考慮したものと思われる。このタカクラからの講師斡旋の依頼に対して土田は、ただちに出隆に出講を依頼した。これに対して出は、2月10日、渡辺に宛てて、「とても出られない多忙の時ですが、十五日（金）の夕方出発すること出来ます、そして、十七日午前七時頃には上野に帰ってゐなくてはなりません。故に、その範囲内（随って、十六日午後か夜、十七日午前）のみ二回、数時間の講義が出来ます。土田兄の手紙によって、ゆく事に決心しました。（至急汽車の時間割、道順を御一報下さい）」と、2月16日に出講する旨の返信をしている（渡辺泰亮宛出隆の葉書、1924年2月10日、佐藤編 1981：119）。

出隆の「哲学史」の講座は、24年2月16日、伊米ヶ崎小学校で開かれた。講義内容は、桑原福治によれば、出が「兎は亀に永久に追いつけない」という話をしたことを記憶していることから（桑原福治より聴取、1974年9月21日）、エレア派のゼノンのパラドックスなどソクラテス以前のギリシア哲学史であったと思われる。出の講義は、2月16日の1日だけで、17日は行われなかったことが、出の回想から知られる(29)。

この出の講義が終わると土田杏村は、3月10日、渡辺泰亮に宛てて手紙を書き送り、自由大学のあり方について、次のような提言を行っている（渡辺泰亮宛土田杏村の手紙、1924年3月10日、佐藤編 1981：121-122）。

「講習の件、魚沼と八海と二個所でやるのはどうしても不利の様に思うがどうか。若し八海でパツとしたものをやり、魚沼でじみなものをやれば、八海の方ばかり聴講者が多くなり、魚沼は非常にさびれることゝ思ふ。魚沼の方もどうかして生かしたい。冬は八海の方でやれば夏は魚沼の方でやるとか、そこに何とか妥協の方法はないか。そして自由大学の理想としてはしっとり落ちついたのがよいのだが、信州ほど文化が開けず、やはりパツとしたのがあたるとすれば、その中間をとり、パツとしたところ一人位、じみなもの一人、とかいう風にして漸進的にやって見るか。今の新潟県の状態じゃあ、とてもじみなもの許りでもないけいね。上田などはもう自由大学に信頼しきって居るから学課により、大して聴講者に変動はないが。もう一度よく魚沼の方と相談して見られてはどうか。どうかして二個所とも生かしたいものだ。」

土田は、堀之内村と伊米ヶ崎村という魚野川を挟んで近接する狭い地域にそれぞれ自由大学が存在することから経営難を心配し、地域の状況に応じた講座の組み方を提言している。タカクラ・テルもまた、土田と前後して、渡辺に対して、次のような手紙を書き送っている（渡辺泰亮宛高倉輝の手紙、1924年2月12日、佐藤編 1981：119）。

「今朝中條君（注、中条登志雄－引用者）から手紙が来たところですが、夏期大学の方も出来るなら一緒にして、秋から春へかけての連続式にして、そして八海、魚沼、河口を一緒にしてどこか河口あたりの比較的便利な場所へ永久の会場地を極めてそして魚沼自由大学といふ名にして（上田のも今度信濃自由大学をよして上田自由大学、飯田のも伊那自由大学と平易に改めて貰ひました）

一つ堅実にやった方がよくは有りませんか。

御相談申します。」

土田にしても、タカクラにしても、渡辺が魚沼自由大学から手を引き新たに八海自由大学を創設した内部の事情については、渡辺からもあるいは中条からも知らされていなかったことから、狭い地域内で2つの自由大学を開くことで、聴講者を集めるにしても、講師の派遣調整をするうえでもデメリットの方が大きいという認識があった。しかし、この2人の提言を受け入れる余地は渡辺にはなかった。なお、タカクラの手紙の中に記されている「河口」すなわち「川口自由大学」は、この時点では設立されていない⁽³⁰⁾。タカクラは、渡辺に宛てた別の手紙にも、「山田君（注、山田勝治－引用者）も川口に前から同じ計画をして居まして約百人近い会員を作りかけてゐます。将来合して一つとなり「魚沼自由大学」を完くしたいものです」と記している（渡辺泰亮宛高倉輝の手紙、1923年12月18日、佐藤編 1981：114）。おそらく中条登志雄から情報を得ていたと思われるが、この情報を真に受けることはできない。

タカクラは、出隆の講義の聴講者がどのくらいであったのかを尋ねた手紙の中でも、自由大学を1つにすることを提言する次のような手紙を渡辺に書き送っている（渡辺泰亮宛高倉輝の手紙、1924年3月14日、佐藤編 1981：123）。

「いま上田から手紙が来てそちらの自由大学の件を相談して来ましたがどうしても二つあっては駄目だと思ひます。

今度いよいよ自由大学聯めいを作つて組織的にしますが、さうなるとますます一つでないと講師が得られなくなります。

いろいろの困難も有りませうが、この際断じて合同しないと経営が出来なくなるだらうと思ひますが、いかがでせう。そして出来るなら一回三日間づゝでも二日でも六回位開いて、そして夏期講座はまた別に開く事にしてはいかがですか、合同のために或種の会員はへるでせうが、へるならへっても好いでは有りませんか。右意見を聞かして呉れませんか。四月には上田で出来れば委員会を開きたいと存じます。」

タカクラは、上田の猪坂直一とも相談し、自由大学の連盟機関をつくる計画があること、今後の各地の自由大学への講師派遣の調整を考えると聴講者が減ったとしても魚沼と八海は合同した方がよいことを伝えている。これに対する渡辺の返事は不明であるが、土田に対しては魚沼と八海の「連盟」案を提案し、土田はこれを「承諾」したことが、次の手紙から知られる（渡辺泰亮宛土田杏村の手紙、1924年4月11日、原文はタイプ打ちのローマ字、佐藤編 1981：124）。

「渡辺君一、お手紙、只今拝見した。自由大学のことは万事承知した。二つの自由大学の連盟については、唯君の全努力に依頼するばかりだ。」

そして今夏の講座の講師について、「講師についてはすっかり同じ考えを持っていた。／中川（山内）を哲学に、山口を経済にたのむことにしよう。これからすぐ手紙を出そう」と記し、山内得立と山口正太郎に講師を依頼する旨を返信している。

4月21日付の土田の手紙では、山内得立は「八月中ならば僅かの日数ならば出てもよい」との返事があったとし、山口正太郎は「八月の一日」からと決まったことが知らされ（渡辺泰亮宛土田杏村の手紙、1924年4月21日、佐藤編 1981：125）、7月4日付の手紙では、タカクラの出講が可能になったとし、確定発表としては、「堀之内は一高倉、山内」「八海は一野口、山口」となったことを伝えている（渡辺泰亮宛土田杏村の手紙、1924年7月3日、佐藤編 1981：129-130）。八海自由大学への出講が決まった野口雨情氏について土田は、「野口雨情氏については多くを知らないが、新潟県じゃあそれほど有名かね。あの「枯れすゝき」の歌などを作ったところはあまり感心しないね」と、やや難色を示していたが（渡辺泰亮宛土田杏村の手紙、1924年3月10日、佐藤編 1981：122）、これは渡

辺の方からの推薦で決まったものであった⁽³¹⁾。

土田・タカクラの魚沼・八海合同案は受け入れられず、具体的な内容はわからないが、渡辺の魚沼・八海「連盟」案で新潟の自由大学の発展を期することになった。『新潟毎日新聞』は、「連盟組織」について、8月の予定講座とともに、次のように報じている（『新潟毎日新聞』1924年6月23日、佐藤編 1981：182）。

「魚沼八海両自由大学は今年度より連盟組織によつて八海は八月一日より二日間南魚沼郡浦佐小学校に魚沼は同十四日より三日間北魚沼郡堀之内小学校に左の如く開講する。魚沼の地に二つの自由大学があるが其内容は何れも土田杏村、高倉輝両氏の指導にかゝるもので今回の連盟組織は初めからの理想であつて文化事業が稍もすれば対立的氣勢をなすを以て現代の悪弊より脱却する真の終生的自己教育に目醒めた青年の奮闘なれば魚沼文化の為に将来括目に値するものであらう。」

響倶楽部は、この新聞記事の報道と歩調を合わせて自由大学の宣伝活動を行い、謄写版刷のチラシ「魚沼自由大学より」を配布している。それは、次のようなものであった（小島 1999：256-259、所引）。

「 魚沼自由大学より

吾等は常に総ての人と共に、より公正に、より幸福に生きんことを願つてゐる。その日の糧の為にこの炎天下に精神的に肉体的に労働せなければならぬ一方、思想上にも文芸上にも科学的知識に於ても一日もゆるがせにしないとの慾求の甚だ切なるを感ずるは困苦労働の汗の中よりこそたゞ一途われ等の願ふ文化理想生活の創造せらるべきを信ずるからである。

けれ共目下の現状は遺憾ながら、われ等教化慾求の実現が容易でない事を痛憾せぬ訳にはゆかぬ。

普通教育のみでは吾等の文化的知識慾は満足せられないで吾等の已むに已まれぬ思想的生活の一端及び又日常生活に欠くべからざる科学の一般、そは吾等の生活の堪ゆべからざる寂しさであり声明の枯渇である。

現下の我が国の教育機関はブルジョアジーの独占である。国民の大多数のプロレタリアンは無智のまゝに捨ておかれてある事実だ。

もし教育と云ふものが学校のみでなし得るならば政府は依然として人民の心を奴隷化し続けることが望むことが出来るであろう。しかし社会の進化につれてのプロレタリアンの自覚を如何にする？ 社会的進化は必然に学校を凡ての人間ののための常設的機関でなくてはならぬと云ふ事を示してゐる。今日より彼等ブルジョアジーの学問的利己慾望を満足させる事の不合理は明かにして明らかだ。

吾等は生命本然の慾求の満足と地方文化発展を要望し教政当事者より何等の掣肘を受けざる真の自由主義教育を高調せんとするものである。これ真実プロレットカルトとして魚沼の地に自由大学を組織せるの所以である。

こゝに吾等と同じき考察のもとに只管自己改造に奮闘せられつゝある同志の諸賢、幸、来りて相援け相協力して衷心より出づる白熱的要求の上に生命の結合、力の国体に加盟下され地方文化発展を高調し民力の伸張、時代精神の作興に力め、驕れる一切の思想と戦ひ混沌として帰趣に惑へる民衆生活に一大光明を認むるの資に供せられたき次第である。

響倶楽部

本年度講座（第三回）

魚沼自由大学

於堀之内小学校 八月十八・十九・二十日三日間
毎日午前八時

哲学 認識論講話 東京商大講師

山内得立氏

申込所（聴講）堀之内響倶楽部宛 聴講費二円

会員数五十名位トス 七月十日ころまでに申込^{ママ}マルタシ

八海自由大学 （夏期特別講演）

於浦佐小学校 八月一・二・三日三日間

経済学 高商教授京大講師

山口正太郎氏

民謡童謡 野口 雨情氏

申込所 伊米ヶ崎小学校係宛

聴講料 会員外一講座毎壹円五拾銭

」

この「魚沼自由大学より」は、「吾等は常に総ての人と共に、より公正に、より幸福に生きんことを願ってゐる」という書き出しで始まり、現在の「普通教育のみでは吾等の文化的知識慾は満足せられない」状態に置かれ、「我が国の教育機関はブルジョアジーの独占である。国民の大多数のプロレタリアンは無智のまゝに捨ておかれてある事実だ」と、国民の大半が「無智」の状態に捨て置かれていることを批判し、「吾等は生命本然の慾求の満足と地方文化発展を要望し教政当事者より何等の掣肘を受けざる真の自由主義教育を高調せんとするものである。これ真実プロレットカルトとして魚沼の地に自由大学を組織せるの所以である」と、自由大学を組織した理由を述べている。このプロレットカルトとして自由大学をとらえる文章を書いたのは、響倶楽部の顔触れから見て、おそらく林広策であったと思われる。

また、土田杏村は、夏の講座開講の前に、県内の新聞各紙上に「自由大学へ」と題する一文を草し、自由大学への参加を広く呼びかけた（『北越新報』1924年7月10日、『新潟時事新聞』同年7月11日、佐藤編 1981：182-183）。

「我々の自由大学の季節が来た、友よ鋤を捨て鎌を収めて、新しい講義を聞く人とならうではないか。どんな新しい呼び声が我々の耳に響いて来るか。其れを思ふのは今から大なる楽しみだ。

我々は人間になるのだ。人間らしい人間になるのだ。からつぽな政治騒ぎや村治の改良が何の役に立つか 我々は先づ自分の精神をしつかりと建設しなければならない。自分は家庭の事情で大学まで進んで行く事が出来なかつた。けれども自分は斯うして労働する事を人間として光榮だと信ずる。さうして今は家に居ながら此労働のあい間に大学の講義を系統的に聞くことの出来るは何といふ悦ばしさだ。自分の知識は磨かれて堂々たる学者の其れにも達しようけれども自分は一個の農夫だ、商人だ。其処に黙々たる生活の自信がある。

友よ我々を呼ぶ自由大学の鐘は高く鳴つて居る、さあ鋤を捨て鎌を収める時だ。我々自身の守り立てゝ居る学校が開かれるのだ。魚沼自由大学八海自由大学其れが今我々の生活を導いて居る目標だ。

我々の自由大学は所謂夏期大学とは類を異にして居る。我々の自由大学は毎年連続した講義を以て進められて行く。知識の断片を得て虚栄を大きくするので無い、考へる仕方を深めて人間の品位を高くして行くのだ、そして此自由大学を誰からも強制せられず自分自身の反面の要求からあらゆる犠牲を忍び共同の努力で擁護して行くのは何といふ壮快さだ。

我々は今いろいろの計画を持つて居る。それはこれから次第に実現せられて行くだらう。今はまだ自由大学の芽が生ひ出ただけだ。枯らすも生かすも其の責任は我々自身にある。友よ一人でも多くの友を呼び起して我々の新しい講義を聴かうでは無いか。自由大学の鐘は今しきりに鳴つて居る

だ。

我々は所謂夏期大学のやうに形式ばかり大きく内容のからつぽなものには飽き々々した。あのお祭り騒ぎの中から何が生れやう、我々の学校は丸太造りだ。柱からまだ葉のついた小枝が出てゐるだらう。けれども其処での講義は何処までも澄み切つたものだ。晴れた八海山嶺の星夜のやうに其処での恩情は内面突き進んで何処までも深いものだ。神秘の蔭深き魚沼の森林のやうに。

友よ自由大学の鐘は今しきりに鳴つてゐる。川を越え山を越え草の畝に木の葉の上に。友よさあ鋤を捨て鎌を収めて待つて居た新しい講義を貪り聞く時が来た！」

土田は、散文調のリズミカルな文章のなかに人間教育を目指す自由大学の理念を平易に説いて、自由大学への参加を呼びかけた。県当局は、この文章に対して何らかのクレームをつけたと思われ、土田は、渡辺に宛てた手紙の中で、「県の馬鹿らしい誤解を一掃するために此れを書いた。中川君（注、中川杏果－引用者）に見せて新聞にのせておいてくれ。成るべく長岡の中川君の新聞に」と書いている（渡辺泰亮宛土田杏村の手紙、1924年8月1日、佐藤編 1981：135）。

このような宣伝活動のあと、八海自由大学は、1924年8月1日から3日間、会場を浦佐村の浦佐小学校から普光寺に変更して第3回講座を開講した。

8月1日と2日は、山口正太郎の「経済学」で、聴講者は約150名であつた。1日は午前9時に渡辺泰亮が開会の辞を述べ、山口正太郎が「経済哲学に関する講義」をし、2日は午後2時まで講義があり、そのあと講師の慰労会が開かれている（『北越新報』1924年8月5日、佐藤編 1981：183）。

8月3日は、午前10時から2時間、午後は2時から2時間、野口雨情が「童心芸術、童謡教育」について講義をし、午後4時に渡辺が閉会の辞を述べて散会したが、このときは約200名の聴講者があつた（『北越新報』1924年8月5日）。野口雨情の講義は、『新潟毎日新聞』の記事によれば、「童心教育の本質より現代教育は偏科学的教育で一番大切な自然の儘なる自由な意志を奪ひ知らず知らずに暗い深淵に引入るの感がある此理知的教育を緩和せしむるには童心芸術ならざるべからずと述べ更に童謡とは童心を通じて見たる事物の生活を音楽的旋律のある今日の言葉で云ひはらはされた芸文であると童謡の標語を示して童謡と教育の一致点を述べ童謡は児童の世界になくってはならぬ宗教なりと縷々講演」したという（『新潟毎日新聞』1924年8月5日、佐藤編 1981：183）。渡辺亮村（泰亮）は、「野口雨情先生の人と芸術」という一文を書き、このときの野口雨情の講義を振り返って、次のように書いている（『魚沼新報』1924年8月21日、佐藤編 1981：184-185）⁽³²⁾。

「先生の御話は、失礼な申分ではあるが流暢ではない。講義体でも演説体でもなく、そして特得の妙技といへたいが、技巧は決して甘い方ではない。どちらかと言へば聴きにくい方だ。

其のきゝにくい御話が先生の内容を盛るに最もふさはしいものであつた。

先生は壇上で次ぎ次ぎと創作されてくる態度なのだ。そして聴衆も創作しつゝ先生を追つて行く。これが文芸講義の真諦でなくてどうしよう。

私共は流暢な快弁によつて胡麻化され、ホット息づいて内容の全部が消え去る政談演説や通俗講話をしばしば聞かされた。

先生の御主張は我が国民性の基調にある我が国古来の文学は決して論理整然といつた流暢なものではないと思ふ。此処にも壇上の先生の面影が深くしのばれる。

そして素朴な姿、質実な言葉、汗をふかれるひよつとした機会にさへ、ゆかしく接近させられて、土の叫び、地の匂ひ、真個に郷土の静けさをたゞへて、内に燃える情熱の突端に暗示させられたことのいかにも大きかつたことよ！」

渡辺によれば、雨情は、壇上で次々と詩を創作し、「聴衆も創作しつゝ先生を追つて行」つたとあり、受講者は講義を一方的に聴いているのではなく、受講者にも創作させていたのが注目される。

このような講演の前提となっていた野口雨情の童謡、童謡教育の考え方を確認しておく、雨情は、

「童謡——童謡教育——これのみが現代の様な過渡時代の児童の心を救ひ、将来棲み心地よき国家をつくらしめる唯一の力であります」（野口 1923b：5）と述べた上で、「童謡は和歌や俳句や川柳などゝ違つて、形式も約束もなく、自由に唄ひたいことを唄ふことの出来る自由詩であります。そしてまた誰にも分り易く、やさしい口語で書かれ、日常のお話そのまゝが、リズムカルになつたものが、即ちそれなのでありますから、誰にも唄へると同時に、また作ることも出来るのであります」と述べて、自由で、やさしく歌えるところに創作できるところに童謡の魅力があることを説いた。童謡や民謡が急速な勢いで民衆に受け入れられていったのは、「何人にも解る、平易な、そして率直に自分達の心を表現してくれる、民衆そのものの詩を要求して来た」からだ、というのがかれの主張であつた（野口 1923a：37、36）。

雨情は、童謡教育について、単に童謡を教えたり、童謡作家を養成するためではなく、「児童の心を干からびさせないための感情教育が童謡教育」であり、「情操の陶冶が目的」である、と述べ（野口 1924：147）、その上で、「童謡は唄ふためのもので、読むためのものではありません」と、童謡の本質は歌うことであるとし（野口 1921：114）、「童謡作法の指導」にあたっては、「自然と心に浮ぶ感じをそのまゝ紙に書」かせ、音律は考えてばかりでは整つてこないで、「口に出し、声に出して歌ひながら文句を並べてみるうちに、自然と出て来るもの」を大切にすることを説いている。指導者は、知らず知らずのうちに「成人の世界から、物質的、科学的の世界から物を見る弊」があることを注意し、「路傍の一木一草のうちにも詩は宿つて」いることをふまえ、それを「本当に子供らしい気持（童心）で発見する」のを手助けするように努めるのが役割であるとしたのである（野口 1923c：148-162）。そして、雨情は、「鳥なぜ啼くの…」という「七つの子」に触れて、当時の修身教育のあり方を、次のように批判している（野口 1923b：11-12）。

「この童謡を児童に唄はせて御覧なさい、唄つてみるうちに、自然と児童の心に湧いて来る、鳥に対する愛情、自然に対する愛の感情は、決して『鳥を愛せよ』と云つて、外部から押しつけて行つて湧く感情ではありません。湧く感情といふよりは、寧ろ、児童の心の中に眠つてゐたものを目覚ましメル感情と云つた方が適切かも知れません。『鳥を愛せ……』と云つて押しつけて行けば、或は『鳥を愛します』と口では答へ得る児童が何人も出来て来るでせう。けれども、親には孝、君には忠、の場合と同じ様に、実際に於ては、それは何の役にも立たないのであります。『鳥を愛せ』と云つて繰り返し教へる代りに、『七つの子』の童謡を屢々唄はせて御覧なさい、その方がきつと、児童には、その内容がよく理解も出来ます。その上此の童謡に含まれてゐる純な感情は、単に鳥に対しての愛ばかりでなく、それを遙かに越えて、宗教の根本である万物に対する愛の感情をも 唄^{はぐく}んで行くことが出来ます。」

野口雨情は、このような考えにもとづいて童謡や新民謡を普及させるために、1920年以降、中山晋平、佐藤千夜子、藤間静枝らを連れだつて全国行脚を行った。新潟県でも、1922年11月と23年5月に新潟市の新潟師範学校で、23年9月には佐渡の新穂小学校で講演会を行っている（東 1995：414-425）。雨情や晋平にとっては、こうした講演会や音楽会は全国行脚の一環に位置づけられるものであつた。それが八海自由大学の講座の1つとして認知されたのは、芳井研一も指摘するように、かれらの「童謡や新民謡の普及活動が、自由大学の理念とある部分で通底していた」からだといえよう（芳井 2018：8）。雨情は、童謡について、「一番わかりよく云へば、自由画を言葉であらはしたものが童謡だと思つて下さい」と述べていたように、山本鼎が提唱し、全国に普及しつつあつた自由画にたとえていた（野口 1920：94）。既成の教育への批判と教育改造への主張は、童謡教育にも、自由画教育にも、また、自由大学にも共通するものであつたといえる。

ところで、この山口正太郎と野口雨情の講座は、150名から200名という多数の聴講者を集めることができた。その要因について安達朋子は、講師に野口雨情を招いたことと、聴講者の勧誘方法をあ

げている。童謡は教員にとっても、一般の村民にとっても親しみやすく、気軽に参加できたこと、また、聴講者への参加呼びかけも、魚沼では教員を中心に案内状を送るか響倶楽部の呼びかけが主であったが、八海では伊米ヶ崎小学校長の渡辺泰亮が直接、教員や村民、青年団、婦人会に働きかけたことが功を奏したのである。とくに青年たちの有志で出していた雑誌『高陽』は、泰亮が名付け親で、「指導には直接当らないが、論文を載せ、芸術を語り、弁論を誘導してその影響は計り知れないものがあった」といわれ（桑原 1973：271）、青年たちの参加は大きな比重を占めていたといわれる（安達 1983：32）。

八海自由大学では、会員制をとり会員は毎月50銭の会費を積み立て、会員外は1講座1円50銭の聴講料を徴収したが、これも毎回聴講料を徴収する魚沼とは異なっていた。会計簿などが発見されておらず、どのくらいの人が会員になっていたかも不明であるが、会員にとっては負担の軽減になっていたと考えられる。渡辺はつ江は、「この積立制度に何名の人が協力したかは疑問である」とし、また、農作業を休んだ上に聴講料を支払って講座に出席するには家族の承諾がなければならなかったとし、自由大学を聴講するのは大変だった、述べている（渡辺 1979：23-24）⁽³³⁾。

(2) 自由大学協会の成立と渡辺泰亮

八海自由大学の夏の講座の成功にひとまず安心した渡辺泰亮は、落ち着く暇もなく8月15日、長野県別所温泉のタクラ・テル宅で開かれた自由大学協会の設立準備会に魚沼・八海両自由大学を代表して出席した。

長野県上田市に1921年11月に開講した上田自由大学（創設時は信濃自由大学）に始まる自由大学運動は、その後、22年8月に魚沼自由大学（創設時は魚沼夏季大学）、23年1月に福島県相馬郡原町に東北文化学院⁽³⁴⁾、23年12月に八海自由大学、24年1月に長野県下伊那郡飯田町に伊那自由大学（創設時は信南自由大学）と各地に広がっていった。

土田杏村は、1923年4月に渡辺泰亮に宛てた手紙の中で、「信州で三年間やつた実験を中心として、全国の自由大学聯盟をつくる計画中だ。さうなつたら君の方も是非加盟して貰ひ、単に夏だけといふではなしに、もつと数回連続的に開くことの出来るものにしようではないか。この聯盟をつくるため、信州の連中は一生懸命になつて居る」と書いていた（渡辺泰亮宛土田杏村の手紙、1923年4月13日、佐藤編 1981：81）。この連盟機関設立の具体化が図られていったのは、24年1月に信南自由大学に出講した山本宣治が、その設立を土田杏村に提案してからであった。かれは、土田に宛てて、「飯田の報告と、自由大学の連盟策に就て私見お耳にいれたい（きいて貰へば宜しい丈、あへて難渋の咽喉を煩はして論戦に及ばずとして）。かへつてから一応伺はうと思ふが、大兄の健康と時間との御都合も承りたし」と書き送っている（土田杏村宛山本宣治の手紙、1924年1月15日、佐々木・小田切編 1979：206）。同じ時期に八海自由大学の渡辺泰亮に宛てた手紙では、「自由大学の聯盟の機関紙のやうなものの必要を感じられます。官憲の思想圧迫に対抗する示威といふ意味でなく、唯相互の協力運動（講師の選択やりくり、必要な読物の配給、出版屋には不可能なパンフレットの準備等）にだけでも大いに有意義かと思はれます」と、いくつか具体的な提案を書いている（渡辺泰亮宛山本宣治の手紙、1924年1月18日、佐藤編 1981：117）。これ以後、連盟機関設立の構想は、土田杏村と上田自由大学関係者の手で具体化されていった。土田は、8月3日、伊那自由大学の横田憲治に宛てて手紙を書き送り、「自由大学協会」の構想を披瀝している。すなわち、「今年あたりは是非相互の連盟をつくりたいと思ふがいかがですか。自由大学協会とか何とかいふ様なものをつくり、それは会員を共通とし、毎月、会費を十銭位づゝ徴集し、信州の二箇所、越後の二箇所を合すれば会員が少くとも八百名は得られませう。さうすれば、機関紙を出すことも出来ます。機関紙が出来れば会員の熱も大いに違って来ると思ひます。そして講師はお互ひによく融通して一方の歸りに他方へ行くといふ様な具合

にして、なるべく計費を節減し、また講師の時間の妨害をしないやうにしたいものです」と、具体案を示し、そのうえで「打ち合せ会を一度上田で開きたい」旨を伝えている（横田憲治宛土田杏村の手紙、1924年8月3日、山野編 1973：17-18）。

こうした経緯を経て自由大学協会の設立準備会が8月15日、別所温泉のタカクラ宅で開かれた。この設立準備会には、上田自由大学から金井正・山越脩蔵・猪坂直一、魚沼・八海両自由大学より渡辺泰亮、それにタカクラ・テルが出席した。協議の結果、(1)連盟機関を「自由大学協会」と名づける、(2)機関雑誌を発行する、(3)「自由大学協会規約」の決議、(4)協会の専務幹事に猪坂直一を推薦、の4項目が決定された。こうして自由大学協会は、上田・伊那・魚沼・八海の4自由大学（のち松本自由大学を加えて5自由大学）が加盟して発足したのである（『自由大学雑誌』第1巻第1号、1925年1月）。

自由大学協会の活動は、講師の斡旋と機関雑誌の刊行、各自由大学間の連絡が中心であった。

講師の斡旋は、専務幹事の猪坂直一を通して出講を依頼する方法をとることにしていたが、この猪坂を通しての講師依頼は、伊那自由大学の24年10月からの講師に対してなされた程度で、それ以外の自由大学はそれぞれ独自に講師依頼をしており、必ずしも土田が意図するようなかたちにはならなかった。

機関雑誌の刊行は、協会の発足当初から準備がすすめられ、1925年1月に『自由大学雑誌』の名称で、月刊雑誌として刊行された。この雑誌の編集には猪坂直一があたり、25年12月までに11冊を刊行した。その購読者は、『自由大学雑誌発送簿』（1925年1月現在）によって知ることができるが、全国で382名の購読者リストが記載されている。道府県別の内訳をみると、長野県は上田・小県地域191名、郡外21名で計212名、県外では、青森県の57名が突出して多いほか、京都府の17名、東京府の14名、北海道の11名など31道府県と1植民地（台湾）の170名の名前が確認できる。新潟県は7名で、その中には中川杏果の名前も記載されているが、魚沼自由大学の林広策、八海自由大学の渡辺泰亮ら各地の自由大学の運営者の名前はなく、おそらく運営者のもとへは別に一括して雑誌が送られたものと思われる（山野 2022：93-103）。

『自由大学雑誌』には、渡辺泰亮も「魚沼、八海自由大学便り」を執筆し、自由大学の場所は八海山嶺が眺められる雪深い土地にあること、土田杏村の「自由大学へ」の一節を引いて働きながら学び「人間らしい人間になること」が目的であること、大正14年度の講座の計画や自由大学協会幹部会を当地で開催したいことなどを記している（渡辺 1925a：25-26）。

自由大学協会は、25年9月20日、25年秋からの開講を前に、各自由大学の計画を協議するため、長野県別所温泉花屋ホテルにおいて幹事会を開催した。この幹事会には、専務幹事の猪坂直一、上田自由大学から山越脩蔵、伊那自由大学から吉沢敏二、魚沼自由大学から加藤金治、それにタカクラ・テルが出席したが、八海自由大学からは出席がなかった。そこでは、(1)各自由大学の方針経営方法の件、(2)今期の講座及講師の予定及交渉の件、(3)協会機関誌の編集及び経営の件、(4)次回協会幹事会開催の件、が協議された（猪坂b 1925：15）。

しかし、その後の自由大学協会は、機関雑誌の刊行を継続したほかは、経営難からほとんど活動しえなくなっていた。そして26年3月、協会の中心であった上田自由大学が経営難から講座を中断せざるをえなくなるとともに、自由大学協会もまた自然消滅のかたちで活動を停止していった。

(3) 魚沼自由大学の内紛

一方、魚沼自由大学の第3回講座は、このあとをうけて、8月18日から20日までの3日間、堀之内小学校を会場として開かれた。講師はタカクラ・テルと由良哲次の2人であった。

当初予定していた山内得立は、7月に入ってから、「此程より健康を害し此夏は精養の要を医師よ

り勧告いたされ候故残念ながら折角の御招待をお断りいたし度候何卒あしからず御寛容の程ひとへに願上候」と断りの手紙が来たことから（渡辺泰亮宛山内得立の手紙、1924年7月7日、佐藤編 1981：133）、渡辺から連絡を受けた土田は、杉森孝次郎や浜田弥助、由良哲次らに連絡を取り、ようやく8月7日に由良に決まったことを渡辺に知らせている（渡辺泰亮宛土田杏村の葉書、1924年8月7日、佐藤編 1981：136）。

講義は、タカクラが午前中「文学論（ダンテ）」を、由良が午後「現代の哲学、特にナトルプに就て」を講義した。聴講者は約100名であった。

『北越新報』は、初日の様子を、次のように伝えている（『北越新報』1924年8月19日、佐藤編 1981：184）。

「魚沼自由大学は既報の如く十八日から堀之内小学校で開催された。同大学は上越線堀之内駅開通の年から響会員（注、響倶楽部会員－引用者）主催となつて土田杏村氏を聘して毎年開催する仕組であつたが、本年も杏村氏が出講の筈の処病気の為、同氏斡旋の下に由良講師の来場となつた、聴講者も人数多数とは云ひ難いが毎年連続的の講演である処から、尤も熱心な人々と又既報講師の学説要項を希望して入学の人達を合し中魚、北魚、南魚、古志、長岡方面の教員、学生を最多として農商業家、僧侶の各階級を網羅して女子も加はり約百名近く一堂に会した十八日は初日のこととて午前九時開会して直に高倉講師の講義に移つたが熱心なる講師に引きつけられ聴講者一同も倦怠を覚ゆる炎暑を冒してノート筆記や熟講に熱心なものがある約二時間の聴講後更に質問に応じて十一時半休憩したが午後二時から由良講師に変つて『現代の哲学特にナトルプに就て』の題下に各要項を挙げ之亦懇切な講義をなし午後四時頃第一日目を終了した」

林広策は教員の講習が高田であり出席していなかったが、かれによれば、響倶楽部のメンバーの話だと考えられるが、「高倉さんの話はわかりやすいんですが、しかしダンテはわからんと言っていました」という（林 1979：39-40）。上田と伊那の自由大学ではタカクラの講義に対する評価は高かったが、響倶楽部のとくに実業メンバーは文学や哲学への関心が薄かったせいか、かなり異なる評価につながっていたようだ。

講師であった由良もタカクラの講義を聴講していたが、のちに次のような感想を書き残している（由良 1968：20）

「講師のもう一人は高倉輝氏であった。高倉氏の講義は、たしかダンテの神曲についてであつたと思う－それをラテン語の原典を引用しつつ話されるので、先回に続く講義らしく地方の農商の実務に随っている人々にとって直ちに生活に接続するものではなかったが、何となく人間的な親しみがあつて聴講の人々と相通うものがあつた。それに比しては私の書生っぽい生硬な哲学の講義は聴者にとって余り身につく所の多いものではなかった。」

タカクラの講義は一般の聴講者と「相通うものがあつた」という由良の評価は、響倶楽部の実業メンバーの評価とは微妙に異なっていることがうかがえる。また、自己の講義が「書生っぽい生硬」な講義であつたことを反省している。

由良哲次は、魚沼自由大学に出講した経緯と、初めて社会人向けの講義を終えたあとの自己評価などを、次のように書き記している（由良 1968：19-20）。

「大正十三年の夏のことと記憶する。私が京都大学の哲学科一年生で北白川に所帯をもった年である。大学一年の学生といつても、土田杏村氏の後輩として東京高師を出、更にその専攻科を卒業してから京大に入ったので、卅歳を過ぎていた。突然新町頭の杏村氏から、「自分が行くべきところ病気で行けないから自由大学へ行って代講をしてほしい、時日迫つてのっぴきならぬからぜひ……」という手紙に－困つたとは思つたが、取るもまも取りあえず行くことにした。行き先は越後の堀之内であつた。その時は上越線が未開通で堀之内までついていた。

堀之内は雪深い所で町の家^マの構造は雪トンネルを予想したもので私には珍らしかった。会場は小学校で、集まった会員は農業などの実務についている熱心な青年を中心としてその地方のインテリイ層の人々であった。(中略)人の前に立って講演的なものとしたが、この堀之内の自由大学が最初であった。(中略)

何しろ学生の最初の講義であって拙劣さを慚愧していたので、私は固より報酬は考えていなかった。ところが帰宅して戴いた包を開いて驚いた。それは書生に贈られたものとしては、まことに多額なものであった。私はとまどって半額を杏村氏に返した。杏村氏は、例の先の太い万年筆の手紙で労と好意を謝して、その額は堀之内へ送って来年の予備にしようとの事であった。」

由良は、学生の身で初めて人の前に立って講義をし、その「拙劣さ」を恥じていたにもかかわらず、多額の謝礼をもらったため、土田に半額を返したというのである。

魚沼自由大学の講義を終えて京都に帰った由良は、8月23日、渡辺泰亮に宛てて、次のように書き送っている(渡辺泰亮宛由良哲次の手紙、1924年8月23日、佐藤編 1981:137-138)。

「錦地滞在中ハ誠に一方ならぬ御芳誼を受け有難く茲に深謝し奉ります 折角の学を愛する熱誠なる青年諸彦の御招きニよりたるニかゝはらず全く小生の未熟と不才の為毫も御期待にそふ能はず徒らに諸彦の時間を空費したるの罪は実に慚愧ニたえません。今少し時間もありたらバと思ひ、あの所をかくも言へばよかりしなど後悔のみ致されます。さなきだに謝礼とて小生如きものニかゝる過大の贈与をうけてハ全く小生の苦痛この上なく、せめてその半額なりと返送せんと決心致し居りましたが、それも又戻されたりなどして複雑なるのみですから、とにかく拝受いたしおき、小生の責務としてかの講演の結末だけハつけるの義務ある為来春三月以後(三月までハ試験と論文ニて全く閉口です)開講の期ニ番外として附加下され、かゝるもの(注、謝礼ー引用者)は重ねて受けぬこととして、有志の人々にのみかの続き西南学派とマルブルヒ学派の概要を語って結末だけはつけたいとの責任感にうたれて居ります。いつでもよろしいから必ずもう一度参ります。

ここに金十五円券封入しておきました。これハ些少乍ら御地への御礼の意味で宮(注、宮芳平ー引用者)さんの絵具代ニさし上げて下さい。錦地の青年達一般への感謝のしるしニすぎないのです。どうぞよろしく御取りつぎを祈ります。」

由良は、不十分な講義であったことを詫びて、続きの講義をしたいとの意向を伝えているが、その意向は果たせなかったものの、誠実な人柄が文面からにじみでている手紙である。

手紙の最後にある「宮さんの絵具代」は、講義の休憩時間を利用して絵画の作品展示をした宮芳平をねぎらう由良の志であった。

この第3回講座では、講義の休憩時間を利用して、絵画の作品展示だけでなく、レコードコンサート、仕舞の披露が行われた。『北越新報』(1924年8月19日)によれば、堀之内村出身の洋画家である宮芳平が、自分の作品50余点を一般休憩室に展示し、小千谷町の小船井時計店の店主小船井友治が昼の休憩時間を利用してレコードコンサートを開き、また、19日の昼の休憩時間には堀之内村の瓢会有志が田村・松風・小袖・曾我などの仕舞を演じた。これらは講義の休憩時間に、聴講者の息抜きとして行われ、中条登志雄が企画したものといわれている(林 1979:47)。

宮芳平⁽³⁵⁾は、堀之内村の丸末書店主人・宮保治の末弟で、柏崎中学校卒業後、1913年、3度目の受験で東京美術学校に入学、在学中の14年、東京大正博覧会に「カーテンに」が入選したのち、第8回文展に自信作「椿」を出品したが落選する。落選の理由を聞きに文展審査員であった森鷗外を訪ねた縁で知遇を得て、その後、鷗外は、芳平をモデルにした短編小説「天寵」を執筆している。15年の第9回文展で「海のメランコリー」が入選、18年には日本美術院洋画部の研究所に入り、山崎省三・村山槐多・原田恭平らとともに山本鼎の指導を受ける。また、師事していた中村彝の紹介で、23年に長野県諏訪高等女学校の美術教師の職に就き、諏訪で35年間の教師生活を送りながら、市井

の画家として絵を描き続けた。24年8月の魚沼自由大学での作品展示が機縁で、中条登志雄の紹介でタクラ・テルと知り合い、以後、タクラとの交流が始まり、のちにタクラの肖像画を描いている（竹中 1979；宮 2010）。

大正前半期の芳平の初期作品は、今日、新印象派の代名詞ともなっている「点描」の技法を使って描いたもので、当時では珍しく一般化していなかったという（堀切 1995：50-51）。芳平が初めてキャンバスに油彩で描いた作品「カーテンに」について「走るようには描けない／ポツンポツンと印象派の絵のように点点で絵の具をつけていった／その色がお互いに共鳴し合って、いゝ雰囲気を出してくれると思った」と、芳平自身は述べている（宮 2010：175）。デッサンよりも色彩表現を重視しようとした芳平の姿勢がうかがえるが、そうした作品が自由大学のときにも展示されていたものと思われる。

講義の合間にレコードコンサートや絵画の小展覧会を行ったことは、自由大学の中では異色の催しであったが、このことは、魚沼自由大学が学習の場であるとともに「地域の文化センター的役割」を果たしていたことを示している（森山 1971：167）。また、絵画の小展覧会は、「中央の画壇に地位を占めて居られる美術家の小さな作品を地方到る処の隅々までも持ち廻つて小規模の美術展覧会を開き、地方民衆の一般的芸術教育を達成したい」という土田杏村の「巡回美術展覧会」の構想につながる催しでもあったといえよう（土田 1932：172）。

魚沼自由大学では、夏季大学として始まったときから教育会から補助金を得ていたが、1923年から自由大学と名称を変えてからは堀之内村から補助金を受けている。村当局は、「夏季大学講習会補助」として「講習費」の名目で100円の補助金を予算化し、26年まで補助金を出している（山野解説 1979：62-64）。村当局が自由大学に補助金を支出していることについて、『新潟毎日新聞』は「堀之内村に於ては毎年多額の補助金を出して此の事業を援助して来たが緊縮を主とした今年度に於ても尚従来の補助を継続してその発達を期することである」と報じている（『新潟毎日新聞』1925年3月14日、佐藤編 1981：194）。村当局が自由大学に補助金を出すようになったのは、22年の夏季大学のときにお金が不足したことから、林広策が懇意にしていた助役の渡辺富太郎に村からの補助を依頼したところ、快く承諾してくれたことによる（林 1979：42）。

自由大学が村当局などから補助金を受けることは、「経費の全部を会員の持ち寄る少額の会費によつて支弁するのを原則とする」（猪坂 1925a：18）自由大学の趣旨から逸脱しているといわなければならない。しかし、土田杏村は、この補助金の問題に対しては異論をはさんではいなかったと思われ、魚沼・八海両自由大学が刊行予定のパンフレットの原稿と思われる「自由大学の意義」と題する論文の中で、各地で開催している夏期大学や公民大学のあり方を批判して、「教育とは自律的人格をつくることであり、且つ成人教育に於ては特に自学自治の習慣を養成生長せしむべきものなるが故に、官公的集団が成人教育機関を設立支持することは、実は民衆に対して親切なるものでなく、且つ理想として、自由大学の高潮する教育の自由を奪ふことになると思ふのである。此の故に我々は飽くまでも、其等の集団より離れ、民衆自身の要求に即して自由大学を設立し、民衆自身の熱心によって此れを支持して行かうと思ふ」と主張したのち、「郡教育会其他此れに類する官公的集団が自由大学を側より援助することは、我々の歓迎し、感謝するところなるは言ふまでも無い」と述べている（土田 1924、佐藤編 1977：79-80）⁽³⁶⁾。

村当局が補助金の支出を理由に自由大学の学習活動に干渉を加えた事実は見られない。1924年2月27日の堀之内村会で滝沢招平が「夏季大学ニ付」質問をし、渡辺助役が「応答」しているが（「大正十三年第二回村会議事録」、山野解説 1979：65）、その質疑の具体的な内容は不明である。ただ林広策は、質問した滝沢は自由大学には批判的だったといわれる（林 1979：43）。

新潟では講義の合間に輪読会や研究会を開くことも行われた。八海自由大学では「会員の相互研究

及び親睦を図るため」24年5月にカント生誕200年祭とともに研究会を開いたことが知られる（『魚沼新報』1924年5月1日、佐藤編 1981：181）。また、タカラ・テルが伊那自由大学の横田憲治に宛てた手紙（1924年10月26日、山野編 1973：29）には、「越後では『哲学以前』の輪読をやってをります」と書いており、輪読会が行われていたことも知られる。

このように八海でも魚沼でも第3回講座が成功し、その合間に研究会や輪読会が行われるなどの動きがあったことから⁽³⁷⁾、土田杏村が「自由大学の方は一先づ心配がなくなった。一安心した。自由大学について報道せられて居た新聞は何でも見せてくれ」と書いたのも当然であった（渡辺泰亮宛土田杏村の葉書、1924年8月9日、佐藤編 1981：136）。

ところが、魚沼自由大学では、8月の講座が終わった直後から、運営者の間で内紛が生じていた。すなわち、将来の自由大学のあり方をめぐって、響倶楽部の主流である実業メンバーと小学校教員を中心とするメンバーとの間で見解の対立が表面化したのである。前者は、講師の人選にあたって、現実の政治や経済に関わる講座や聴講者が多く集まる講師を招くことを主張したのに対し、後者は、聴講者が少なくとも落ち着いて学習していける講師を招くことを主張したといわれる⁽³⁸⁾。とくに前者は、お金が意外にかかることと思ったほど聴講者が集まらなかったこと、そして講義内容が自分たちの要求とはずれていたことが大きな不満になっていたと考えられる。その結果、これまで自由大学を主催していた響倶楽部の主流であった長尾喜三郎・中林昌平らは自由大学の運営から手を引くことになった。渡辺泰亮は、10月末頃に土田杏村に宛てたと思われる手紙の草稿の中で、「魚沼の方がちと内部で革命を起してしまって二三ヶ月弱らせれました。もう大丈夫です。くだらない奴ははねてしまっってきっぱりと固めました」と述べている（佐藤編 1981：140）。

内紛が一段落し、残った林広策・中条登志雄らは24年12月、「魚沼自由大学会」創立総会を開き、会則を定め、会員名簿を作成した⁽³⁹⁾。会費は月1円、毎月例会を持ち、会員相互で研究発表を行うこととした。役員は、専務理事に林広策⁽⁴⁰⁾、理事に中条登志雄、会計に宮貞一、会員には小川賢太郎、下村正作、近藤教伝、林栄作、加藤金治、森山亀吉らで、地元青年、教員が多かった。こうして魚沼自由大学は、響倶楽部とは離れ、新たな体制で学習活動が続けていくことになった。

5. 魚沼・八海両自由大学の後半期

(1) 富田碎花のアイランド文学講座

新たな体制となった魚沼自由大学は、1925年2月3日に第2回例会を堀之内小学校で開いている。研究発表は堀之内実業補習学校教員・吉田芳松の「農村問題」であった（「魚沼自由大学第二回例会通知」、山野解説 1979：59-60）。吉田は、山崎延吉が校長であった愛知県立農林学校の出身で、農業技手でもあり、専門領域の発表であった。林広策によれば、会員の多くはよく読書をし、『哲学以前』も読んでいたが、輪読会のように組織的に開いたわけではなく、例会も2回で終わった。ただ林の場合有志で、森山新三、星野三九郎らと『貧乏物語』や『資本論』を読みあったという（佐藤 1979：12）。

また、理事であった中条登志雄が丸末書店を辞めて東京の出版社アルスに入社したため⁽⁴¹⁾、役員改選が行われ、新たな理事に加藤金治になった（『自由大学雑誌』第1巻第3号、1925年3月）。渡辺泰亮は、中条が自由大学から去ったことについて、「魚沼自由大学に中條君を失ったことはかなしい。しかし同君は高倉講師の御世話で「アルス」へ入社してるから、なにかに便宜をはかつてくれる筈。林両君森山君等が新装して堅実に奮闘してくれることを感謝する」と述べている（渡辺 1925a：26）。

渡辺は、1925年の計画として、「高倉講師の ダンテの続講」「山口講師の 経済哲学続講」「夏期には音楽か絵画か詩の方面の特別講座」「山本講師の 生物学続講」「未定 哲学講義続講」をあげていた（渡辺 1925a：26）。しかし、講座の開講は計画通りには進まなかった。渡辺は、中川杏果の斡旋で、詩人の富田碎花を講師に招くことができた⁽⁴²⁾。

講師に富田碎花が決まると『新潟毎日新聞』は、魚沼「自由大学は従来響倶楽部の主催として既に三ヶ年間継続し来つたものであるが本年から離れ同村（注、堀之内村－引用者）青年附近学校青年教育者とて魚沼自由大学会を組織し陣容をあらたにして望むことゝなつた」と、自由大学の運営体制が変わったことを伝え、また、「あたらしい試みとして毎夜六時からの開講」と、これまでの昼間の開講から変更したことを伝えている（『新潟毎日新聞』1925年3月11日、佐藤編 1981：194）。講義時間を夜間にしたのは、昼間働いている人たちの便宜を図り、聴講者を増やすためであったと考えられる。

こうして魚沼・八海両自由大学の第4回講座は、25年3月に開かれ、富田碎花が「土の文学－アイルランド文学を中心として－」を講義した⁽⁴³⁾。

講師の富田碎花は、岩手県出身で、はじめ石川啄木の影響を受け歌人として出発したが、アメリカの詩人ホイットマンの『草の葉』（大鐙閣、1919-20年）、イギリスの詩人カーペンターの『カーペンター詩集』（新潮社、1920年）を翻訳して刊行し、かれらの詩を初めて日本に紹介した。1915年に最初の詩集『末日頌』（岡村盛花堂）を上梓、福田正夫・白鳥省吾らとともに民衆派の詩人として活躍した。1921年、兵庫県芦屋に移住、22年には関西学院でアイルランド文学を講義している⁽⁴⁴⁾。

新潟ではまず、八海自由大学の講座が3月14日から3日間、伊米ヶ崎村大字大浦の佐藤清之丞宅で開かれた。会場となった佐藤清之丞の家はこの地域では「大清」と呼ばれる大地主であった。佐藤は湯本英一とともに自由大学の理事で事務局を担当していた（湯本 1972）。個人宅を会場にするという新しい試みであったが、聴講者は約80名を数えた。

八海自由大学での講義が終わると、翌日からは会場を堀之内小学校に移し、3月17日から3日間、魚沼自由大学の講座が開かれた。

富田のアイルランド文学の講義内容は不明であるが、前年7月に北海道野幌の林間大学で「民族性とその芸術的表現」という題目でアイルランド文学について講演しており、同じような内容の講義をしたと考えられる。野幌の講演では、中部ヨーロッパを発祥の地とするケルト民族は、ゲルマン民族とともにローマを領し、ローマ文明のゲルマニゼーションによってケルトは多くの働きをなしたが、「漸次に粗外されて終にイギリスに移り更にアイルランドに追はれる様にな」り、スカンジナビアその他の民族と戦って苦しい生活を営んだため、その間にいわゆる「ケルティック・テンペラメント」を伝えて、3000年の今日に及んだこと、ケルト民族はゲール語と英語の2つの言葉を使わなくてはならないという「言語の十字架を背ふ」苦しみをもち、そのためショー、シング、A.E、ワイルドなどの文学者の作品には「民族が圧迫に圧迫を加へられた反抗の気持が表はれてゐる」とし、そのrevoltなる精神は「民族を動かす大きな力」をなしていること、そして民族演劇運動を通じてアイルランド文芸復興の先頭に立ったのがノーベル文学賞を受賞したイェーツで、叙情詩的戯曲を書き、出世作に「アシンの漂泊」（「アシーンの放浪」）があることなどが語られている（富田 1925：37-49）。魚沼で富田の講義を聴講した林広策は、「なかなか面白かったです」と語っている（林 1979：44）。

富田碎花は、3月中旬とはいえ雪深い魚沼を訪れたときのことを、草稿「雪のメモ」の中で、次のように書いている（宮崎 1986：56-57）。

「上越北線と云へば、その鉄路に沿って越後の極地とも謂われる北魚沼、南魚沼などと云ふ郡があって、積雪量に於いては日本でも有数の地方である。（中略）私は東道の労を執ってくれるN（注、中川杏果－引用者）君と一緒に小出といふ町の駅で汽車を降りた。その町の中心ともいえるべき往

還では——（これは越後から清水越や三国越をして上州に出る街道に当る）屋根から下ろした雪が
聯檐^{のきなみ}の二階の窓に接するばかり堆高くなってゐて、電柱がちょつと首を出してゐるといった旺んな
光景を見てさらに驚きを新にした。季節はもう三月も半ば過ぎであるのに、南の方の国々になれば
もう早い燕は遠く海を越えて訪れて来てゐる頃なのだ。私たちはやけに細長い街の陰鬱なガンギの
下をくぐって通り抜けて行くのだった。（中略）

I（注、伊米ヶ崎－引用者）という村の或る部落や、小さな披の町には私を待ってゐて呉れる三
四十人のほどの人たちがゐるのだった。そのなかには、そこからさらに数里の山の向ふから来てゐ
る青年子女や老人もゐた。私は私の未熟の読書ではあるが、それから獲得したものをかうした粗朴
な知識欲に燃えた、好学な人たちの前に慳吝するために招かれたのだった。（中略）

北国の積雪下の、たとへ物資には裸のやうに貧寒であるにしても心豊かな富める農村の好学の人
たちよ、忘れ難い諸君と共にありし一週間よ！ 渺たる私といふ一介の読書生にとっても諸君の存
在は永く永くよき鞭撻であることを感謝する。」

積雪の中、遠方からも向学心に燃えて集まって来ている聴講者に感激し、富田も刺激を受けたこと
が知られる。

土田杏村は、8月に入って、林宛に、自由大学の経営への助言と9月に開く予定の自由大学協会打
合会への代表者の出席を求める、次のような手紙を書き送っている（林広策宛土田杏村の手紙、192
5年8月10日、佐藤編 1981：147）。

「君達の熱心さには感謝いたします。経済的にもなるべく無理のないやうにやつてくれたまへ。講
師の謝礼などもよく理解して貰へば少しも気ばる必要はないですから。

講師のことは万々交渉して決して遺漏のない様に致します。それですべての自由大学へ講師を旨
く振り分ける必要がありますから、（講師の謝礼などについても）九月早々に上田で全部の自由大
学の打ち合せ会を開きたいと思ひます。それへ代表者の御出席を願ひます。その時万事決定して、
その上で講師へ私が依頼状をかきます。」

手紙にある自由大学協会の幹事会は、既に触れたように、25年秋からの開講を前に、各自由大学
の計画を協議するため9月20日、長野県別所温泉花屋ホテルにおいて開催された。この幹事会には、
魚沼自由大学からは加藤金治が出席し、(1)各自由大学の方針経営方法の件、(2)今期の講座及講師の
予定及交渉の件、(3)協会機関誌の編集及び経営の件、(4)次回協会幹事会開催の件、が協議され、
魚沼自由大学の今期講座予定として、社会思想史、政治学、社会学、文学を決定し、協会より講師の
交渉をすることになった（猪坂b 1925：15）。

(2) 八海自由大学の音楽講習会

その後、八海自由大学では、8月1日に第5回講座として中山晋平と佐藤千夜子⁽⁴⁵⁾による音楽講
習会を六日町小学校で開講した⁽⁴⁶⁾。

講習会に先立ち、渡辺泰亮は、「我等の自由大学」と題する一文を『新潟毎日新聞』（1925年8月1
日、佐藤編 1977：72-74）に発表している。

渡辺は、その中で、日家庭の事情により高校・大学の教育を受けることが出来なかった、成人教育
の施設は断片的で自学的習慣を根本的に培ってくれなかった、また我々の生活は我々の生活を酷使し
て自学の時間と機会を奪って人間としての成長を錬磨してくれなかったとし、自由大学はこれに応え
るもので、「我等自身の手によつて組織」された「労働しつゝ学ぶ終生的の人格錬磨の道場」である
と主張し、最後に「我等自身は常に自重自愛人格の発展に^{ママ}焼点を据付け^{ママ}ふだんの読更見聞に経験の態
度を持」し、「終生的自己教育のパワシヨンの燃ゆる生活に生きること」を訴えた。

また、六日町小学校・六日町実科高等女学校長の渡辺信は、「八海大学開設に就いて」と題する一

文を『新潟毎日新聞』（1925年8月2日、佐藤編 1981：195-196）に寄せ、「南魚の文化に最も貢献をしてゐるものの一に八海自由大学なるものがある。大正十二の秋吾畏友渡辺泰亮君の首唱に依つて、高倉文学士を迎へて第一回の文学講座を開いたのに始まり爾来、文学、哲学、経済等にわたつて心身の大家をむかへて継続してゐるのである。一般民衆を相手としての此の種成人教育施設が普及されるといふことはやうやう教育が真の使命を辿りつゝあるやうな気がして、まことに快心に堪へない」と述べ、官製の成人教育機関のように「所謂目新しいことを大げさに一二回はやるが、後はさつぱり振はないといふやうな、場当りの施設ではなくて、細く長く真剣味がながれてゐること、経費の潤沢でない中に善心に善心を重ねて、経営を進めてゐる處を最も喜ぶものである」と述べている。そして経営者に望む、あまり多くの金をつかつて派手にやらうよりも長い間に多くの共鳴者、研究家を得て広告をせずとも百や二百の会員が集まつて真摯な研究が進められるやうに本大学の基礎を形造つていきたい」と、自由大学の運営者に対する要望を述べている。

さらに中山晋平は、講演会に先立ち、談話「童謡民謡と国民性」を『新潟毎日新聞』（1925年8月1日）に載せ、その抱負を語っている。中山は、最初に「近年起こつた童謡運動といふものが、日本人として国民性に立脚した児童の歌を作り出しその純真な心持を培つて行き度い、——といふよりはその純真な心持を培つて行くのが国民性に叶つた歌でなければならぬ、といふ考へから旺盛になつたものであることは今改めて私が云ふまでもないことと思ふ」と述べたあと、北原白秋や野口雨情の作品が「作曲されて児童達の口に歌はれるやうになつた時、作の持つ心持と歌はるゝ心持とが別々の道を歩いてゐる場合が実際に於ては多いのではあるまいか」とし、自分自身としては「歌詞の心持を出来得るだけ忠実に旋律化し度いといふことを絶えず念としてゐるところである」と作曲の態度を明らかにしている。そして「今度の夏季大学でお集まりになつた方々に御一緒に歌つて頂かうとするものは童謡にしても民謡にしても、其の大部分がある種の人々からは「あまりに日本的である」とか「田舎節臭い」とか云つた難を蒙らないものでもないと思ふが、自分の現在の考へとしてはさのみ邪道を歩いてゐるとは考へて居らぬ」と述べたうえで、音楽学校で西洋の歌謡の歌い方を土台に育った人は発音や節回しが「バタの匂ひ」が強烈で、童謡・民謡を歌われても「何処の国の童謡か民謡かハッキリせぬ場合が尠くない」が、「今度一緒に佐藤千夜子女史は幸に私の注文をかなりの程度までに容れてくられて、一緒に地方へ旅行された場合にはできるだけ地方々々に固有する民謡の研究等もされる方で、従つて今度の会にも私の民謡の心持のやうなものを思ひ通りに歌つて頂けるのは頗る幸福に思つて居る」と語っている。

このように自由大学の意義や期待、講習会の抱負が新聞に掲載される中で音楽講習会が開かれ、約150名の聴講者が集まつた。

中山晋平は、講義に先立ち、講習会の時間割を、次のように書き送り、「練習用歌曲」を謄写版で旋律を印刷するように依頼している（渡辺泰亮宛中山晋平の手紙、1925年7月23日、佐藤編 1981：147）。

「午前約二時間半 歌曲講習
約一時間 歌曲独唱
午後 約一時間 同 講習
約三十分 独唱

」

講習会の様子を『新潟毎日新聞』は、次ぎのように伝えている（『新潟毎日新聞』1925年8月3日、佐藤編 1981：195）。

「南魚沼郡八海自由大学では音楽界に名声ある中山晋平佐藤千夜子両氏を聘して一日午前九時から六日町小学校に於て音楽講習会を開催した受講者百五十余名定刻八海自由大学理事渡辺泰亮氏は開会の挨拶に次で講師を紹介し次に講師中山晋平氏の高く低く旋律をきざむピアノの弾奏につれて佐

藤千夜子は雪の夜、春の月、鶯の夢、雨降りのお月さん證誠寺の狸噺などの童謡を男子も及ばぬ声量豊かな美しい情熱的の歌ひぶりは一同を芸術の陶醉境に導き一曲毎に万雷の拍手が起るかくして暑い夏の日を涼しい感じに受講者を楽しき一日を送らしめ午後三時盛況裡に閉会午後四時より講師慰労の晚餐会を大熊屋旅館に開会し午後六時に散会した。」

この講習会を受講した伊米ヶ崎村の桑原福治は、その模様を、次のように回想している（桑原 1973：271-272）。

「わが母校伊米ヶ崎尋常高等小学校（注、六日町小学校の誤り－引用者）の門先に立看板が立てられ、各地から先生方が、三三、五五と集まって来た。音楽の大学を卒業し今は作曲もやる偉い先生がきたのだそうだ。とにかく、またとない機会だから行って見ようとでかけた。先生方の間にはさまって小さくなっていた。

午前中は佐藤千夜子のふるえ声の歌を聞いた。この人は洋行帰りで、これから修行して立派な声楽家になるのだというのが、さっぱり判らない。外国語でふるえ声で歌うのが判る筈もない。終ると拍手だけは人並におくってやった。中山先生の講義がはじまって、最近の傾向は童心芸術の勃興で童謡が大流行だといひ、童謡を教えることになった。同じオルガンでも非常にカン所がよく、はずみがうまいので歌を聞きながら自分の身体がぞくぞくと浮立ち、思わず身体が動くのである。歌詞を書いて読ませながら一、二回歌って見せて、その後は先生が一口歌ひ、講習生に一口歌わせる。こうして交互に歌ううちに、知らず知らずに覚え込む実にうまい教え方である。僅かのうちに童謡を七ツか八ツも教えて楽しく、和やかに日程が進む。」

桑原は、「この講習会が大成功で評判が良く」、講習を受けた先生方も、学校で「童謡を教えたので大流行になった」記している(47)。

八海自由大学では、以前に野口雨情が、今回は中山晋平、佐藤千夜子を講師に招いたが、この背景には、この地域の教員たちが文部省唱歌を中心とした音楽教育から離れ、童謡、綴り方、学校劇、自由画など童心芸術を実践していたことがあげられる。

綴り方では、子どもの生活を見つめる習慣の中から作文や詩など自由な表現活動が行われるようになり、この風潮は一般にも広まり、『北越新報』は毎週日曜日に童話、童謡、綴り方などを掲載する「ほくゑつ日曜欄」を設け、子どもや大人の作品を掲載した。たとえば、『北越新報』（1924年2月3日）には、「大風風吹くな／大風吹くと／木がゆれる／木々の小枝はさびしかろ／小鳥のねぐらはどこにある／大風吹くな風吹くな／大風吹くときがゆれる／親鳥小鳥が餌をとり／いつこのこつた鳥の巣の／大風吹くと／こはれるぞ」という北魚沼郡千谷小学校尋常科4年新保関一の童謡「大風」が掲載されている。

学校劇は、1921年11月に成城小学校の学芸会で日本で最初の「学校劇」が公開で上演されてから、全国に広まっていった（中野 1968：154）。浦佐小学校では、児童が自分の作文を全校児童の前で朗読する発表会が行われていたが、関東大震災のとき、ある被災者から、教え子を救うために自ら焼け落ちる学校と運命を共にしたという教師の話聞き取った教員の桑原亮太郎は、子どもたちと相談してこの悲壮な哀話をもとに脚本して「震災哀話慰問袋」という創作劇にして、卒業生による合同学芸会の場で発表している（桑原 1973：36；南魚沼市郷土史編さん委員会編 2020:302）。また、千溝小学校では25年2月の学芸会の中で学校劇が演じられている（『魚沼新報』1925年2月21日）。

星野右一郎によれば、当時伊米ヶ崎小学校教員の本宮信太郎は国語で成城学園のテキスト「鑑賞文集」を副読本として使い、「夏目漱石、吉田絃二郎等英文学者による口語文体の随筆や短篇、エッセイ等が盛り込まれ」「新しい文学の味はい方」を学習させたという（星野 1978：22）。また、桑原嵯峨雄は、「当時漸く台頭した北原白秋、野口雨情等当時のヌーベルバーグによる新体詩調になる童謡、及び英国民謡、アメリカの作曲家フォスター等の外国のフォークソングが原語のまゝで教えられたし、

又二部、三部合唱形式も取り入れられた」といわれる（星野 1973：18；星野 1978：22）。

1925年当時、三用小学校教員の桑原亮太郎⁽⁴⁸⁾は、1889年生まれであったから、自由大学開講当時は30代の気鋭の教員であった。1924年8月に野口雨情が八海自由大学で講義をしているが、同じ年に桑原は「童話と児童の教育」を執筆し、童話教育論を提唱している。桑原の論文は、『魚沼新報』の1924年12月から25年2月にかけて連載された⁽⁴⁹⁾。その「緒言」では、浜田広介や稲毛詛風らの童話関係の本とともに野口雨情の童謡に関する『童謡と児童の教育』『童謡十講』『童謡教育論』などの著書や土田杏村の『創作鑑賞教育論』上巻（桑原は『創作と鑑賞の教育』としているが誤り）を参考書としてあげ、また、稿を起こすにあたって渡辺泰亮伊米ヶ崎小学校長、田辺庄次浦佐小学校長、桜井進五郎三用小学校長から蔵書を借覧するなどの援助を受けたことについて謝辞を述べている。これらのことから、芳井研一も指摘しているように、桑原が執筆に際して自由大学の講師や近隣の小学校長から影響を受けていたことが知られる（芳井 2018：10）。

桑原の童話教育論は、次のようなものであった。

かれはまず、「従来児童の教育は、大人に成る準備の為めとのみ考へられて来」たが、近ごろでは、「児童自身の充実完成の為に、児童の生活を基調とする、新たなる教育が提唱されるやうに成つた」と、児童本位の教育に変わってきていることを指摘したうえで、「児童を児童として教育する為には、彼等の最も愛好する童話こそ、即ち彼等に最も必要な適切な教材でなければならない」とし、児童を教える教師は、「児童に正しい童話を授け、彼等に理想的な童話を撰んでやるべき、重大な責任がある」と、童話を研究する必要性を説いている。そして、童話の本質について、「芸術が人生的教養の一要素として、私共成人に絶大な使命を齎らしてゐると同様に、児童性教育の要素として、必然的に童心芸術が要求せられてゐる」とし、「童話は児童の芸術」である、と述べている。

かれによれば、「童話は児童の精神的生活の一要素」をなしており、「童心芸術のうち、最も重要な使命を帯びてゐる」のが童話である。児童教育は、「人類共通の大きな意識、理想、希望に向つて、共鳴する可能性を培養」するもので、「芸術が人生に慰安を与へ、最高の理想へ導くと同じく、童話は、児童に一種の愉悅を与へ、憧憬の世界」、すなわち「児童の理想の世界へと導き上げて行くもの」である。したがって「童話は、児童の心を最高の理想境へ導く一種の哲学」なのだと強調する。

「童話は児童に美しい純真な世界を与へ」、「総べて無限の生長を未来に孕み、永遠に伸びんとする生命の力を包んでいる」とし、童話は「この世に於て何が正しいと言ふか、何がほんとうであるといふか、自然に就いて学びこそすれ」、何かを教えるものではなく、「教へようと強くない童話にこそ却つて児童の生活を導く、尊いサムシングの内在してゐる事を思はなければならぬ」、と指摘している。そして、童話は、「修身談のやうに概念の押売や断片的な道德観念の注入ではなく、直接生命より生命への交渉であり、道德観念の応用、理解、体得の方面に向つての理想的材料の供給機関」であるとした。また、「童話は児童に創造的暗示を与へるもの」であるとし、「児童は童話として受領したものを直ちに、実現しよう」とするとし、「暗示より直ちに創造へ進む」ことを指摘し、童話教育を通した「創造」こそが児童に生命を与える、というのが桑原の結論であった（桑原 1924・25）。

童話は児童に創造的暗示を与え、童話教育が「創造」への回路になるとの想いは、桑原自身の若いときからの創作活動にもとづいた発想であった（芳井 2018：10-11）。桑原は、日常生活の中で俳句や短歌、詩などを思いつくままに詠み、発表していた。19歳から小説を書き始め、『秀才文壇』に掲載され、北越新報には「上越線開通後の対策」、魚沼新報に新作童話「牛のなさけ」を掲載、新潟毎日新聞や越佐新報には俳諧に関する文章を掲載している。また、昭和期以降になると、俳諧に関する文章をはじめ学校劇脚本集や童話、民話、紀行文、自伝的小説なども連載している（桑原 1974：6-7）。こうした多彩な執筆活動の中で、さきの童話教育論が着想され、執筆されたのである（芳井 2018：10-11）⁽⁵⁰⁾。

この南魚沼地域では、俳句が盛んで、各町村にそれぞれ住民による俳句の会がつくられ、1936年には約60の俳句のグループが生まれ、活発に句会が催され、中には俳誌を発行するところもあったといわれる（桑原 1936a）。桑原は、句会で俳句の指導をしたり、選者になったりしてもしていた。野口雨情や中山晋平の講座に多くの聴講者が集まった背景には、こうした俳句のネットワークがあり、この地域に創作の風土が広く存在していたことも関係していたと思われる（芳井 2018：11-13）。

（3）魚沼・八海両自由大学の終末

魚沼自由大学の第5回講座は1925年12月12日から5日間、堀之内小学校を会場に、同志社大学助手の住谷悦治⁽⁵¹⁾が「社会思想史」を講義した。聴講者は約50名であった。講義は、12日は午後2時より、13日は午前・午後、14日から16日は夜の開講と変則的な時間割で行われた（『新潟毎日新聞』1925年8月3日、佐藤編 1981：197）。

「社会思想史」の講座は当初、11月下旬に河野密が担当する予定であったが（『自由大学雑誌』第1巻第10号、1925年11月）、河野の都合がつかなくなったのか、住谷に変更になった。

講義は、次のような要項に沿って行われたと思われる（『自由大学雑誌』第1巻第11号、1925年12月）⁽⁵²⁾。

「第一講 近代に於ける社会的現実

イ、産業革命と資本主義の発生 ロ、資本主義社会の本質 ハ、社会主義、無政府主義、共産主義概説

第二講 理想者会に対する人間の夢

イ、近世初期 トマスモア、ベーコン ロ、近代 ベラミ、モリス、ウェルス、矢野龍溪

第三講 空想的社会主義

イ、フーリエ ロ、オウエン ハ、サン・シモン

第四講 科学的社会主義

イ、マルクス及エンゲルス ロ、唯物史観

第五講 社会主義社会の本質

イ、資本主義社会の矛盾 ロ、プロレタリア階級の台頭、要求 ハ、社会主義社会の本質

（附）社会主義国家論

マルクス及びレニンの国家論

」

住谷悦治は、魚沼自由大学に出講したときのことを、「土田・新明の紹介でわたくしも堀之内という農村の小学校で開かれた『自由大学』で一週間も社会思想史の講義（相互学習）をしたことがある。みな働く農村の男女や小学校の校長・諸先生五〇名ほどで熱心な学習が繰返された。（中略）大学を出て四年ばかりのわたくしを汽車の小駅まで送り迎えしてくれたことには恐縮した」と回想し、講義の内容については「エンゲルスの『空想的・科学的社會主義』の紹介で『新社会の夢と科学』という大阪労働問題研究所発行の自分のパンフレットであった」とし、このパンフレットは発売禁止になった、と述べている（住谷 1976）。

この講座の聴講者は約50名であり、聴講料が1円であったことを考えると、講師への謝礼にも窮するほどであったと想像され、自由大学の経営は困難になりつつあった。

こうした中、伊米ヶ崎小学校長であった渡辺泰亮は、1926年3月31日、新潟県視学になり、伊米ヶ崎をあとにした。土田杏村は、渡辺に宛てた手紙の中で、「郡視学、県視学、郡長などになつたところで何の値打ちがあるか。それよりは、日本の教育家として、堂々と出て行かうではないか」と、県視学などにはなるなと伝えていた（渡辺泰亮宛土田杏村の手紙、1923年11月9日、佐藤編 1981：110）。それにもかかわらず渡辺が、魚沼の地に育ててきた自由大学を棄て、県視学を選んだ理由はど

こにあったのか。

渡辺が自由大学から離れる理由を示す史料は発見されていないが、安達朋子が指摘するように、土田の書簡の中に渡辺の心情を垣間見ることが出来る（安達 1983：37-38）。

土田は、1923年4月の手紙で、近い将来、長岡辺りに全国の教育の模範となる小学校をつくりたいとの希望を語り、「その前提として君の学校（注、伊米ヶ崎小学校－引用者）をいゝものにしてくれ。僕は自由大学聯盟の方から歩みよるから」と書いている（渡辺泰亮宛土田杏村の手紙、1923年4月13日、佐藤編 1981：81-82）。次いで23年9月には、教育雑誌の出版について、「目黒ともう一度相談してくれたまへ」と、教育関係の出版が多い目黒書店と交渉するように促し、「編輯を君がやってくれて、印刷所は長岡がよい」とし、東京が関東大震災で壊滅状態なので「丁度都合がよい。今教育雑誌は屹度よく出る」と記している（渡辺泰亮宛土田杏村の手紙、1923年9月29日、佐藤編 1981：108-109）。そして23年11月には、自由大学の発展をもとに魚沼の地に教育研究所を設立することを提案し、「あの自由大学を発展して、魚沼に教育研究所を設けようぢやあないか。僕はちやんと腹案があるのだ。まあ君の学校でいゝ実験をいくつもやつて見てくれたまへ」と記していたが、24年4月になると、「君の就職のこと、出来るだけは君の学校で理想的なものをやりあげて全国へ模範を示して欲しいのだが」と書き、次の手紙では「君のところへ教育研究所を設ける位の基礎は出来さうに想ふ。さうなれば君が教職を抛り出しても、大丈夫の基礎が出来るつもりだが、反抗児今のところはまあ穏便にやつて居てくれ」と書き送っている（渡辺泰亮宛土田杏村の手紙、1923年11月9日、24年4月11日、24年4月21日、佐藤編 1981：110、124、125）。

土田は、小学校の設立や教育雑誌の出版、教育研究所の設立とさまざまな提案を渡辺にしていたことが知られる。その中で渡辺が心動いたのが教育研究所の設立であったようにうかがわれるが、生活のことを考えると恩給が出るようになるまでは教職をなげうつことに躊躇していたことが知られる。それは、土田と渡辺と中川杏果の3人で出版社を設立する計画の中にも見ることができる。土田は、24年5月の手紙の中で、「君の恩給年限のことは残念だが、若し書店をやるとすれば、あと三年では少しおそい様な気もする。併しそれは残念なことには相違ないが、書店さえ旨く行けば、その方で大丈夫埋め合せはつくと思ふ」と述べ、1年後の25年5月の手紙でも、中川が早く出版社を立ち上げたい意向を示していることに対して、「君が今教育界を退くのは損であらうと思ふ。殊に恩給や何かのこと少ない様でも、何かのためにはなるから。僕も其れを考へて居た。君も屹度其れを考へて居ることと思ふ。併し仕事はやり出せば屹度成功するから、後になつて見れば其れも大したことではなからうと思ふ」と述べて、渡辺が躊躇していることに理解を示しつつ、出版社を設立することも促していた。ただ出版社を設立するためには資金として5万円は必要だとし、「とにかく貧弱な資金では出来ない。最少五万の資金が得られる自信がついたら運動を起してくれたまへ。さもなければやはり時期を待つ方がよいと思ふ」と留保をつけ、「とにかく君の書信を待つ」と、渡辺の意向を待つことを記している（渡辺泰亮宛土田杏村の手紙、1924年5月26日、25年5月15日、佐藤編 1981：127、144-145）。

土田は、文明批評家として著述で生活を立ててきたため、苦勞して師範学校を出て校長にまでなった渡辺の気持ちをどこまで理解していたのか、疑問も残る。渡辺の方は、教育研究所にせよ、出版社にせよ、その実現性は、土田が考えるほど楽観的には考えていなかったように思われ、とくに出版社については、渡辺が1924年10月末頃に書いた土田宛の手紙の草稿には「時節柄出版屋がどんどん倒れて行くようだから其の原因をしきりと調査してをります。／米本の奴もとうとう頭を震るしらしいです。／アルスも近藤の入獄から家宅搜索まで受けたようですね。／これも減員減員と来てるらしいです」とある（佐藤編 1981：141）⁽⁵³⁾。

教職から離れる決断がつかない中、渡辺のもとに県視学の話が入ってきた。県視学になれば伊米ヶ

崎から離れることになり、自由大学を続けることは困難になる。地域ではさまざまな講演会・講習会の講師になり、自由大学関連を含め新聞に論稿を掲載したりして、地域に大きな影響をもつようになっていた渡辺にとって、県視学に出世することは県教育界で新たな地位を得るチャンスと考えたに違いない。渡辺は県視学の道を選んだ。佐藤泰治は、渡辺の「官民癒着体質、自己宣伝性、出世主義」を指摘しているが（佐藤 1979：13）、県視学の道を選んだことは、そうした渡辺の一側面を表していたといえる（54）。

渡辺泰亮が新潟へ去ったあと、八海自由大学では、第6回講座として、1926年12月26日から3日間、新潟師範学校教諭の柳田謙十郎を講師に「哲学概論（認識論）」の講義が伊米ヶ崎小学校において行われた。浦佐小学校教員の桑原亮太郎の筆記ノートによれば、テーマは「リッケルト 認識の対象概論」で、その章立ては、次のようになっている（桑原亮太郎「哲学概論（認識論） 柳田謙太郎述」、佐藤編 1981：220-235）。

「第一章 認識の対象

第二章 主観と客観

第三章 内在論の立場

第一節 原因としての超越的实在概念

二 補充としての超越的の概念

三 意見に対立するものとしての超越的概念

第四節 意志と一般と心的实在との区別

第四章 判断と其の対象

第一節 判断する事と表象する事

第三節 承認としての認識

第三節 判断必然性

第四節 SeinとSollen（事実と価値）

第五章 認識の対象としての不許不

」

この柳田の講義は、リッケルト著・中川得立訳『認識の対象』（岩波書店、1916年）の第1章「認識論の根本問題」、第2章「内在論の立場」、第3章「判断と及び其の対象」を要約的に説明したものと考えられる（55）。中川得立は「訳者序」の中で、リッケルトが主として論じた問題について、「対象の対象たる所以は認識の対象たる所に存せねばならぬ。認識の対象の認識たる本領は対象の捕捉にあらねばならない。認識を絶した対象は何等の規定をも受けることができぬ。捕捉を離れた認識は己れを忘れたる認識と言わねばならない。リッケルトが認識論の二途に於て論じたのは主としてこのことであった」と述べている（中川 1916：2-3）。

筆記ノートを読む限り、かなり難解な講義であったことが知られるが、講義を終了したあとの柳田の感想は、「知識階級以外の青年にして、一名の落伍者も無く、堅苦しい高等程度の哲学の講義を三日間に亘って受講した事は、実に驚異とする処であって、私は今回が始めてであった。／何卒今後共勉学を願ふ」というものであった（桑原亮太郎「哲学概論（認識論） 柳田謙太郎述」、佐藤編 1981：235）。

講義のあと柳田は、「講話」を行い、学生時代に大谷派の大阪大谷高等女学校で非常勤講師をしていたときに女学校の校長が「之れ迄に尤も感激した話」として柳田に伝えた「田口職工の美談」を紹介している（桑原亮太郎「哲学概論（認識論） 柳田謙太郎述」、佐藤編 1981：235-238）。

この柳田の講義が八海自由大学の最後の講座となった。

魚沼自由大学は、1925年12月の住谷悦治の講座から1年半後の27年6月25日・26日の2日間、今中次麿の「政治学」が堀之内小学校を会場に開かれた。25日は午後と夜間、26日は午前と午後に講

義を行った（『新潟時事新聞』1927年6月15日）。聴講者は約50名であった。

今中の政治学の講義は、「現代政治上の諸問題」というテーマで行われ、その要旨は、今中の長男である今中比呂志が保管していた魚沼自由大学での講義案草稿から知ることができる（前野 1983：23-32；前野 1983b：68-71）。

「『現代政治学上の諸問題』（要旨）

一、政治の時代去れるや？

”Passing of Politics”と云う声が頻に叫ばれるが、にれには肯定すべき方面と、肯定し得ない方面がある。かかる声の叫ばれるのは畢竟、政治の中心問題が、時勢と共に変化するからである。故に現代に於ける政治の問題は何か。而して政治は果して現代に如何なる使命を有するものであるかと云うことを説きつつ、併せて政治の概念を明にしたいと思う。

二、法治国家より経済国家へ――

自由主義の政治が既にその意義を失い、経済を重んずる政治の様相が、重要になって来た。ここで従来の国家の目的に関する学説を述べつつ、国家の正しい目的と国家の概念を明にして見たい。

三、立憲政治の現代に於ける意義如何？

既にその意義の失われつつあることを明にしつつ、来るべき国家の組織を予想して見たい。ここで併せて選挙問題と議会論と内閣論とに触れることが出来よう。

四、支那は如何にして統一せられるか？

朝野の此問題に対する見解は、全く混沌である。数年来、私の主張し来った国民党支援論の論拠を述べてみたい。併せて近世に於ける外交政策の基調の最も典型的な発達をなせる、列国の対支政策を説明して見たい。（以上）

今中の講義を聴講した下村正作⁽⁵⁶⁾は、『手帳』（昭和2年日記）に講義の要項をメモを残しているが、それによれば、第1日目の6月25日は、「第一講 政治の時代去れるか」「第二講 立憲政治の現代に於ける意義」までの講義で、第2日の26日は、「第三講 法治国家から経済国家へ」「第四講 支那問題」を講義しているのが知られる（山野 1979：66-68）。当初の今中の要項と比較すると「第二講」と「第三講」が入れ替えになっていることがわかる。下村の講義メモによると、「第二講 立憲政治の現代に於ける意義」では、「三権分立（立法・司法・行政）」や代議政治（「投票－選挙－代表－代議士－議会、議会－二院制度－衆議院－貴族院」）、「日本貴族院の成立」について解説したと思われ、当初の講義要項では、「一、現代社会悪の根源 ①余剰価値の奪取 ②オープンハイマア」「二、現代政治組織の欠陥 ①立法の問題＝普選法－政党論 その欠陥 ②行政の問題 ③司法の問題 ②③＝立法の問題に帰す」「三、職業代表制の問題」「四、社会化の問題 ①社会化の手段（行政的サンデカリズム） ②社会化せられたる産業の経営、産業議会」となっており（前野 1983b：68-71）、内容をかなり変えて講義していたことが知られる。

この今中の講座が魚沼自由大学の最後の講座となった。

魚沼・八海両自由大学は、1926年以降、次第に講座の継続が困難になっていた。

魚沼自由大学の中心的存在であった林広策は、当時、妻が病気で危篤、他界し、二児の育児と新潟師範学校専攻科への入学準備もあり（佐藤 1979：13）、今中次麿など講師との交渉も加藤金治に任せざるを得ない状況になっていた（林 1979：45）。そして、1927年4月には新潟師範専攻科に入学して堀之内から離れ、今中の講義も受講することはできなかった。また、林が新潟へ去ったあと、自由大学を任された理事の加藤金治もまた、28年には南蒲原郡三条町に異動になり、宮貞一も上京するなど、教員の人事異動により自由大学の運営者が次々と魚沼の地を離れていったことが大きな要因であった（林広策より聴取、1978年8月10日）。また、八海自由大学も、渡辺泰亮が新潟県視学にな

り新潟へ去ると、湯本英一らが事務局となり、柳田謙十郎の講座は開いたものの、それ以後は続かなかった。渡辺は、聴講料だけでは間に合わない自由大学の経費の不足分を「自分の山林を売」るなどして補ったといわれる（渡辺 1979：24）。その渡辺がいなくなったことは大きな打撃であった。しかも農村不況の深刻化にともなって1講座1円の聴講料を払って講義を聴く青年たちも少なくなっていた。

林広策は、新潟師範学校専攻科を修了し、1929年に原小学校、次いで30年に伊米ヶ崎小学校に教頭として赴任する。林によれば、渡辺泰亮が「わざわざ私をよびよせて、迎えにきて新潟で会って、私が伊米ヶ崎に行った」という（林 1979：48）。伊米ヶ崎小学校の校長は自由大学を聴講していた関久治であった。林は、自由大学の再興も念頭に置いてはいたが、学校での職員の日常会話、話題に自由大学の残影をみることはできなかった（佐藤 1979：13-14）。わずかに理事だった「湯本君が一人でしたね。カテゴリーなんていう言葉を使っていまして、ほかのものは見向きもしないんです」と、回想するように（林 1979：49）、とても自由大学を再興する状況にはなかったのである。

（第2表） 魚沼自由大学講座一覧

回	開講年月日	日数	講 師	講 座	聴講者数	会 場
1	1922. 8.25	3 日	土 田 杏 村	教育の基礎としての哲学	約180名	堀之内小学校 (魚沼夏季大学)
2	1923. 8. 6	3 日	タカクラ・テル	近代思潮論	約60名	堀之内小学校 (婦人のための 講演) (科外講演) (科外講演) (婦人のための 講演)
	1923. 8. 6	1 日	タカクラ・テル	恋愛と家庭		
	1923. 8. 7	1 日	沖 野 岩三郎	宿命されたる個人は如何にして自由を得べきか		
	1923. 8. 8	3 日	山 本 宣 治	性教育論	約30名	
	1923. 8. 9	1 日	中 山 晋 平	音楽実地指導		
	1923. 8.10	1 日	山 本 宣 治	性の問題		
3	1924. 8.18	3 日	タカクラ・テル 由 良 哲 次	文学論（ダンテ） 現代の哲学、特にナトル ブに就て	約100名	堀之内小学校
4	1925. 3.17	3 日	富 田 碎 花	土の文学－アイルランド 文学を中心として－		堀之内小学校
5	1925.12.12	5 日	住 谷 悦 治	社会思想史	約50名	堀之内小学校
6	1927. 6.25	2 日	今 中 次 麿	政治学	約50名	堀之内小学校

(第3表) 八海自由大学講座一覧

回	開講年月日	日数	講 師	講 座	聴講者数	会 場
1	1923.12.16	1 日	タカクラ・テル	文学概論		伊米ヶ崎小学校 (発会式講演)
2	1924. 2.16	1 日	出 隆	哲学史		伊米ヶ崎小学校
3	1924. 8. 1 1924. 8. 3	2 日 1 日	山 口 正太郎 野 口 雨 情	経済学 童心芸術、童謡教育	約150名 約200名	浦佐村普光寺
4	1925. 3.14	3 日	富 田 碎 花	土の文学－アイルランド 文学を中心として－	約80名	佐藤清之丞宅
5	1925. 8. 1	1 日	中 山 晋 平 佐 藤 千夜子	音楽講習会	約150名	六日町小学校
6	1926.12.26	3 日	柳 田 謙十郎	哲学概論（認識論）		伊米ヶ崎小学校

6. 川口自由大学の開講

魚沼地域でも自由大学の開講が困難になっていた時期、川口自由大学が開講した。

川口自由大学の開講は1926年10月であるが、その設立の動きはかなり前からであった。北魚沼郡川口村の西川口小学校長山田勝治からタカクラ・テルへは、八海自由大学の設立された1923年12月の前後には話がいていた。

23年12月16日の八海自由大学発会式から別所温泉に戻ったタカクラは、18日に渡辺泰亮に礼状を認めているが、その中で「山田君も川口に前から同じ計画をして居りまして約百人近く会員をつくりかけてゐます。将来合して一つとなり『魚沼自由大学』を完くしたいものです」と記している（渡辺泰亮宛高倉輝の手紙、1923年12月18日、佐藤編 1981：114）。次いで24年2月の手紙では、「丁度今朝中条君から手紙が来たところですが、夏期大学の方も出来るなら一緒にして秋から春へかけての連続式にしてそして、八海、魚沼、河口を一緒にしてどこか河口あたりの比較的便利な場所へ永久の会場地を極めてそして魚沼自由大学といふ名にして（中略）一つ堅実にやつた方がよくは有りませんか」（渡辺泰亮宛高倉輝の手紙、[1924年2月]12日、佐藤編 1981：119）と自由大学の合併を勧めている。

前便は、タカクラが、渡辺は川口に自由大学の計画があることを知らないことを前提にして書いていることが推測できるが、後便は、川口を既定のものとし、川口が交通の便の良い場所であったにせよ、魚沼、八海をさしおいて川口に合併させる案と受け取られ、渡辺にとっては到底受け入れられる話ではなかったと思われる。タカクラが手紙に記している川口の話は、どの程度信憑性のある話であったのか。「約百人近く会員をつくりかけてゐる」としているが、魚沼夏季大学の第1回講座を受講した川口村からの参加者は8名とごく少数であり、そのまま真に受けることはできない。

川口に自由大学の計画があったとしても、それは山田が腹案として持っていた程度のことであったと思われる。タカクラは、それを学校に出入りしていた中条から聞いていたのであろう。自由大学が実際に開講されるまで3年が経過しているが、これはおそらく、中条や自由大学を受講していた西川口小学校教員の岡村健次から情報を得ていて、狭い地域に3つ目の自由大学を開講することは、同一

時期に講座が集中した場合、講師を確保することや聴講者を集めることが困難と判断していたものとみられる。ところが、1926年4月に渡辺泰亮が県視学となり伊米ヶ崎から離れたことから、自由大学の継続が危ぶまれるようになり、新潟の自由大学を担う存在として山田への期待がタカクラらに高まったものと考えられる（佐藤 1980b：59）。こうして山田は、タカクラや中条の助言もあってのことだと思われるが、川口自由大学の開講に動いていく。

山田勝治は、1893年生まれで、渡辺泰亮より2歳年下となる。川口村西川口の旧家の出身であったが、先代より斜陽をかこち、衆議院選挙人名簿にも掲載されなくなった。1909年には2か月間母校の西川口小学校で代用教員を体験し、教職の道に進むことを決意し、高田師範学校を受験する。高田師範は全寮制で授業料が不要で、食費も不要であったことが受験の大きな理由であったが、教科書代にも苦勞して、やっとの卒業であったという（佐藤 1981：30）。

山田が西川口小学校に校長となって赴任したのは1920年のことで、27年3月に依願退職するまで7年間、ここで地味ながらも学究的な生活を送ったといわれる。同じ西川口出身で、高田師範を卒業した1919年、すぐ母校の西川口小学校の教員となった岡村健次は、翌年春に校長として赴任してきた山田の斬新な教育理論と読書量に圧倒されたという。

山田は、土田杏村の『文化』をはじめ『改造』など進歩的な雑誌の読者であり、机上には長岡の目黒書店より直接取り寄せた『資本論』全5巻の原書が置かれ、医師の岡村晋の手ほどきでドイツ語に挑戦していた。また、校内ではいち早くクレヨンによる自由画教育の実践を試みており、これは県内でも早い本格的試行とされる。同校教員の菊地泰吉は「児童画の研究」を『越佐教育』（1925年2月号から数回にわたって掲載）に発表している。山田は、山本鼎に関心を寄せ、農民美術の理解者であったが、地域住民に農民美術を広めるなどの交流はなかった。この点は同じように自由画教育を実践し、農民美術を村の青年たちにも指導していた渡辺泰亮とは対照的であり、二人の間には親密な交流はなかったといわれる（佐藤 1980b：60-61）

川口自由大学の開講にあたっては、川口村有力者、古田島和太郎村長や医師の岡村晋が支援し、また、北越新報記者の中林一郎は川口出身で、山田とも懇意にしていたことから、編集長の西方稲吉も支援したという。古田島の家は村内一の、北魚沼郡内でも有数の大地主で、岡村も西川口一の地主で、有力村議であり、文教方面への発言力も大きかったといわれる。古田島が自由大学の代表者となり（『北越新報』1926年10月19日）、自由大学の運営は、山田・古田島・岡村らトップできめられ、岡村健次や大淵弘司ら教員は道路案内の設置に動員されたが、西川口小学校の教員たちには相談はなかったという（佐藤 1980b：61-62）。

北越新報は、聴講申込者は附近の小学校教員をはじめ小千谷、長岡方面からも多くの申込者がある模様で、「中越に於ける教養ある青年を大部分網羅せる観ある」と伝えたとうえで、自由大学で人文を学ぶ必要性について、次のような古田島の談話を載せている（『北越新報』1926年10月19日）。

「魚沼の地は由来あまり文化に恵まれなかつたが上越鉄道の開通により形勢は一転し中央との交通は直接に我国最高の文化と直面する事となつたので吾魚沼に居住する者は余程の準備と覚悟がなくてはならぬ訳である、夙に当川口は十日町支線との交叉点に位して将来は人文の中心たるべき運命にあれば此機会を有意義に導かん為め自由大学を計画したのであるが講師として高倉氏を煩はす事を得たのは非常に幸ひである」

川口自由大学は、このように地元の有力者の支援、北越新報社の後援を得て、第1回講座が開かれた。1926年10月24日、午前10時より西川口小学校を会場に、タカクラ・テルが「日本文化の過去現在及び未来」と題して講義をした。『北越新報』（1926年10月24日）は、川口自由大学の開講を次のように報じている（佐藤 1981：197）。

「いよいよ今二十四日午前十時から開講される川口自由大学は申込を締切つて後もなほ聴講を希望

する者ありこれ等の人々も皆収容しつつあるが何しろ第一回の事として充分宣伝の行届かぬ向きもあれば当日突然の来場にも聴講を許す事とした若し晴天ならば日曜の事でもあり鮎漁見物旁たの聴講者も随分多かるべくそれ等の準備も遺憾なき様整えてある由で折角の催しであれば成るべく多数の来聴者を希望してゐる」

そして前日、タカクラが来着したときの様子を次のように伝えている。

「講師高倉輝氏は昨二十三日午後三時卅八分長岡着の信越線で別所温泉から来越、川口から出迎への代表者及び長岡病院の川瀬医学士本社員等に迎へられ四時五分発の上越線で川口に向かつたが川口駅にも会員有志の出迎へ者あり高倉氏はこの理解ある歓迎と友情とに感激してゐた。」

聴講料は1円で、60から70名の聴講者で、林広策と中条登志雄も招かれて聴講している。林によれば、八木葵兎二、桑原仁右衛門など魚沼自由大学にもよく来ていた人たちも聴講していたという(林広策より聴取、1978年8月10日)。

タカクラの講義内容は不明であるが、講義のあとは鮎梁見物も計画されていた。鮎梁見物は自由大学の催しとしては異色であった。

第2回は、1年後の1927年10月9日に、西川口小学校を会場に午前10時から午後3時までタカクラ・テルが「人類将来の文化(殊に宗教の位置)」を講義した。会費は1円で、県下中等学校以上の学生は50銭と半額にしたが、聴講者は約70名で前回とほぼ同じ人数であった(57)。

講義に先立ち、北越新報の記者は、「作家として思想家として」のタカクラを紹介する記事を掲載している。記事では、タカクラを「前京都大学教授」で文学、思想問題を講じていたと紹介しているが、これは誤りで、囑託である。タカクラは、「教授の職をなげうち」創作に没頭するにいたったが、その「創作道への精進は実に涙ぐましい真剣さであった」とし、『女人焚殺』以後10数編の作品は「いづれも片々たる文壇人を感服せしめるに足るもの」で、ことに『蒼空』の如きは「何人の追従をも許さぬ氏独特のヒューマニティーから湧き出たもので我文学史上に遺さるべき名篇である」と評価している。また、『我等如何に生きべきか』及び『生命律とは何ぞや』は、「実に氏の生活の深さと学問の博^{つつま}さを窺ふに足りるものだ」と述べ、「氏の思想は、哲学的な透徹せる裏付けがあると共に^{つつま}度しく深い宗教的な根底の上に立つてゐる」と指摘している。そのうえで今回の「人類将来の文化(殊に宗教の位置)」と題する講義について、信州別所温泉に居住して「宗教的生活から滲み出した思想に氏の得意な学問的組織を与へた」もので、その「内容となるものは仏教精神ださうである」とし、「仏教には親鸞、法然、以来最も深い因縁を持つ越後ではあるが今は寧ろ仏教に毒されてゐる趣きがないでもない。氏の新しき見方なる仏教精神は必ずや此の死したる宗教に火を点ずるものがあらうことを想像し得る」と、講義への期待を述べている(『北越新報』1927年9月25日)。北越新報は、このような講師のタカクラを紹介する記事とともに連日のように講座開講の広告を掲載して後援した。

昼食は「聴講者のため会場に食パン、餡パン及鮎等を用意」し、講義のあとは、別に会費1円で、「会員相互の懇親を深め」るため、鮎狩りが計画されていた(『北越新報』1927年9月22日、佐藤編1981:203)。川口自由大学の特色は、講義だけでなく、鮎狩りという観光目的も兼ねていたことで、村長が先頭に立っていたことは、自由大学による村おこしというねらいもあったといえる。

申込場所は川口村役場内川口自由大学事務所となっていた(『北越新報』1927年9月10日、佐藤編1981:203)。これは、西川口小学校長の山田勝治が27年3月で依願退職したため、村長の古田島和太郎と医師の岡村晋があとを引き受けて自由大学の運営者となったからである。山田が退職したのは、教育界に嫌気がさして東京の第一書房からの誘いを受けたからだといわれている(58)。かれを教育界から去らせたものは何だったのか、その理由は明かではないが、山田がいなくなったことにより、自由大学を継続することは困難になった。結局、川口自由大学は、この2回の講座の開講をもって消滅した。

(第4表) 川口自由大学講座一覧

回	開講年月日	日数	講 師	講 座	聴講者数	会 場
1	1926.10.24	1 日	タカクラ・テル	日本文化の過去現在及び未来	約60名	西川口小学校
2	1927.10. 9	1 日	タカクラ・テル	人類将来の文化（殊に宗教の位置）	約70名	西川口小学校

おわりに

ここでは、1920年代に新潟県魚沼地域で展開された魚沼、八海、川口の3自由大学の学習運動がどのようなものであったのかを跡づけてきた。

魚沼自由大学は、北魚沼郡堀之内村の商工業に従事する青年たちの団体である響俱樂部が、上越線堀之内駅開通の記念事業として1922年8月、魚沼夏季大学を企画し、在野の哲学者土田杏村を招いたことに始まる。夏季大学に協力した小学校長の渡辺泰亮は、新潟師範学校の2級先輩で親しかった土田に講師を依頼したが、聴講者を集めるために郡長、郡視学をはじめ魚沼3郡周辺の小学校長に招待状や案内を送り、村教育会から補助金を得るなど、自由大学の趣旨とはかけ離れたかたちで始まったことが知られる。翌23年、土田は、夏季大学の名称を自由大学に変えることを提案し、タカクラ・テルと山本宣治を紹介する文章の中でわずかながら自由大学の理念に触れるようになる。山宣と沖野岩三郎を講師として招いたことが県による講師人選にあたっての「注意書」通達という事態を生じたが、これには土田が県の姿勢に反論を加えた。しかし、第2回講座の聴講者減から渡辺は魚沼自由大学の運営から去り、渡辺の地元である伊米ヶ崎村に新たに八海自由大学を設立する。第3回講座を前に、響俱樂部は八海自由大学と一緒に開講案内を作成したり、土田も「自由大学へ」という文章を新聞に掲載して、自由大学の理念を平易に説き、自由大学への参加を広く呼びかけた。しかし、予想ほど聴講者が集まらなかったことから、自由大学の運営をめぐる内紛が起こり、これまで運営の中心であった中林昌平・長尾喜三郎ら響俱樂部の実業メンバーは運営から去り、林広策ら教員を中心としたメンバーが「魚沼自由大学会」を組織して運営に当たることになった。短期間ながら、講座のない時期に研究会や読書会を開いたりして、自由大学本来のあり方を追究していく状況が見られるようになった。第3回講座では、講義の合間にレコードコンサートや画家宮芳平の作品展示会が催されている。これは「娯楽的要素の導入」（佐藤 1977：122）として低い評価がなされてきたが、絵画の小展覧会は、画家の美術作品に直接触れさせて地方民衆の芸術教育に資するという土田杏村の「巡回美術展覧会」の構想につながる催しであったことに注目する必要がある。なお、魚沼自由大学は、1923年から26年まで堀之内村から毎年100円の補助金を受けており、自由大学への干渉はなかったものの、「経費の全部を会員の持ち寄り少額の会費によつて支弁するのを原則とする」（猪坂 1925a：18）自由大学の趣旨から逸脱していた事実もおさえておく必要がある。

1923年12月に南魚沼郡伊米ヶ崎村に設立された八海自由大学では、第3回講座で野口雨情が「童心芸術、童謡教育」の講演をし、第4回講座で中山晋平・佐藤千夜子による「音楽講習会」が行われている。土田杏村は、魚沼地域は「信州ほどに文化が開けず、やはりバツとしたのがあたる」（渡辺泰亮宛土田杏村の手紙、1924年3月10日、佐藤編 1981：122）と書いていたように、信州のように文化が開けていないことから哲学や文学の講座では聴講者が集まらず、音楽や童謡のような講座の方

が聴講者が集まるという先進・後進という視点から民衆の意識を見ていた。しかし、魚沼地域の教員の中には、童謡や綴り方、自由画など大正自由教育の実践を行っていた教員も少なくなった。桑原亮太郎のように童話教育論を地域の新聞に連載し、俳句の創作や学校劇を実践していた教員もいた。また、郡内の各町村には住民による俳句の会が作られ、「創作」の風土が南魚沼の地域に地下水脈のように流れていた。このような背景の中で雨情や晋平の講座がもたれたことを見ておく必要があり、童謡、童謡教育の講座は八海自由大学を特色づけるものとなったのである。

北魚沼郡川口村に設立された川口自由大学は、魚沼・八海両自由大学が衰退する中で西川口小学校長の山田勝治が、タクラ・テルや中条登志雄の助言を得ながら、また、古田島和太郎村長や医師の岡村晋、北越新報の編集長西方稲吉らの支援を受けて1926年10月に開講したものである。しかし、自由大学の中心だった山田が、教育界に絶望し、27年3月で退職し上京したため、27年10月に第2回講座を開講したものの、この2回の講座で消滅することになったが、村当局が運営に関わり、鮎狩りという観光目的も兼ねていたのが異色であった。

新潟県では、3つの自由大学で合わせて、14回の講座が開かれ、21の講義・科外講演が行われた。学問系統別でみると、人文科学系が16（76%）、社会科学系が3（14%）、自然科学系が2（10%）と、圧倒的に文学・哲学などの人文科学系の講義・講演が多かったことが知られる。上田自由大学の34講座と比較すると、人文科学系が25（73%）、社会科学系が7（21%）、自然科学系が2（6%）となっており、上田も哲学・文学・宗教学など人文科学系の講義が多かったが、社会科学系の政治学・経済学・社会学などの講座も2割程度占めているのが、新潟とは異なっているのがわかる。

聴講者は、新潟の場合は、圧倒的に教員の比率が高く、ついで農業、商工業の青年たちが多かったことが知られる。また、魚沼自由大学の第2回講座では婦人のための講演が設けられ、これは、他の自由大学にはない独自の企画であり、女性教員や主婦など女性の聴講者も60名参加したことが知られる。

このような特徴をもつ新潟県の自由大学運動であったが、1926年頃から農村不況の深刻化にともなって1講座1円の聴講料を払って講義を聴く青年たちも少なくなっていた。また、魚沼自由大学の中心的存在であった林広策が、1927年4月に新潟師範専攻科に入学して新潟へ去ったあと、自由大学を任された理事の加藤金治もまた、28年には南蒲原郡三条町に異動になり、宮貞一も上京するなど、教員の人事異動により自由大学の運営者が次々と魚沼の地を離れていったこと、八海自由大学も、渡辺泰亮が新潟県視学になり新潟へ去ると、湯本英一らが事務局となり、柳田謙十郎の講座は開いたものの、それ以後は続かなかった。川口自由大学もその中心であった山田勝治が退職して上京したため、2回の講座で消滅することになった。

新潟の場合は、運営の中心メンバーとなっていた教員が他の地域へ転出するとともに消滅することになった。しかし、その5年間にわたる学習運動の軌跡は、地域の青年たちと教員が新しく知的活力をみせはじめ、地域での教育・文化活動の推進者として立ちあらわれたことを示している。

注記

- (1) 自由大学運動の研究は1960年代後半から活発化したが、50年間にわたる研究史については、拙稿「自由大学運動研究の軌跡」（2022年、<http://www7b.biglobe.ne.jp/~takakuraterukenkyu/jiyu-daigakukenkyunokiseki.pdf>）または拙著『大正デモクラシーと地域民衆の自己教育運動－自由大学運動の研究－』（自由大学研究・資料室、2023年）を参照。
- (2) 響倶楽部の会則は、山野晴雄解説「魚沼自由大学関係資料」（『自由大学研究』第6号、1979年）、

佐藤泰治編『小出町歴史資料集』第1集（佐藤編 1981：278）に掲載されている。

響倶楽部の主要メンバーのうち、教員の林広策を除いて、中林昌平は堀之内運送店支配人、長尾喜三郎は食料品卸の金子屋商店、小川賢太郎は呉服店、下村正作は酒造業を営み、中条登志雄は丸末書店の番頭と、その多くが実業に就いていた。

- (3) 宮柊二については、『宮柊二集』全10巻別巻1（岩波書店、1989-1991年）があり、評伝には小高賢『宮柊二とその時代』（五柳書院、1998年）、磯部定治『ふるさとを愛した歌人 宮柊二』（新潟日報事業社、2001年）などがある。
- (4) 渡辺泰亮は1891年6月に生まれている。父徳太郎は97年10月に26歳の若さで死去している。渡辺家は、上田銀山以来連綿と続く由緒ある家柄との家伝があり、祖父儀右衛門は、1889年の町村制施行のとき、初代の伊米ヶ崎村長を務めている。経済的には衰退しつつも地方の名望家の出身であった。父の早世により、まだ18歳にもなっていない泰亮は、1909年に渡辺幸と結婚している。土地の人の記憶では、短期間ながら、母校伊米ヶ崎小学校の代用教員をし、尋常3年の担任をしていたともいわれる（佐藤 1980a：60）。
- (5) 森山茂樹は、「学校時代から2人は親交が厚く卒業後も交信が続いていた」と記し（森山 1971：152）、上木敏郎も「渡辺は新潟師範時代の二級後輩に当たるが、二人はすでにその頃から親交があり、卒業後もそれがつづいていた」と記している（上木 1971：63）。しかし、佐藤泰治は、渡辺家に保存されている土田杏村の書簡は1922年8月3日付以降であり、新潟師範卒業後も交信していた形跡がないことから、交信が復活するのは、1921年8月6日から8日まで新潟の思想問題研究会で講演し、このとき師範学校時代の同級生らのはり糸菓子店で歓迎会を開いており（上木 1968：86）、この講演会にもし渡辺が出席していたとすれば、このときであろうと推測している（佐藤 1980a：）。
- (6) 魚沼夏季大学開講の記事は、『越後タイムス』『新潟毎日新聞』『魚沼新報』『十日町新聞』、それに後援をした『北越新報』に掲載された。また、「参加申込書」が郵送され、響倶楽部会員の分担は106枚で、最高が小川賢太郎の15枚で、平均5.9枚であったのに対し、学校発送分は939枚分で、おそらく渡辺泰亮の人脈によったものと思われ、中でも渡辺に100枚、中魚沼郡の社会主事・桐生能蔵に100枚発送されているのが目立つ（「申込書発送先」響倶楽部『夏季大学二関スル記録』1922年、佐藤編 1981：269-271）。この申込書発送先からも教員に依存したことが知られる。また、招待状は魚沼三郡の郡長、郡視学、社会主事、堀之内村長、川口村長、堀之内教育会長、国会議員関矢孫一らに送られており、上田や伊那の自由大学のように地域民衆の教育機関であるという趣意書を発表して設立されたものではないことから、地域の有力者をも招待しており、響倶楽部のメンバーには「反官」意識はなかったといえる。
- (7) 土田杏村は、魚沼夏季大学に出講する前、新潟県三島郡与板町の教育会の招きで8月22日から24日まで講演をし、その日、暴風雨の中を堀之内に向かっていく。のちに土田は「づぶぬれになりながら会員の諸君が停車場に迎へに出られた情景今に忘れず」と書いている（大正12年年始状「紫野より」、上木 1969：92、所引）。長島伸一は、この魚沼夏季大学での講義は1日だけだったとし、「杏村の体調は思わしくなかったために、実際には3日間ではなく1日だけの開講に変更されたようである」と記している（長島 2022：134）。しかし、土田は、新潟への講演旅行から帰ったあと、8月「二十日夜又々出発、今度は北陸線で越後へ這入り、二十七日まで数個所で講演しました。其の中の殆ど大部分が割合に少数な、本当に分つた人達だけの永続的団体であり、今後も一緒に手を取って進むことになつて居るので此の上も無く愉快でした。（中略）二十八日の朝帰宅しました」（土田 1922：54）とあり、8月27日まで講義をし、28日の朝帰宅していることがわかる。したがって、長島の判断は誤りである。

- (8) 女性の参加者のうち教員を除いた12名のほとんどは堀之内の主婦たちで、野澤キヨノは「婦人会でまとまって行ったようだ」と語り、中林昌平によれば「響倶楽部から婦人会に呼び掛けた」ことによるという（安達 1983：21）。また、西蒲原郡黒崎小学校教員の安宅秀恵は、夏季大学の受講後に開催された響倶楽部の集まりに参加し、土田杏村に面談ができ、たくさんの質問をすることができたことに感謝する手紙を書き送っている。その中で、新潟市の文化団体で関係しているものに思想問題研究会、アカシヤ詩社、真宗求道会などを挙げて、「之等の会合は唯名義のみに堕して行きつゝあるのもある」と指摘して、「響倶楽部の堅実なる発展と成長」を期待している（響倶楽部同人諸兄宛安宅秀恵の手紙、1922年8月31日、佐藤編 1981：79）。
- (9) 八海夏季大学については、森山茂樹が、「大正11年8月に、両村（注、堀之内村と伊米ヶ崎村のこと－引用者）には『夏期大学』が開かれ、土田杏村、高倉輝等が講師として来村していた」とし（森山 1971：152）、佐藤泰治も、「魚沼の8月の会とは夏季大学であったことから、八海でも同様と推定してよいのではあるまいか」とする（佐藤 1980a：63）。しかし、八海夏季大学については、その存在は疑わしい。なぜなら、渡辺泰亮は魚沼夏季大学については講師の土田杏村を紹介する文章を新聞に書いているにもかかわらず、八海のそれにはふれておらず、新聞も魚沼夏季大学の情報は掲載していながら、八海については同じ渡辺が関わっていながらその記事がない。土田は日程的に八海夏季大学に出講したとは考えられず（すでに触れたように土田は、22年8月24日まで与板町で講演し、堀之内に向かい、25日から27日まで魚沼夏季大学で講義をし、28日の朝に京都の自宅に帰っている）、タカクラも郷里の高知県七郷村で「蒼空」の執筆に苦闘しており、新潟へ出講できる状況にはなかった（山野 2008：143-144）。したがって、安達朋子が「伊米ヶ崎ではすでに前年（注、1922年－引用者）の八月、杏村と高倉が夏期大学を行っていた」と記しているのも（安達 1983：27）、また、『小出町史』下巻が「渡辺泰亮」の項で「（大正）十一年に八海夏期大学を開始し」と記載していることも（小出町教育委員会編 1998：1250）、八海夏季大学が開催されていたとする新たな史料が出てこない限り、それが開催されたと判断することはできないと考える。
- (10) タカクラ・テルの妻ツウは、久し振りに山本宣治に会えるらしいとの知らせに接して、山宣の妻千代に宛てて、「もう家を出ましてから半年もいつしか経ちました。久し振りで皆様に御目もじ致し度いと思ひます。／偕て私の方、この七月の中頃に新潟の講演に出掛けます。丁度土田様より宣治兄様に何かお話のお便りもございましたと思ひますが、昨日付の魚沼の夏期大学からの報知にて宣治兄様が講演に出席遊ばされるお話が書いてありましたが決定に相成りましたか。幸に同じ講演場所にて御目もじ出来たら非常に都合よく、こちらも是非出掛けて頂くやう申して居りますので取りあへずお伺ひ申しました」と述べたあと、「丁度夏休みも近づきましたので、その節英ちゃん浩ちゃん一緒に連れて来て頂きまして講演旅行が済むまで千ヶ滝で居られましたら如何でございますか」と、ぜひ魚沼夏季大学に出講するようにすすめている（山本千代宛高倉通の手紙、1923年6月23日、佐々木・小田切編 1979：165）。山宣が自由大学運動に参加するにいたる人的関係は、土田杏村とタカクラ・テルの2つの線があった。このとき山宣一家は杳掛へは来なかったもので、ツウが山宣と再会するのは1929年3月まで待たなければならなかった。
- (11) 魚沼自由大学の実質的発足をいつにすべきかについては、佐藤泰治が主張する1922年の魚沼夏季大学を第1回とするのが正しい（佐藤 1980a：66-67）。私は魚沼自由大学に改称した1923年を第1回としたが（山野 1974：18）、誤りであり、ここで訂正しておきたい。
- (12) 桑原福治のタカクラ・テルの回想は「八海自由大学」という小見出しの中で述べられているが、タカクラは八海自由大学では発会式で講演しているが、この回想は魚沼自由大学のものと考えられ、記憶違いだと思われる。

なお、宮柊二は、「後になって、『ある難破した船の船員二人が、かろうじて小さい島のようなものを発見して、そこに這いあがった。二人は博打のさいころを取り出して勝負に夢中になった。その小さな島は、実は鯨の頭の上だった』というような寓話をはなされたと言われたが、その講師はどなただったろう。講演の内容も筋も覚えていないが、この部分だけは、子供心に不思議に切りとったように印象づけられた」と回想している（宮 1979）。この2人の船員が鯨の上で博打を打っていたという話は、フランスの作家、アナトール・フランスの『エピクロスの園』（1895年）の中にある小話であるが、このような寓話を話したとすれば、タカクラ・テルのこのときの講義であろう。タカクラの『我等いかに生く可きか』（アルス、1923年）では、「ドストイェフスキイ、チエエホフ、或はセザンヌ、ゴッホ、又はアナトール・フランスと言ふやうな人達の作品には色々な意味で心を牽かれるけれども、併しそれとても決して何も随喜渴仰するほどのことは無い」と、アナトール・フランスのことに触れているにすぎないが（高倉 1923：202）、講義の中ではそのような小話を紹介したと思われる。

- (13) 山本宣治の生涯については、佐々木敏二『山本宣治』上・下巻（汐文社、1974年・76年）を参照のこと。
- (14) 岡村健次によれば、主催者側から講義の始まる前に、「女性の方は前の席の方へ、男性はその後ろに座ってください」と注意があった。講義の途中で女性が赤面しているのを男性に見られないようにするためであったという（安達 1983：24）。しかし、写真で見る限り、中央から左側の席はほとんどがシャツを着た男性だけが写っており、右側の前列に着物姿の女性が何人か見られる程度で、必ずしも女性が前の方の席に座っていないことが知られる。
- (15) 山本宣治は、アンケートの調査票の返送の状況について、「記入票は約二十通既に戻って居ます。くるなら大抵早くにドカドカと戻って来るのですが、其形勢では三割五分がやっとかもしれません」と、回収率が低いことを渡辺泰亮に書き送っている（渡辺泰亮宛山本宣治の手紙、1923年8月23日、佐藤編 1981：103）。

山本宣治は、日本における常態の性生活の現状を欧米の性生活と比較することによって、欧米の性科学を移入することの妥当性と、移入する際の適用可能な範囲を見極めようとした。その目的のもとに、同志社大学の「人生生物学」講義の受講者だけでなく、産児調節運動における講演会の聴講者、自由大学や労働学校の聴講者を対象として、安田徳太郎とともに、性生活調査を実施した（柴本 2005：67-68；柴本 2008：39-42）。魚沼自由大学では22通（配布数90通中）、24年1月の信南自由大学では17通（配布数60通中）が回収され、1924年2月26日における回収数369通、最終的には1146通をもとに発表された論文が「若い男の性生活－現代の日本人に就いて調べた統計の研究－」（『生理学研究』第3号～第10号、1924年4月～25年2月、佐々木敏二・小田切明徳編『山本宣治全集』第1巻、1979年、汐文社、に収録）である。

- (16) 中川杏果は、山本宣治を長岡駅に出迎えたときのことを、次のように回想している（中川 1968：25）。

「山本氏の行動は特に警察が重視し、長岡駅へ僕が山本氏を出迎えているので巡査二名が僕を取りまいてはなれない。

山本氏は夏だというのに黒サージの冬服を着ている。巡査は大学の先生だというから立派の服装で高まんぶつた人と想像しているから此のヘンテコ男が山本氏だとは思っていないので「中川さん、山本宣治と云う人が来たら教えて下さい…」と云つて立去つた。之はうまく行つたと僕は喜び上越線に山本氏と一緒に乗り替えて伊米ヶ崎へ行つた。」

なお、引用文中の「伊米ヶ崎」は「堀之内」の誤りである。

- (17) 中山晋平は、東京音楽学校を卒業後、東京市浅草区千束小学校の教員をしていた1914年、相馬

御風の推薦で島村抱月が依頼した『復活』の劇中歌「カチューシャの唄」を作曲、国内で大流行すると、その後も抱月は、芸術座が上演する劇の劇中歌を次ぎ次ぎに晋平に依頼した。1920年に野口雨情の依頼で「船頭小唄」を作曲、22年には「砂山」他を『童謡小曲第一集』として出版してからは、直接民衆に歌われることを目的にした歌の創作に積極的に関わっていく。そして晋平と雨情のコンビによる「あの町この町」「證城寺の狸囃」「シャボン玉」「雨降りお月さん」「兎のダンス」などの作品を発表し続けた。和田登によれば、晋平が雨情と息が合ったのは、「両者ともに日本の土壌から生まれた、わらべ唄や民謡の伝統を大事にする立ち場をつらぬいていたからである」と指摘している（和田 2010：109）。晋平は、雨情とともに童謡普及のために全国をまわり、地方で童謡教育を熱心に推し進める教員らを巻き込み、童謡運動は大きくひろがり、1925年にはピークを迎えた。また、1923年の「須坂小唄」に始まる新民謡が晋平の手によって日本の歌謡の世界に新しい領域を開拓すると、新民謡と童謡普及の旅には佐藤千夜子や藤間静枝が欠かせない存在となる。中山晋平の魚沼自由大学への出講は、中川杏果の依頼によるものであったが、晋平にとっては、当時の童謡普及運動の一環であったといえる。

なお、中山晋平の生涯については、斉藤武雄・他、町田等監修『定本中山晋平－唄とロマンに生きた全生涯－』（郷土出版社、1987年）、菊池清磨『中山晋平伝－近代日本流行歌の父－』（郷土出版社、2007年）、和田登『唄の旅人 中山晋平』（岩波書店、2010年）などを参照のこと。

- (18) 沖野岩三郎は、1876年に和歌山県日高郡寒川村で母ミヤの子として生まれ、母が幡川家に嫁いだため、祖父善兵衛に養育される。96年和歌山師範学校を卒業し小学校教員となる。1901年にキリスト教と出会い、翌年、ハル夫人とともに受洗、和歌山教会には杉山元治郎、加藤一夫、山野虎市らがいた。沖野は、日露戦争に非戦論を唱え、牧師になる決意を固め、上京して明治学院に進学する。明治学院を卒業し、1907年6月、和歌山の新宮教会に赴任する。10年6月、大逆事件の捜査が新宮に波及し、大石誠之助、峯尾節堂らが逮捕され、沖野も家宅搜索を受け、取り調べを受けたが、釈放されている。17年6月、新宮教会を辞任して上京し、統一基督教会副牧師となる。12月、『宿命』が大阪朝日新聞懸賞小説の二等に当選、翌年10月、『煉瓦の雨』を出版する。20年7月、軽井沢に惜秋山荘を建て、8月、統一基督教会牧師を辞任、文筆活動中心の生活となる。22年5月から3か月にわたって朝鮮、満州を旅行する。その1年後、魚沼自由大学に呼ばれることになる。

沖野は、すでにこの世に生を受けた時点で、「私生児」という生い立ちから宿命的に問題を担わされて試練にさらされた体験の上に、さらに大逆事件という宿命論の問題とも格闘しなければならなかった。大逆事件は、沖野自身も危うく逮捕は免れ、極刑に処せられるのを避けられたものの、大石誠之助ら幾人もの知友たちを奪われた。この「過酷な体験を通じて沖野が大石誠之助から受けとめたものが宿命論であり、個人の意志ではいかんともすることができ難い宿命が存在するのを否応なしに認識させられたが、一方でその宿命をいかに乗り越えるか、ということも同等の重みをもつ課題となって浮かび上がった」ていたのである（野口 1989：160）。沖野が自由大学で講演した「宿命されたる個人は如何にして自由を得べきか」は、そうした自己の体験をもとにそれをどう乗り越えようとしているのかを語ったものと思われる。

沖野の宿命論や文学、童話教育論については、岩居保久志の「沖野岩三郎論」（『日本近代文学と明治学院』一粒会、1988年、所収）を、沖野の生涯については、野口存彌『沖野岩三郎』（踏青社、1989年）を参照のこと。

- (19) 中川杏果は、1890年に佐渡新穂村に生まれ、新穂小学校では土田杏村と同級であった。15歳のときから丁稚奉公に出て、21歳のときに北海道小樽で『小樽毎夕新聞』の記者となり（中川 1967b；中川 1986：73、77）、『小樽日報』にいた石川啄木、野口雨情らと知己になった。啄木とは、

啄木が小樽から上京するとき雨情に頼まれて餞別を渡し、東京でも二、三度会ったという。1907年頃に与謝野晶子の新詩社に入門し、毎月短歌の添削をしてもらい、時々本部を訪ねて直接指導も受けたといい、新聞記者の生活の続けながら、若山牧水主宰の短歌誌『創作』、菊池知勇主宰の短歌誌『ぬはり』に短歌を投稿するなど、短歌を作り続けた。

中川は、他にも、宮城道雄、吉井勇、白鳥省吾、北原白秋、相馬御風、尾崎紅葉ら文化人と交流していた。野口雨情・中山晋平の全国巡回講演のうち新潟・山形・長野の3県は中川が「カバン持ち」をした。1923年9月1日の関東大震災のときは、野口雨情・中山晋平・佐藤千夜子の一行は、佐渡教育会の招きで、中川の母校である佐渡の新穂小学校で童謡と音楽の講演会を開いていた。「雨情が民謡や童謡について講話し、晋平が自作の歌を披露するという組合わせが会の構成となっていた」（中山 1987：76）。3日になって情報収集をしていた中川から震災の詳細を聞き、一行と中川は4日朝、東京に向かっている。このことは雨情も「入京の困難」（『金の星』第5巻第10号、1923年10月号）に書いている（金子 2013：269-270）。北原白秋とは、新潟市の短歌会に同行を求められ、一緒に行ったことがあり、新潟の海岸を散歩した後、帰京の車中で見せてくれたのが「海は荒海向こうは佐渡よ」という「砂山」の詩であったという（中川 1967a）。沖野岩三郎とは、「当時の読み物で懇意にしていた」ことから講師として呼んだという（中川 1986：73）。

魚沼自由大学に中山晋平や沖野岩三郎を、のちに八海自由大学に野口雨情や中山晋平を招いた背景には、芳井研一も指摘するように、中川の、当時の人々に受け入れられつつあった晋平や雨情、沖野といった文化人との密接な交流があったからといえる（芳井 2018：6-7）。

- (20) 越佐夏季大学は、県内務部社会課が主催し、社会教育施設の1つとして、また「大学教育の民衆化を期する施設」として計画され（片桐 1922：16）、第1回は1922年8月1日から12日まで岩舟町岩船小学校で開催され、第2回は23年8月1日から7日まで妙高小学校、第3回は24年8月1日から7日まで三島郡寺泊小学校で開催されている。第2回の場合、午前8時より午後3時までを講習時間とし、聴講料は2円、講座は、愛知敬一（東北帝大）「あいんしゅたいんノ相対性原理ト将来ノ理学界」、野上俊夫（京都帝大）「能率増進ノ心理」、青柳栄司（京都帝大）「最新電気ト文化生活」、河津暹（東京帝大）「交通政策」、岩川克輝（新潟医大）「小児病ト学齡児童」、牧野栄一（東京帝大）「法律ト国民生活」、高橋順次郎（東京帝大）「釈尊ト親鸞上人」、沢柳政太郎（帝国教育会長）「我国将来ノ女子教育」、本多静六（東京帝大）「欧米ノ文化ト森林ノ公用」で、聴講者数は604名、うち証書授与者は564名であった。第2回夏季大学の意義について、県社会主事の片桐佐太郎は「由来本県は高等教育を受るものが多く又学者の輩出も全国で有名である」「本県の長所を進むるにも相当の意義を有」していると語っている（片桐 1923：6）。会場は、会毎に変わり、聴講者が多いことから宿泊のことも考え、自然の景勝地が選ばれ、観光も兼ねていた。講師は東京・京都などの帝国大学の教授が多く、聴講者は教員の講習会的色彩が濃く教員が多かったが、第3回以降は一般の人々や女性の参加も見られるようになった（安達 1983：39-42、70-71）。

- (21) 中林昌平は、「北越新報が、大いに応援してくれ、記事に何回もとあげて呉れました」と語り、林広策は、中林の言葉を継いで、「根小屋出身の関魚川が主筆でいました。実によく面倒みてくれました。名文家でネ、あとになって、越佐新報に肩代わりしたんですが、全然力の入れ方が違いました」と語っている（「明治青年大いに語る一懐かしい自由大学の頃―」『町づくりほりのうち』第189号、1978年1月30日）。

- (22) 安達朋子は、「山宣の講演の時は警官が配置されていた程だったので、泰亮などは山宣を講師に呼んだのは誤りだったという後悔の念に捉われ始めていた」としているが（安達 1983：26）、その出典が示されていない。渡辺泰亮は、八海自由大学を創設したことを知らせる手紙の中で、「十二月十一日に出発して京都へ上つていろいろ御詫びしたり御指導を仰いだりいたし度く存じます是

非一寸でも御会ひ下さる機会を御与へ願ひます。(中略)『人生生物学小引』はなんともうれしく存じます。万事御面快の節申述べます」と、山本宣治に書き送っており(山本宣治宛渡辺泰亮の手紙、1923年12月8日、佐々木・小田切編 1979:195)、渡辺が「山宣を講師に呼んだのは誤り…」と思っていたとするのは、疑問がある。山宣を呼んだことを誤りで後悔していたとするなら、渡辺がわざわざ山宣のもとを訪れ指導を仰ぐとは考えられないからである。

- (23) 林広策は、「当時の内務部長が、和田さんとかいったか、大分文句を言ったそうですよ。われわれには聞かせないけれど、蔭で。沖野さんは、ご承知の通り、幸徳事件でひっぱられたですから、ちょうどそのとき和田さんが和歌山県の警察部長であったときで、それでなくとも新潟県で一緒だから、まあ大分ひどいことを言ったそうです」と語っている(林 1979:46)。長島伸一は、この林の証言をもとに、「注意書」が出された背景には、「当時の和田警察部長は、事情聴取を受けたが逮捕することはできなかった事実を軽視ないし無視して、「ひっぱられた」(事情聴取を受けた)事実を重視したわけである」と記している(長島 2022:142-143)。しかし、幸徳事件が起きた1910年当時の和歌山県の警察部長は「広瀬直幹」であり(印刷局編 1910:543)、また、「注意書」が出された1923年当時の新潟県の内務部長は「千葉了」であり、内務部にも警察部にも「和田」の名前はなく(印刷局編 1923:381)、林の記憶違いがある。したがってその真偽は不明というほかはない。
- (24) タカクラ・テルは渡辺泰亮に宛てた手紙の中で、山本鼎の手紙を同封し、タカクラは「更めてそちらから御願の手紙をお出しになれば都合して来て下さる事と存じます」書いている(渡辺泰亮宛高倉輝の手紙、1924年2月12日)。同封されていた山本鼎の手紙には、「越後の講演の事二三月頃まででよろしいとの御手紙でしたから何か写生の用をつくって出かけ度いと存じます。実は、十一年度で講演旅行は切り上たにしようと思ひて居りました処ついつい十二年度も実行出来ず十三年度こそは止め度いと思ひ先日新潟の講演にも左やう声明して帰った事ですからこれからは写生の用事を兼ねてといふ事にしておき度いと存じます。右おふくみ下され然るべく先方へ御伝へ下さらば幸ひです」と書かれていた(高倉輝宛山本鼎の手紙、1924年2月7日、佐藤編 1981:120-121)。
- (25) 田辺生「真実児童村 伊米ヶ崎小学校を訪ねて」(『新佐渡』1924年12月19日より連載)に紹介されている「農民自由大学」について、佐藤泰治は、「これによれば、伊米ヶ崎には、八海自由大学の他に農民自由大学があったことになる」としている(佐藤 1980a:62)。この訪問記には「年四回開催し土田杏村氏を始め当代の第一流の若手学者が、今迄回を重ねて十数名講師として来られてゐる。(中略)今年寺泊の夏季大学と丁度同期日に当つたので、魚沼三郡の者は、全部寺泊へは出なかつた程だもと云ふ。(中略)校長様(注、渡辺泰亮のことー引用者)は、着任以来三年間に、自由大学其他、中山晋平、野口雨情氏等の音楽家招聘する等、其他に、二千円の自費を私かに出してゐる、と傍から中川兄(注、中川杏果ー引用者)が附言せられた」とある(田辺生 1924、佐藤編 1981:193)。「年四回開催」は誇大であるが、1922年から24年までに魚沼・八海合わせて延べ11名の講師が来ていること、越佐夏季大学が寺泊で開催された1924年8月1日から7日までの時期に、「魚沼三郡の者は、全部寺泊へは出なかつた程だ」というのは大袈裟としても、八海自由大学が8月1日から3日間、山口正太郎、野口雨情の講座を開いていること、具体的な名前を出ている土田杏村・中山晋平・野口雨情は魚沼ないし八海自由大学に出講していること、などから考えて、訪問記に出てくる「農民自由大学」は渡辺泰亮が関係している魚沼・八海自由大学のことを指していると考えてよい。
- (26) 渡辺泰亮の農民芸術、郷土芸術への思い入れは、県視学として新潟市に転勤した後に『佐渡おけさ』を刊行したことにも見ることができる。渡辺は「自序」の中で、次のように述べている(渡辺 1929:8-9)。

「郷土芸術といふ言葉は最近無暗に濫用されている。

私は此の小冊子で、郷土芸術といふものはどんなものでなければならぬか。ということを語りたいのだ。(中略)

すぐれた郷土芸術は、誰人の心琴にも当然触れなければならぬ筈だ。

私は佐渡の近くに住んで、数回佐渡に遊び、将来は此の島を一つの国立公園としたならばといふ夢を描きながら、ゆかしい佐渡おけさの小研究を纏め、そして全国の研究者から方々の優れた郷土芸術研究の発表を願い、相協力して日本の郷土芸術を互いに味わい合いたいことを祈念する。」

(27) 渡辺泰亮は、12月8日、山本宣治に宛てた手紙の中で、「其後は全く御無礼いたしました。しかし一生懸命で働いて居ました。八海自由大学をもう一つ創設しました。場所は違ひますが基礎がしっかり出来ましたから御よろこび下さいませ」と書いている(山本宣治宛渡辺泰亮の手紙、1923年12月8日、佐々木・小田切編 1979:195)。

(28) 自由大学のパンフレットについて、タカクラ・テルは「パンフレットの原稿明日送るつもりです。出来るなら大きさ、組み方、上田、飯田と同型にして下さい。何かに便利です」と、渡辺泰亮に書き送り、上田の『信濃自由大学の趣旨及内容』、飯田の『信南自由大学趣旨書』と同型とするように助言している(渡辺泰亮宛高倉輝の手紙、1923年12月20日、佐藤編 1981:114)。山本宣治は、渡辺からの原稿依頼に対して、「趣意書の中に、寄稿の件承知しました。どういふ風のもので、どの位の長さかあなたの方の御都合を伺ひます」と返信している(渡辺泰亮宛山本宣治の手紙、1924年1月19日、佐々木・小田切編 1979:208)。このパンフレットが刊行されたのかは実物が発見されておらず、不明である。原稿も、土田杏村がパンフレットのために書いたと思われる「自由大学の意義」は現存しているが(佐藤編 1977:76-80)、タカクラ、山宣の原稿は発見されていない。なお、森山茂樹は、土田の「自由大学の意義」は、1924年夏の自由大学の開講の前に「さかんな啓蒙宣伝活動」をしたときのものとしているが(森山 1971:163)、新聞に掲載されたのは「自由大学へ」であり(『北越新報』1924年7月10日、『新潟時事新聞』7月11日)、謄写版刷のものは土田の文章ではないので、これがパンフレットの原稿と考えられる。

(29) 出隆「哲学史」の講義については1924年2月16日・17日の2日間としてきたが(山野 1975:25)、誤りであり訂正する。出によれば、「或る駅(近ごろよく上越線を利用するので、考えてみると、小出駅だったような気もする)で下車して、そこから数キロさきの或る村、そこでも、哲学か哲学史の講演に招かれて行ったにちがいないが、誰を相手にどこでなにを話したか、どうしても思いだせない」としつつ、「朝早く出発・帰途につく予定だったのに、急の大雪に見舞われて遅れ」、その前の日には「『今年は例年になく雪不足でして』と言われて、僕はその『雪不足』という言葉の意味を問いただした覚えがあるのに、ひと晩のうちに五尺もありそうな大雪で、結局、雪のうえを徒歩で駅までたどりつけるだけの道(というよりも足跡)がつけられるまで待たされて、昼食後に、『かんじき』とかいう藁靴をはかされ、村の青年に前後を守られて宿をたち、苦心して雪のうえの足跡をふんで歩いて、やっと日暮れがたに、駅前の商店街は二階まで雪に埋もって、その軒下のうす暗い通路をくぐって、駅につき、寒さにふるえながら新津行の終列車を待った」と回想している(出 1963:196-197)。17日は朝早く出発して帰途につく予定だったのが、大雪で出発が大幅に遅れたことが知られる。

(30) 川口自由大学は、のちに記すように、1926年10月と27年10月に西川口小学校で講座を開講している。

(31) 土田杏村は、野口雨情を八海自由大学の講座に組み入れることに当初は難色を示していたが、自由大学の講師を紹介する土田の原稿では、「野口雨情氏は私は不幸にして従来私交を得る機会を持たなかつた。併し日本の童謡教育における同君の功蹟^{ママ}に対しては、日頃竊かに敬意を表して居^{ひそ}

るものである。北原白秋氏、西條八十氏と並んで同君の童謡は現に最も多く児童に歌はれて居ると思ふが、其中でも野口君の作品は最も多く野趣を帯び、軽佻なる都会趣味から離れて居る。魚沼の地で芸術教育の講義を聞くとすれば、同君ほどの最適者は無い」と高く評価し紹介している（土田杏村「魚沼、八海両自由大学の講師を紹介」、佐藤編 1981：132-133）。

渡辺泰亮は、中川杏果を通して野口雨情に講師を依頼したものと思われる。

なお、野口雨情の生涯については、野口存彌『野口雨情－詩と人と時代－』（未来社、1986年）、長久保片雲『野口雨情の生涯－創作民謡・童謡詩人－』（暁印書房、1993年）、野口不二子『郷愁と童心の詩人－野口雨情伝－』（講談社、2012年）、金子未佳『野口雨情－人と文学－』（勉誠出版、2013年）などを参照。また、「船頭小唄」が関東大震災前後に流行した社会的基盤と受容基盤については、永嶺重敏『歌う大衆と関東大震災－「船頭小唄」「籠の鳥」はなぜ流行したのか－』（青弓社、2019年）を参照のこと。

- (32) 八海自由大学の会場となった普光寺は、真言宗豊山派の寺院で、旧三国街道から目につく山門は日光の陽明門をかたどり、天井には谷文晁が描いた双竜がある。寺伝によると、807年、坂上田村麻呂が蝦夷征討のためこの地を訪れ、国家鎮護を祈って毘沙門堂を建立したといわれる。毘沙門堂の中で裸の男たちがもみ合う裸押合大祭は、毎年3月3日に行われていた（2020年から3月の第一土曜日になった）。

野口雨情は、宿泊した浦佐ふじやで書いた即興詩を書き残し、渡辺泰亮が「野口雨情先生の人と芸術」（『魚沼新報』1924年8月21日、佐藤編 1981：184-185）の中で紹介している。それは、次のようなものであった。

「ゑちご魚沼朝ぎりや深や霧の中からてんとさまのぼる
霧は山から日は東から越後魚沼あさぎりや深や
浦佐よいとこ毘沙門さまのはだかまつりのあるところ
さんよさんよと提灯まいたさんよさんよと手でひろた
浦佐毘沙門様椿の木だと鳥ア啼きなきとんであるく
もはや夜更か馬曳鳥か浦佐普光寺のせどでなく
どの山高い観音山高いくまんど山まけた
誰にもいふな魚野川のかみで河鹿のこが啼いた
ゐたゐた立つてた桐の木の下にお梅さんが立つてた」

1977年11月6日、伊米ヶ崎小学校内庭で渡辺泰亮顕彰並びに野口雨情魚野川旅情歌碑の除幕式、屋内での記念行事が執り行われた。魚野川旅情歌碑には「八海自由大学記念」と横書きされたその下に、「霧は山から日は東から越後魚沼朝霧や深や」が刻されている。当日の式典には、雨情の子息、野口存彌が招かれている（星野 1978：9-11）。

- (33) 渡辺はつ江は、自由大学を聴講する青年のある親の愚痴を、次のように紹介している（渡辺 1979：24）。

「おらんち（家）のあんじゃは田圃にも行かねんで銭を持って勉強しるとて学校へ行ったがんだぜ。おおごった（困った）。尚更貧乏になる勘定だかのし。」

長男が田圃の仕事を休んで勉強するためとお金を持って自由大学に行ったが、お金を持ち出されて更に貧乏になるだけで困った、と母親が愚痴をこぼしていたことを紹介している。農家にとっては決して安くはない聴講料を払ってまでして息子が自由大学に行くことに、積極的ではないものの意義を認めていたことが知られる。勉学したくても進学できなかった青年たちは、こうした母親たちの了解があって自由大学で学べたとも言える。

- (34) 東北文化学院は、1923年1月から3月まで3回の講座を開講したが、短期間で終わった。東北

文化学院については、拙稿「福島県における自由大学運動」（山野 2023：239-246）を参照。

- (35) 宮芳平の生涯については、小島初子『天龍残影－宮芳平伝－』（冬芽社、1999年）、竹中正夫『天龍の旅人－画家宮芳平の生涯と作品－』（YMCA出版部、1979年）があり、芳平が諏訪高等女学校の教え子たちに送った個人雑誌通信『AYUMI』に連載された自伝「琅自伝」をまとめた宮芳平著・堀切正人編『宮芳平自伝－森鷗外に愛された画学生M君の生涯－』（求龍堂、2010年）がある。芳平の作品の多くは現在、安曇野市豊科近代美術館に保管され、常設展示されている。

宮芳平は、タカクラ・テルとの出会いを、次のように回想している（宮 2010：460）。

「その頃テルは上田にいましたが、わたしがまだ諏訪にこない頃、画学生の頃、わたしの郷里の青年達が夏季大学というのを催して、テル、その他一人二人の講師を招いたことがあります。わたしは夏休みで帰っていて、テルの話をききました。その頃テルは京都大学の助教授でした。テルはその頃小説や戯曲を書こうとしていたらしく思われます。」

この回想には誤りがある。1924年の夏は、芳平はすでに諏訪高等女学校の講師になっている。また、タカクラは「京都大学の助教授」にはなっておらず、すでに京大の嘱託を辞めている。

この回想に依拠したためか、竹中正夫や小島初子の評伝は、芳平とタカクラとの出会いを1922年8月の魚沼夏季大学のときとし（竹中 1979：178；小島 1999：254-256、591）、宮芳平の画文集の年譜は、魚沼夏季大学を1922年8月と1923年8月の開催とし、23年8月に芳平はタカクラと知り合っているとしているが（宮 2013：186）、いずれも誤りで、宮がタカクラと知り合ったのは1924年8月の魚沼自由大学第3回講座のときである。

小島初子によれば、1932年に長野県上諏訪町湯之脇の家にタカクラは3日間宿泊したことがある（小島 1999：368、594）。このときタカクラは「思いなしか憔悴していた。その奥さんの兄になる人は東京で、右翼の人に刺されていた」とし、テルは芳平に「モデルになりましょう。描きませんか。」などと言っていたという（宮芳平著・堀切正人編 2010：465）。タカクラが、1929年3月の山本宣治の死で「思いなしか憔悴していた」とすれば、これは1932年に芳平の家を訪ねたときではなく、小島の略年譜によれば1930年にも訪ねているので（小島 1999：593）、「モデルになりましょう」と言ったのは、1930年の比較的早い時期ではないかと思われる。



堀切正人は、芳平がタカクラの肖像画を制作したのは1935年としているが（宮芳平著・堀切正人編 2010：464）、紙にコンテで描いたデッサンであり、30年のときと考えられる。それが上の肖像画「高倉輝の像」である（安曇野市豊科近代美術館所蔵）。

- (36) この土田杏村の「自由大学の意義」は、新潟の自由大学のために自由大学の理念を明らかにしたものである。土田は、「現在の教育制度の大幹はコメニウスの考へから出たもの」であるが、われわれは「コメニウスが最初に考へて居た学校制度の理想を忘れて居る」とし、学校制度は「出来るだけ具体的に、民衆の生活へ適合せられ得るものなる事が必要だ」と述べ、「人間が人間として生きるとは、人間が何ものかより教育を受け、自分を生長させて行くことだ」とすれば、「其の生長を助けるための教育は終生的のものでなければならぬ」とし、「随つて学校制度も亦、其の終生の教育に適合し得るものでなければいけない」とする。「現在の義務教育六個年程度の学校制度が、我々に満足を与へ得ないことは言ふまでも無い」が、義務教育の年限を延長しても、「農村の子女を其の学校に学ばすために、農村家庭の奪はれる労働の分量の莫大なることは、恐らく今日の農村の堪へ得る犠牲ではあるまい」と述べ、ここに「理論に於て正しく、事実として現在の事情へ適合せられ得る、真に具体的な、自由大学本位の学校制度の生まれて来る根本の理由」があるとし、自由大学の理念を次のように述べている。

「自由大学はすべての社会人を終生的に教育する教育設備である。勿論それは単に知識を教へる謂では無い。自由大学の学習は、自己教育を本位とするから、開講せられて居る期間は短かいが、其の講義は毎年連続し、且つ其の講師にも変更が無いから、我々は自由大学に於て、静かに深く自己の教養を進めることが出来る。自由大学は農村の労働を奪ふことが無い。寧ろ自由大学の理想は、労働しつつ学ぶ人格をつくることに置かれて居る。のみならず自由大学を支持して行く計費は極めて僅少のものであつてよい。」

そして「我国の現状を見れば、改造せられなければならぬものは多々あるが、しかし其の何れの改造も、根基に教育の充実を置かなければ何の意義をも発揮し得ないもの許りである。社会の此の重大なる危機に臨んで、私は一日も早く自由大学の制度が全国的に行き亘ることを希願しているものである」と、自由大学が全国に広がっていく期待を述べている（土田 1924：76-79）。

この土田の「自由大学の意義」は、1923年12月前後に書かれたと思われ、23年11月に出された『信南自由大学趣旨書』の「設立の趣旨」でもコメニウスに言及しているように、ほぼ同様の趣旨で書かれていることが知られる。

- (37) 林広策は、堀之内では「『哲学以前』の輪読会をやったことはありません」と否定し、伊米ヶ崎で行ったかどうかについては、「堀之内でやらない位だから、伊米ヶ崎ではなおさらでしょう」と否定的な見解を述べている（林 1979：40）
- (38) 林広策によれば、響倶楽部の実業メンバーとくに長尾喜三郎は講義の「話がわからなかったことから見当がちがったんでしょ。真理の追求というようなことは、あの人たちは希望がなかったですなるやっぱり商業問題とか当時の現代政治というようなことには関心をもつけれども。哲学とかそういうことには関心をもたなかった人ですね。それで期待がはずれたんだと思います」と証言している（林 1979：40-41）。
- (39) 「魚沼自由大学会々則」は次の通りである（山野解説 1979：60；佐藤編 1981：281）。

「 魚沼自由大学会々則

第一条 本会は魚沼自由大学会と称し会員各自統一的なる文化学の研究をなすを目的とす。

第二条 本会は会務処理の爲め左の役員を置く。其の任期は各二箇年とす。

一、専務理事一名 二、理事一名 三、会計理事一名

専務理事は会員の選挙に依り他は専務理事の指名に依り決す。

第三条 本会の会員は会費として月額金壹円を出費するものとす。

第四条 本会は第一条の目的遂行の爲め左の事業を行ふ。

一、自由大学協会と連繋して自由大学の経営をなすこと。

二、毎月一回集会して会員相互の研究併に諸般の協議をなすこと。

三、毎年一回機関雑誌の発行。

四、其他会員の決議により必要と認めたる事項。

第五条 本会の会計年度は暦年度に準ず。

第六条 本会の事務所は専務理事宅に置く。

」

- (40) 林広策は、1893年に堀之内村に生まれ、堀之内小学校を卒業後、新潟郵便局の養成所を修了、その後1913年に検定で准教員となり、堀之内校、二親校を経て、22年竜光校に勤務、ここで本科正教員となる。この頃堀之内村の実業青年たちの親睦団体響倶楽部に誘われ、22年8月に響倶楽部の主催で開催された魚沼夏季大学（のち魚沼自由大学）の運営に渡辺泰亮・中条登志雄らとともに関わり、24年12月魚沼自由大学会の専務理事となり、その運営の中心に立った。

林は、若いときからよく読書をし、吉野作造や福田徳三、土田杏村、山本宣治、河上肇などの著書を読み、河上の『社会問題研究』を講読していた。また、田中惣五郎・井上乙吉らの「無明会」

にも関心を寄せ、1920年12月の発会式での大山郁夫の講演を聴いている（佐藤 1979：11）。当時の自由教育の影響を受けて童謡や綴り方、自由画教育を実践し、加藤金治と千葉師範附属小に見学に行ったりもしていた（林 1979：35）。佐藤泰治は、林について、「大正デモクラシー時代の青春を最も誠実に歩んだ地方の代表的インテリ」であり、その一貫した人生観、資質は「若き日の膨大な読書量」によって培われた、と評価している（佐藤 1979：11）。

- (41) 中条登志雄は、堀之内村丸末書店の番頭であったが、アルスへの入社は書店の仕事と家庭内の事情が絡んでいた。一つは、主人の宮保治が店を「中条にくれた」、つまり経営を任せたのはよかったが、店の経営に口を挟んでくることに耐えられなかったこと、もう一つは、丸末書店の本家の一族の宮てると結婚したが、息子は先妻の子どもでいざこざが起きたことである。中条は「自分でだまつて単独で苦勞する身になりたい」「どこでもよいから飛び出したい」と、渡辺泰亮に言っていた（土田杏村宛の渡辺泰亮の手紙の草稿、1924年10月末頃、佐藤編 1981：141）。タカクラ・テルの斡旋で中条のアルスへの入社が決まったのは24年の11月か12月初旬頃であった。

なお、中条は、3年後にはアルスを辞めて1928年にはロゴス書院を設立し、自由大学関係者を中心に著書を出版し、高倉輝・安田徳太郎編『山本宣治全集』全8巻をはじめ、高倉輝『高瀬川』、土田杏村『農村問題の社会学的基礎』、今中次麿『政治学要論』、山口正太郎『重農派経済学の人々』、渡辺亮村『佐渡おけさ』などを出版している。しかし、30年にはロゴス書院は潰れてしまい、アルスの社長北原鉄雄の推薦で広告業のオリオン社に入社した。45年3月にタカクラが警視庁を脱走したときに浦和にあった中条の家を訪ね、かくまったために検挙されたが、2週間後に釈放されている（山野 2019：5、15）。

- (42) 中川杏果は、1907年頃与謝野晶子の新詩社に入門し毎月短歌の添削をしてもらっていた（中川 1967）関係で、1908年に新詩社に加わり、石川啄木と歌会に出席していた富田碎花（和田 1998：439）とも懇意になっていたことから、自由大学にも呼んで講演してもらったという（中川 1986：74）。

- (43) 富田碎花の講義の題目については、「文学」講座（『自由大学雑誌』第1巻第3号、1925年3月）、「土の文学—アイルランド文学を中心として—」（『北越新報』1925年3月11日、佐藤編 1981：194）、「土の文学（アイルランド文学を中心にしたる）」（『新潟毎日新聞』1925年3月14日、佐藤編 1981：194）と、出典によって異なるが、ここでは『北越新報』のものをとった。

なお、富田碎花の出講先について、宮崎修二郎の「富田碎花略年譜」では大正14年3月に「『信州八海自由大学』で愛蘭文学を講じる」（宮崎 1985：249）、和田英子『風邪の如き人への手紙—詩人富田碎花宛書簡ノート—』（編集工房ノア、1998年）、「ネットミュージアム兵庫文学館」の「兵庫ゆかりの作家 富田碎花」（<https://www.artm.pref.hyogo.jp/ungaku/jousetsu/authors/a43/>）の「略年譜」ではいずれも、1925年の項に「信州八海自由大学でアイルランド文学を講義」とあるが、信州には八海自由大学は設立されていないので誤りであり、これは「八海自由大学」ないしは「新潟県の八海自由大学」とすべきで、さらに魚沼自由大学も入れて、「新潟県の八海自由大学・魚沼自由大学でアイルランド文学を講義」と修正すべきである。また、1923年の項に「信州福島自由大学でアイルランド文学を講義」とあるが、これも信州には福島自由大学は設立されていないので誤りであり、福島自由大学は福島県相馬郡原町に設立された「東北文化学院」を指すと思われるが、現在、富田碎花が出講したことを裏付ける史料は発見されていない。

- (44) 自由大学の講師であった新明正道は、同じく自由大学に出講した山口正太郎、富田碎花との芦屋での交流を次のように回想している（新明 1978：48）。

「私は大正十年四月東京大学法学部を卒業するなり、すぐ当時神戸の東端原田村にあった関西学院文学部で教鞭をとることになり、それから私は東北大学に社会学講座が出来て招聘される

まで五ヵ年間関西生活を送った（中略）。

私は関西に行って最初の一ヵ年は香櫨園の海岸近くにあった友人の別荘に厄介になっていたが、当時やはりその近くに櫛田民蔵先生のお宅があり、芦屋には詩人の富田碎花氏が住んでいて、居つくと間もなく私はこうした知識人と接触を生じ、特に富田氏のところには招かれるまま時折訪問して洋楽のレコードを鑑賞させてもらったが、そこへゆく阪神の芦屋駅の近所に当時大阪商大の教授をしていた山口正太郎君のお宅があり、私は同君のところへも時に顔を出して、学問談に花を咲かせたものであった。この山口君は少壮ながら不幸早死にしてしまったが、自由大学の話をはじめて私が聞いたのはこの人の口からである。」

新明は、1924年3月に伊那自由大学に出講した際、飯田から富田宛に「話をたのまれて来ています」との葉書を出しており（富田碎花宛新明正道の葉書、1924年3月11日）、自由大学のことを話す機会もあったように思われる。

- (45) 佐藤千夜子は、1897年に山形県東村山郡天童町で生まれた。1911年に上京し、普連土女学校に入学、13年に青山学院普通科本科に編入学、18年に女子音楽学校に聴講生として学ぶ。20年、東京音楽学校声楽科に入学、クラシックを学ぶ。翌年、メソジスト系の「中央会堂」の聖歌隊に入り、ここで中山晋平と出会い、やがて東京音楽学校を中退する。佐藤千夜子の音色は、ソプラノの音色に恵まれたメゾ・ソプラノで、「『原始的郷愁』を含んだ日本的情感にも溢れて」いて、中山晋平が新時代の「民衆歌謡」を佐藤千夜子に歌わせようとした理由もそこにあった。そして千夜子も「中山の新しい民衆歌曲を目指す活動に協力することになった」のである（菊池 2008：47-49）。23年8月、中山晋平、野口雨情らと佐渡へ演奏旅行、そこで関東大震災を知る。12月、帝国ホテルで中山晋平作品の発表会が開催され、童謡に加えて「須坂小唄」を独唱した。このとき晋平がピアノを自ら演奏し、藤間静枝の踊りが添えられ、好評を博した。佐藤千夜子は、野口雨情、中山晋平らと行動をとともにし演奏会、地方公演の旅などで童謡、新民謡の普及活動につとめた（菊池 2008：52-56）。

佐藤千夜子の生涯については、菊池清麿『永遠の歌姫 佐藤千夜子』（東北出版企画、2008年）を参照のこと。

- (46) 『自由大学雑誌』第1巻第7号（1925年7月）の「彙報」では、「魚沼自由大学では、夏期特別講座として『音楽講座』を開く、講師は中山晋平氏である」としているが、「八海自由大学」の誤りである。

- (47) 渡辺はつ江によると、この音楽講習会は、「浪曲やチョンガレが最高の楽しみであった人達を珍しがらせ感銘を与えた」とし、今でも「佐藤千夜子の着ていた衣装の様子は今でも目の前に見えるようだ」と言い、「着物の美しさ、声の美しさ、唱い方の珍しさ」にひたった娘時代の感激が語り草になっている、と指摘している（渡辺 1979：24）。その受けとめ方は聴講者によって様々であったが、旧来の音楽指導とは異なる新しい旋律に触れて深い感動にひたったことが知られる。

なお、桑原福治の子息である桑原克司は、『虫野のあゆみ』（2000年、私家版）の中で、「八海自由大学」の項目を設け、中山晋平・佐藤千夜子の音楽講習会などについてふれているが、桑原福治『伊米ヶ崎の明治百年』上巻（1973年、私家版）を踏襲したもので、記述の誤りも訂正されていない。

- (48) 桑原亮太郎は、1889年に南魚沼郡伊米ヶ崎村虫野に生まれ、家が貧しくて師範教育を受ける機会に恵まれず、村松連隊での現役兵服役後、教員検定試験に合格し、1915年4月に大崎小学校に勤務したのが最初で、すぐに東五十沢小学校に移り、五箇小学校、浦佐小学校、三用小学校と、南魚沼郡の小学校に勤務した。1931年に再び浦佐小学校に勤務したときに、雪が多く本校に通えないため冬期の4か月間だけ鰯島地区に開く雪中派出校の教員として毎年派遣された。桑原は、「陸

の孤島」と揶揄された鰯島地区の子どもたちに劣等感を起こさせないために、本校児童との接触の機会を多くするとともに、演劇指導に力を入れた。年に1回本校で行われる児童劇に全員を出演させ、必ず劇中の一役を振り当てて、せりふの発言の仕方も指導した。劇の脚本は、桑原の希望に添うようなものはなかったので、自ら創作した（桑原 1973：37）。1936年5月頃に上京した際には多摩帝国美術学校主事に転じた渡辺泰亮を訪問し、「アトリエの窓爽かに初夏の富士」「薫風や木の間に白き多摩の水」の句を詠んでいる（桑原 1936b：19）。若いときから俳句をたしなみ、魚沼俳壇の選者を長く務め、中川竹洞の『春秋』、伊藤松宇の『筑波』に多くの俳句を発表している。鰯島雪中派出校の教え子たちが、紀元2600年の記念事業として、稲荷神社境内に建てた句碑には「雪嬉し十とせ此の地に住み馴れて」という桑原の句が刻まれている（桑原 1973：38）。終生執筆活動続け、1976年に87歳で没した。もとは裕福な家であったが、父の代に家が破産して貧しく、生きていく意欲を失い、幾度か魚野川に入水したこともあったが、その都度人にとどめられて果たさず、それ以来亮仙の号を亮川と改めたという（小出町教育委員会編 1998：1214）。著書に『慈浪追悼集 水漬く屍』（1943年）、『慈浪追悼集 水漬く屍』第二輯（1944年）、『村の伝説－越後国魚沼郡大和町三用谷－』（野島出版、2004年）などがある。

- (49) 桑原亮太郎の「童話と児童の教育」は、『魚沼新報』に桑原蓼川のペンネームで連載された。「緒言」の部分は新潟県立文書館所蔵の『魚沼新報』では欠落しているため掲載日付が不明であるが、おそらく1924年12月下旬に連載が始まったと考えられ、25年2月21日まで掲載された。後に桑原は、新聞を切り貼りして整理、製本して二畳庵叢書第三篇『童話と児童の教育』としてまとめている。ただし、紙面の順序が新聞連載時とは変えているところがある。現在、この二畳庵叢書第三篇『童話と児童の教育』は魚沼市教育委員会によって「桑原亮太郎文書」として保存されている。なお、芳井研一は、桑原の「童話と児童の教育」は「桑原亮太郎文書」中の「笑門の研究（中）」に収録されていると注記しているが（芳井 2018：16）、誤りである。
- (50) 桑原亮太郎は、数多くの俳句を発表しただけでなく、教師として俳句の授業も実践し、自由大学後のことになるが、1937年に伊米ヶ崎小学校で開催された教員研究会で「児童俳句の教育的価値に就いて」を研究発表している。その中で桑原は、「俳句も芸術である以上、其の^{うかが} 覘ふ処は矢張り美の創造」をすることが俳句の本質的使命であるとしたうえで、児童の「大胆にして率直なものゝ見方、其のあどけない言葉のもつ詩的なリズム、石に語り、草にさゝやき、鳥に話しかけ、虫に戯れる自由奔放な動作」など、「児童は詩人として最もふさはしい素質を具へてゐるもの」で、俳句は、教師が「僅かの暗示を与へたのみでも彼等は好んで創作」する、と述べている。そして、俳句の授業は「児童に俳句を作らせる事のみが目的では」ないとし、俳句を教授しなくても、「教師其の人が永遠の児童性に目覚めて、児童と共に生活する楽しみを忘れず、緊かりした正しい俳句の眼識を具へて、自然の姿を…詩の魂をしっかりと把握する事が出来ますならば、いつしらず其の芸術心が、幼い魂に反映して、すくすくと児童の生命が伸びて行き、自己の環境に美を創造しつつ、歓喜と感謝の中に其の日其の日の営みを続ける堅実な朗らかな児童性を築き上げる事が出来やうと信じます」と述べ、そこに「児童俳句の教育的価値」がある、と指摘している（桑原 1937）。
- (51) 住谷悦治は、1895年に群馬県群馬郡国府村（現群馬町）に農業・蚕種業を営む住谷友太の二男として生まれた。キリスト教牧師で英文学者の住谷天来は叔父で、1916年に叔父から洗礼を受ける。仙台の第二高等学校から1919年、東京帝国大学法学部政治学科に進学し、東大新人会の活動に関わる。22年に東大を卒業すると、同志社大学助手となり、同志社アカデミズムの一員として活躍した。当時の同志社大学法学部には、自由大学の講師となった中島重、今中次麿、波多野鼎らのほか、林要、河野密、長谷部文雄、宮川実ら多彩の人材を擁していた。22年には賀川豊彦が校長、主事を松沢兼人が務めた大阪労働学校に講師として参加、労働運動史などの講義を受け持った。

25年には最初の著作『新社会の夢と科学』を大阪労働問題研究所から出版した。これは対話形式で書かれた労働問題の解説書で、平易に空想的社会主義と科学的社会主義について概説したものであったが、「共産党宣言」の内容を紹介する部分があったため、刊行即発禁となった（田中 2001：61-63）。悦治の中学時代に、長男亮一が早世すると、住谷家の家業の跡取り候補は三男の三郎に頼み、悦治は進学の道に進んだ。三郎は、1926年に群馬県蚕業取締所の唐澤正平が、前橋周辺の蚕種・養蚕農家の青年たちと群馬自由大学を設立すると、その中心メンバーの一人となり、自由大学を聴講している。

なお、住谷悦治の生涯については、田中秀臣『沈黙と抵抗－ある知識人の生涯、評伝・住谷悦治－』（藤原書店、2001年）を参照のこと。

(52) 『自由大学雑誌』第1巻第11号（1925年12月）の「彙報」では住谷悦治の「社会思想史」は「八海自由大学」の講座となっているが、「魚沼自由大学」の誤りである。

(53) 「アルスも近藤の入獄から家宅搜索まで受けたようですね」とあるのは、アルスに勤めていたアナキストの近藤憲二が1921年の第2回メーデーの際に検挙され、6月に市ヶ谷刑務所に下獄しており（近藤 1965：225）、勤務先のアルスも家宅搜索を受けたことを指している。

なお、「米本」は「米本書店」のことで、教育・農村関係の出版が多く、野口雨情『童謡教育論』（1923年）、藤岡亀三郎『児童の図画の発達』（1926年）、千葉正規『国語読本に現はれたる人物史考』（1925年）、宇根義人『農村青年新生活の曙光』（1922年）などを出版している。

(54) 渡辺泰亮は、1926年から4年間、県視学になり、その間には木崎村小作争議の中で26年5月に全村の小学生約1000人のうち約700人が同盟休校を行うと、その農民を説得する側に立つことになり、「八海自由大学の主宰者だった人としては皮肉な立場に立たされた」（佐藤 1974：129）。木崎村無産農民学校の設立について、土田杏村は、同盟休校や無産農民学校の設立について、「普通教育に於ける教育の階級性に公然と対抗する計画の展開」であり、「我が国の教育史として全然新しい事実」であるとし、その意義を認めつつも、無産農民学校は国家が認めず「国家の手により直ちに閉鎖を命ぜられ」るだろうと述べていた（土田 1932：111-119）。26年8月20日、無産農民学校問題について、県当局と農民組合幹部の会談がもたれたが、県側からは岩本俊郷学務部長と県視学の渡辺泰亮が、農民組合側からは新潟県連の浅沼稻次郎・稲村隆一、木崎農民組合の川瀬新蔵らが出席している。その結果、9月8日、三松武夫県知事、岩本学務部長と浅沼・稲村・川瀬ら農民組合側との会談で、同盟休校は解除のうえ復校する、農民小学校は高等農民学校として存置する、ということで妥結し、9月10日、無産農民小学校は閉校式を行っている（青木 1977：427-737）。渡辺は県視学として農民学校閉鎖の側に立ったのである。

その後渡辺は、1930年に県視学から西蒲原郡巻町の巻小学校長となった。36年2月の衆議院総選挙で新潟県一区から立候補した民政党の北吟吉を応援し、現職校長が支援したことが対立学閥（新潟師範・ときわ会⇄高田師範・公孫会）の中で批判され、3月に退職、4月から北が名誉校長を務める東京上野毛の多摩帝国美術学校主事となる。39年に東亜振興会学生課長の田鶴濱次吉から明治学寮の学監になるよう依頼を受けた。明治学寮は、親日中国人子弟に対して、基礎教育としての日本語教育や各教科の総合的学習が行われ、その他名士の講演、留日学生懇談会、運動、見学、旅行などがあった。渡辺は、40年4月からこの明治学寮での教育に携わり、とくに日本語教育の経験を中心にまとめたものに『支那の少年は語る』（大日本雄弁会講談社、1941年）がある。そこでは、「少年達に教育的愛を注ぐ模範的な教師である渡辺の姿が終始一貫して描かれ」、「時局を意識した特別な実践や用語は見当たらない」ものの、少年たちは、「日本理解を深め日支親善を体験し、国策に沿った言動を身につけて行くように促され」る教育が行われたことが知られる（川上 2018：142-146）。なお、渡辺は明治学寮での中国人子弟に対する教育に携わっての雑感を「中華民国

青少年留学生教育に直面して」(『新潟県教育』第578号、1940年12月)に書き記している。

その後1945年まで東亜防空資料研究所に在籍し、戦後は、板橋木工株式会社専務、病氣療養を経て1955年に小出町会議員、61年に町議会議長となったが、62年4月に71歳で死去した(小出町教育委員会編 1998: 1250-1251)。

- (55) 柳田謙十郎は、当時、「私は、認識論方面ではリッケルトの『認識の対象』のような純論理主義の立場」に立っていた、と回想しており(柳田 1967: 83)、自由大学の講義も、『認識の対象』をもとに行ったと考えられる。

林広策と同年、すなわち1927年4月に新潟師範学校専攻科第2回生として入学した三村一雄は、新潟師範での柳田の講義について、次のように回想している(三村 1983: 76)。

「先生の講義は実に素晴らしいものであった。

かなり長身の先生であったが、少し前かがみの姿勢で、静かに壇上を歩かれ、常に瞑想的に思索に没頭されながら講義をされた。その姿はまさに哲人そのものであった。

私共は、その雰囲気陶酔しながら講義に耳を傾け、ペンを走らせた。五十有七年前の当時のあの面影が目になつかしく浮かぶのである。」

自由大学での講義の様子ではないが、おそらく同じような雰囲気の中での講義であったと思われる。

専攻科卒業生の組織である新潟師範学校攻学会が出版した柳田謙十郎『哲学概説』の序文の中で、柳田は、「純真な哲学への要求は教育の基礎づけのためでもなく人格の修養のためでもない。深き人間性の奥に根ざす根本的要求の一として、われらのやむべからざる生命のあこがれである。かかるあこがれに生きる人とのみ我らは哲学を談じ人生を語ることができる。哲学をすら何らかのためでなければ求めないやうな人を私は遠去かりたいと思ふ」と述べている(柳田 1927: 2)。柳田の哲学に対する姿勢をうかがうことができる。

なお、林広策は、柳田謙十郎の土田杏村評を次のように紹介している(林 1979: 44-45)。

「私は新潟師範で柳田さんの哲学概論を一年間聞いたんですが、よく柳田さん言いましたよ、杏村の攻撃をして、『杏村なんてのは萬屋で、学者なんていうんじゃない』と。自分では杏村のようになりたいんだけどなれないんで、あんなことを言っているんだろう、と陰でわしら言っていましたかね。」

- (56) 下村正作は、1896年に堀之内村竜光で生まれ、小千谷中学校を経て一時上京、その後家業の酒造業についた。1921年に結婚、翌年長男の誕生を機に独立し、堀之内駅前に酒類販売業を営み、響倶楽部の会員となった。1966年に句集『小春』を出版、68年に亡くなっている(戸田 2016: 247-255)。
- (57) 「西川口小学校沿革史」には「昭和二年十月九日 川口自由大学ヲ本校ニ於テ開講 講師ハ高倉輝氏、講習会員約七十名」と記載されているという(佐藤編 1981: 31)。
- (58) 第一書房は、新潟県三島郡出雲崎町出身の長谷川巳之吉が1923年6月に創業した出版社で、松岡譲、土田杏村、堀口大學、太田黒元雄らいずれも文壇やアカデミズムから様々な事情で疎外された学者や文学者の著書を数多く出版し、その在野性とフランス、スペイン、イタリアのラテン系文化の翻訳書が多いことが特徴で、アカデミズムの「岩波文化」、大衆性の「講談社文化」と対比して、「第一書房文化」を形づくったといわれている(長谷川 2006: 165-167)。山田勝治が第一書房の社員になっていたことを確認する史料としては、1927年9月28日の「杏村日記」に「高倉から又手紙が来た。中条君の書店は第一書房の連中も退社する結果になるとの事で、面白い問題ではない。山田君にそれを止める手紙をかいて出した」とある。これはタカクラ・テルから、中条登志雄がアルスから独立してロゴス書院を設立するにあたり第一書房の社員を引き抜くことを伝えた手紙

が来たと思われ、土田は山田に退社を思いとどまるように手紙を書いたことが知られる。そして、タカクラの『近代劇全集』（第一書房、1929年）の「あとがき」（昭和三年十一月末の日付）の中に、「私が今度はからずチェーホフを訳すことになつて、手許にはそのテキストすら無いのに苦しんだ。そこで第一書房の山田君の尽力に依つて取り敢へず手に入れることの出来たテキストと訳書は次の如くであつた」とあり（高倉 1929：470）、1928年までは山田が第一書房にいたことが確認できる。しかし、1929年4月13日の「杏村日記」には「山田君が第一書房を出たらしい。ロゴスは山本宣治の全集を出すらしいし困った連中だ」とあり、山田が第一書房を退社したとの記述がある。第一書房のPR誌『伴侶』第1号（1930年1月）には正月の挨拶と長谷川巳之吉夫妻のほか社員8名、計10名の名前が記載されているが、山田の名前はなく、27年に入社したものの29年には退社したものと考えられる。

なお、長谷川巳之吉の生涯と第一書房については、林達夫・福田清人・布川角左衛門編『第一書房長谷川巳之吉』（日本エディタースクール出版部、1984年）、長谷川郁夫『美酒と革囊－第一書房・長谷川巳之吉－』（河出書房新社、2006年）を参照のこと。

引用・参考文献

- 安達朋子 1983 「新潟県における自由大学運動（上）」（『自由大学研究』第8号）。
- 安達朋子 1986 「新潟県における自由大学運動（下）」（『自由大学研究』第9号）。
- 青木恵一郎 1977 『日本教育外史－木崎村農民運動史－』同朋舎。
- 猪坂直一 1925a 「上田自由大学の回顧（一）」（『自由大学雑誌』第1巻第1号、1925年1月）。
- 猪坂直一 1925b 「彙報」（『自由大学雑誌』第1巻第9号、1925年9月）。
- 出隆 1963 『出隆自伝』出隆著作集第7巻、勁草書房。
- 岩居保久志 1988 『日本近代文学と明治学院』一粒会。
- 印刷局編 1910 『職員録乙 明治43年』印刷局。
- 印刷局編 1923 『職員録』印刷局。
- 岡田洋司 1978 「中山晋平における『民衆』－「大正デモクラシー」と音楽表現－」（民衆史研究会編『民衆史の課題と方向』三一書房）。
- 片桐佐太郎 1922 「社会教育の進展と越佐夏季大学」（『越佐教育』第351号、1922年1月）。
- 片桐佐太郎 1923 「夏季大学物語」（『越佐教育』第371号、1923年10月）。
- 金子未佳 2013 『野口雨情－人と文学－』勉誠出版。
- 上木敏郎 1968 「土田杏村に宛てた山本宣治の書翰」（『土田杏村とその時代』第7・8合併号）。
- 上木敏郎 1968 「若き日の土田杏村（二）」（『成蹊論叢』第7号）。
- 上木敏郎 1969 「若き日の土田杏村（三）」（『成蹊論叢』第8号）。
- 上木敏郎 1971 「若き日の土田杏村（四）」（『成蹊論叢』第10号）。
- 上木敏郎 1982 『土田杏村と自由大学運動－教育者としての生涯と業績－』誠文堂新光社。
- 川上尚恵 2018 「日中戦争期における中国の少年達の日本留学」（『新世紀人文学論究』第2号）。
- 菊池清麿 2008 『永遠の歌姫 佐藤千夜子』東北出版企画。
- 桑原克司編 2000 『虫野のあゆみ』私家版。
- 桑原福治 1973 『伊米ヶ崎の明治百年』上巻、私家版。
- 桑原蓼川（亮太郎） 1924・25 「童話と児童の教育」（『魚沼新報』1924年12月下旬～25年2月21日、のちに桑原亮川『童話と児童の教育』二畳庵叢書第三篇に収録、魚沼市教育委員会所蔵「桑原

- 亮太郎文書」所収)。
- 桑原亮川(亮太郎) 1936a 「魚沼俳壇史の研究資料 珍籍、笑門に就て」(『笑門の研究(中)』二畳庵叢書第拾貳輯、魚沼市教育委員会所蔵「桑原亮太郎文書」所収)。
- 桑原亮川(亮太郎) 1936b 「旅日記の中より」(『筑波』第102号、1936年9月)。
- 桑原亮川(亮太郎) 1937 「児童俳句の教育的価値に就いて」(『二畳庵草稿(三)』に収録、魚沼市教育委員会所蔵「桑原亮太郎文書」所収)。
- 桑原亮太郎 1973 「浦佐小学校在勤中の思い出ー特に赴任当初と鰯島雪中派出校時代を偲びてー」(浦佐小学校創立百周年記念実行委員会編『百年のあゆみ』大和町立浦佐小学校)。
- 桑原亮川 1974 「二畳庵日録」(『文芸ことぶき 亮川先生米寿記念号』小出町公民館)。
- 小出町教育委員会編 1998 『小出町史』下巻、小出町。
- 小島初子 1999 『天寵残影ー宮芳平伝ー』冬芽社。
- 近藤憲二 1965 『一無政府主義者の回想』平凡社。
- 齊藤武雄・他、町田等監修 1987 『定本中山晋平ー唄とロマンに生きた全生涯ー』郷土出版社。
- 佐々木敏二・小田切明德編 1979 『山本宣治全集』第7巻、汐文社。
- 佐藤泰治編 1977 『八海(魚沼)自由大学書簡集』小出町文化財調査資料第1輯、小出町教育委員会。
- 佐藤泰治 1978 「魚沼・八海自由大学発祥の考察」(『魚沼文化』第11号)。
- 佐藤泰治 1979 「越後の自由大学をめぐる二・三の問題」(『自由大学研究』第6号)。
- 佐藤泰治 1980a 「本県自由大学運動の研究」(『新潟県史研究』第7号)。
- 佐藤泰治 1980b 「川口自由大学序論」(川口町歴史民俗研究同好会『会報』第2号)。
- 佐藤泰治編 1981 『小出町歴史資料集』第1集[近代教育編Ⅱ]、小出町教育委員会。
- 佐藤忠男 1974 「土田杏村と自由大学」(朝日新聞社編『思想史を歩く』下、朝日新聞社)。
- 柴本枝美 2005 「1920年代日本における山本宣治の性教育論ー『人生生物学』講義に着目してー」(『教育目標・評価学会紀要』第15号)。
- 柴本枝美 2008 「山本宣治の性教育論における性生活調査の位置づけと役割」(『創発 大阪健康福祉短期大学紀要』第7号)。
- 新明正道 1978 「土田杏村の思い出」(『信州白樺』第29号)。
- 住谷悦治 1976 「『信濃自由大学』を想う」(『赤旗』1976年12月27日、のち『自由大学研究通信』第3号、1980年、に転載)。
- 高倉輝 1923 『我等いかに生く可きか』アルス。
- 高倉輝 1929 『近代劇全集』X X XⅧ、露西亜篇、第一書房。
- 田中秀臣 2001 『沈黙と抵抗ーある知識人の生涯、評伝・住谷悦治ー』藤原書店。
- 田辺生 1924 「真実児童村 伊米ヶ崎小学校を訪ねて」(『新佐渡』1924年12月19日より連載)。
- 土田杏村 1922 「編輯余録」(『文化』第4巻第5号、1922年10月)。
- 土田杏村 1924 「自由大学の意義」(佐藤泰治編『八海(魚沼)自由大学書簡集』小出町文化財調査資料第1輯、小出町教育委員会、1977年)。
- 土田杏村 1932 『農村問題の社会学的基礎』改版、第一書房。
- 戸田達雄 2016 戸田桂太編『増補私の過去帖』文生書院。
- 富田碎花 1925 「民族性とその芸術的表現」(『野幌林間大学講演集』第1輯、北海道林業会)。
- 長尾喜三郎 1969 『回顧録』私家版。
- 中川杏果 1967a 「杏果交友」(『躍進日本』1967年1月号、ブログ「佐渡人名録」所引、sado2298.blog.fc2.com/blog-entry-353.html)。

- 中川杏果 1967b 「杏果自伝」(『躍進日本』1967年10月号、ブログ「佐渡人名録」所引、sado2298.blog.fc2.com/blog-entry-353.html)。
- 中川杏果 1968 「魚沼・八海自由大学とその後」(『土田杏村とその時代』第7・8合併号、のち『自由大学研究』第6号、1979年、に転載)。
- 中川杏果 1986 「自由大学関係者の証言(5)」(『自由大学研究』第9号)。
- 中川得立 1916 リッケルト著・中川得立訳『認識の対象』岩波書店。
- 長島伸一 2022 『民衆の自己教育としての「自由大学」－上田・魚沼・八海・伊那・福島・上伊那・松本・群馬・(越後)川口－』梨の木舎。
- 中野光 1968 『大正自由教育の研究』黎明書房。
- 中林昌平 1971 『私の一生の生活』私家版。
- 中山卯郎 1987 「音楽家としての生涯」(齊藤武雄・他、町田等監修『定本中山晋平』郷土出版社)。
- 新潟県知事官房 1924 『新潟県勢一斑』。
- 野口雨情 1920 「童謡の選後に」(『金の船』第2巻第6号、1920年6月号)。
- 野口雨情 1921 「童謡の選後に」(『金の星』第3巻第9号、1921年9月号)。
- 野口雨情 1923a 『童謡十講』金の星出版部。
- 野口雨情 1923b 『童謡教育論』米本書店。
- 野口雨情 1923c 『童謡と児童の教育』イデア書院。
- 野口雨情 1924 「童謡の選後に」(『金の星』第6巻第1号、1924年1月号)。
- 野口存彌 1989 『沖野岩三郎』踏青社。
- 長谷川郁夫 2006 『美酒と革囊－第一書房・長谷川巳之吉－』河出書房新社。
- 林広策 1979 「自由大学関係者の証言(2)」(『自由大学研究』第6号)。
- 東道人 1995 『野口雨情 詩と民謡の旅』踏青社。
- 星野右一郎 1973 「伊米ヶ崎小学校の追憶」(『東京と小出郷』第4号)。
- 星野右一郎 1978 「式典行事の記録」(『八海自由大学記念碑建立記録 東京伊米ヶ崎校友会会員名簿』東京伊米ヶ崎校友会)。
- 堀切正人 1995 「宮芳平と大正期の洋画」(『待兼山論叢』美学篇、第29号)。
- 前野良 1983a 『上田自由大学と今中次麿博士の政治学』私家版。
- 前野良 1983b 「(資料) 魚沼自由大学における『政治学講義の内容』」(『自由大学研究』第8号)。
- 南魚沼市郷土史編さん委員会編 2018 『六日町史』第3巻(近・現代)通史編、南魚沼市教育委員会。
- 南魚沼市郷土史編さん委員会編 2020 『大和町の近・現代』南魚沼市教育委員会。
- 三村一雄 1983 「柳田謙十郎先生と新潟師範学校専攻科」(『柳田謙十郎－人、思想、行動－』刊行委員会編『柳田謙十郎－人、思想、行動－』学習の友社)。
- 宮崎修二郎 1985 『人の花まづ砕けたり－詩士富田碎花翁のおもかげ－』ジュンク堂書店。
- 宮崎修二郎 1986 「富田碎花文学資料館(五)」(『ポトナム』第63巻第5号、1986年5月)。
- 宮柊二 1979 「自伝抄〈7〉」(『読売新聞』1979年11月12日夕刊)。
- 宮芳平著・堀切正人編 2010 『宮芳平自伝－森鷗外に愛された画学生M君の生涯－』求龍堂。
- 宮芳平 2013 『宮芳平面文集 野の花として生くる。』求龍堂。
- 森山茂樹 1971 「魚沼・八海両自由大学の成立と経過－大正期自由大学運動研究への試み－」(東京都立大学『人文学報』第82号)。
- 矢沢保 1967 「人物でつづる日本音楽史連載第9回 日本の大衆音楽の基礎をつくった 中山晋平」(『ひびき』第169号、1967年10月号)。

- 芳井研一 2018 「八海自由大学と地域文化水脈」(『佐渡・越後文化交流史研究』第18号)。
- 柳田謙十郎 1927 『哲学概説』新潟師範学校攻学会。
- 柳田謙十郎 1967 『柳田謙十郎著作集 自叙伝』第1巻、創文社。
- 山野晴雄編 1973 『伊那自由大学関係書簡(横田家所蔵)』自由大学研究会。
- 山野晴雄 1974 「新潟県における自由大学運動(1)」(『自由大学研究』第3号)。
- 山野晴雄 1975 「新潟県における自由大学運動(2)」(『自由大学研究』第4号)。
- 山野晴雄解説 1979 「魚沼自由大学関係資料」(『自由大学研究』第6号)。
- 山野晴雄 2008 「若き日のタクラ・テルー作家への道」(桜華女学院高等学校『研究紀要』第4号)。
- 山野晴雄 2019 「タクラ・テルの警視庁脱走と三木清の獄死」(<http://www7b.biglobe.ne.jp/~ta-kakuraterukenkyu/kakakuratomiki.pdf>)。
- 山野晴雄 2022 『上田自由大学の歴史』自由大学研究・資料室。
- 山野晴雄 2023 『大正デモクラシーと地域民衆の自己教育運動－自由大学運動の研究－』自由大学研究・資料室。
- 湯本英一 1972 「当時の思い出を語る」(『越南タイムズ』第1109号、1972年1月1日)。
- 由良哲次 1968 「魚沼自由大学の思い出」(『土田杏村とその時代』第7・8合併号)。
- 和田英子 1998 『風の如き人への手紙－詩人富田碎花宛書簡ノート－』編集工房ノア。
- 和田登 2010 『唄の旅人 中山晋平』岩波書店。
- 渡辺泰亮 1922 「魚沼の夏季大学講師土田杏村氏を紹介す」(『新潟毎日新聞』1922年7月27日)。
- 渡辺泰亮 1925a 「魚沼、八海自由大学便り」(『自由大学雑誌』第1巻第2号、1925年2月)。
- 渡辺泰亮 1925b 「我等の自由大学」(『新潟毎日新聞』1925年8月1日)。
- 渡辺泰亮 1943 「脈管の旋律は奏でる」(『新潟第一師範七十年史』新潟第一師範学校)。
- 渡辺はつ江 1979 「八海自由大学が生まれた素因」(『自由大学研究』第6号)。
- 渡辺亮村(泰亮) 1929 『佐渡おけさ』郷土芸術叢書第一編、ロゴス書院。

* 本稿は、拙稿「新潟県における自由大学運動(1)(2)」(『自由大学研究』第3号、1974年、同第4号、1975年)をもとに大幅に加筆修正を行ったものである。なお、拙著『大正デモクラシーと地域民衆の自己教育運動－自由大学運動の研究－』(自由大学研究・資料室、2023年)所収のものに一部加筆・修正をした。